
月神の祝祭 ～月神の娘と夜の王子～

悠月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月神の祝祭 ～月神の娘と夜の王子～

【Nコード】

N1046D

【作者名】

悠月

【あらすじ】

エスタニアの第8王女であるセイラは月の女神の名を冠する娘。ある日、都から使者がやってきて隣国のアリオスの王子に嫁ぐ事が決まったと言う。その存在すら伝わってこない王子とは……

始まりの物語

月の女神は言いました。

「そなたの色のなんと美しいことよ」

月の女神は漆黒に身を浸しゆっくりと目を閉じました。

「すべての色を内服し、誰の色にも侵されぬ」

金の髪が彼女を守りその姿を闇に照らし出しました。

「優しき闇は人々の眠りを守る」

星々が子守唄を歌いだしました。

鳥は羽を休め、幼子は夢の中。

「それでも恐ろしいというのなら私が路を照らしましょう」

月の女神は何も無い暗闇に手を伸ばしソレを抱きしめました。

「宵闇を二人で守りましょう」

こうして夜の神のジンと月の女神のリーズは夫婦となったのです

～エスタニア国の神話より～

第1話：誕生

アリオスの冬は早い。

短い夏が終わるとあつという間に寒気が忍び寄り、木々は冬支度を整え、冬がくる。

都のタナトスにも初雪が降り始めた。

ちらほらと舞う雪を背景に堅固な城はズンと佇んでいる。

堅牢を絵に描いたような城はどこか冷たい印象をもたらすが、城内はとって代わって熱気に満ちていた。

王妃のサンディアが身ごもったとの知らせが届いて約十月。

昨夜陣痛を訴えた彼女のもとに、侍医が駆けつけて十数時間が経過しており、真つ暗だった空も明るさを増してきた。

それでも空は重い雲が覆い、今か今かとやきもきとする人々に一抹の不安を与えていた。

そわそわと落ち着きないのは国王ばかりではない。

生まれてくる御子が王子なら、姫君ならばと多くの人々の内で計算がなされていた。

現在国王に子ども一人。

側室であるシャラが産んだルーファ王子のみだ。

王子ならば、側室が産んだ第一王子につくべきか、正室の産んだ第二王子につくべきか。

「お生まれになりました。王子です」

喜ぶべき言葉を侍女は青ざめた声で告げた。

色めき立つはずだった臣下たちは侍女のあまりの顔色に声を失った。

王妃に何かあったのかと引き止める侍女を無視して国王は王妃のいる部屋に入った。

百戦錬磨で知られる国王は足を止め息を呑んだ。

その視線の先に王妃が居た。

王妃は部屋の中央で立っていた。振り乱れた髪を腰までたらし、下半身は産後の血で赤く濡れている。

王に気がついたサンディアは胸元に赤子を引き寄せ狂気のように嗤った。

「かわいいでしょう？ 貴方の子よ」

赤子は産声を上げることなく、紫色の瞳で父親を見つめていた。

「ふふふ。キレイな白色」

赤子は白かった。

微かに生える髪の毛も、本来なら血の通った色をしている柔肌も、まるで人形のように瞬き一つしない。

人々の内に沸き起こる恐怖を煽るようにサンディアは言葉を続けた。

「さぞやあの女の血が映えるでしょうね」

赤子の頬に口付けながらあの泥棒猫のと女は嗤った。

もはや威厳のあった王妃の姿ではなかった。

狂人のように嗤い続ける母親の腕の中で赤子は瞳を赤色に変えた。

「ねえ、アリオス国王陛下！ふふふふ。あはっははははははは。可愛い可愛い私の子。うふふ。可哀相な私の子。お前の名前はジルフォードよ。」

アリオス国王妃サンディアはその日、一人の王子を生んだ。

側室であるシャラがルーファ王子を産んだ丁度一年後のことであった。

王子の名前はジルフォード。

姿なき魔物の名前である。

第2話：鉾山の街

ファンファールが鳴り響く。

いつもは喧騒に包まれている鉾山の街がにわかに装いを変え始める。

街のメイン通りを仰々しい行列が通り過ぎていき、何事かと人々はその行列を見つめていた。

先頭の従者が持つのは金の豎琴を表した国王の印が入った旗である。

これは現国王のリューデリスク・バルト・タトラⅡエスタニアの守護神に由来する。

赤い地に金の旗は滑稽なほど青い空に映えていた。

いぶかしみながらも誰もその行列の足並みを乱す事はできず、街はずれの屋敷に行列は着々と近づいていく。

屋敷の主は、セイラ・リューデリスク・リーズⅡエスタニア。

このエスタニア王国の第8王女である。

この長つたらしい名前は、己の名前・父の名・守護神の名Ⅱ国名となっている。

なぜ王女がこの都から離れた街にいるか……。

彼女の母親の身分は低く、また第8王女ということもあり、母親の故郷であるジニスの街に屋敷を与えられたのだ。

ジニスは鉾山の街として国内外に知れ渡っている。

エスタニアで採れる鉾物資源はほとんどがジニスのもので、その加工技術は国外からも賞賛されるほどだ。

街が喧騒を沈めている反動のように屋敷の中は慌しかった。

数人しかいない使用人たちは屋敷中を動き回り、何か手落ちは無いかとチェックに勤しんでいる。

なにせ国王直属の使者が来る事など初めてのことだ。

部屋のセッティングにかかり、料理を用意し、目の回るような忙しさだ。

「セイラ様はどこにいったのよ！」

その上、あるうことが王女自身が行方不明なのだ。

王女が勝手に街に出かけるのはいつもの事だ。

街の皆にも可愛がられ、溶け込んでいる。

特に鉱山で働くものたちからは孫のような扱いを受け、セイという愛称で呼ばれている。

母はすでにこの世に無く、父とも疎遠である彼女にとって、それは喜ぶべき事なのだが、いかんせん時期が悪すぎる。

使者はもう目の前なのだ。長旅に疲れた使者を待たすにも限度がある。

「お昼には帰るよ」

そういつていたにも関わらず、姿はどこにも見えず、使者も夕方着くはずだったのに何故か早い到着。

あせらないでいられようか。

「お昼には帰ってくるといったのに！」

廊下で叫んでいるのは、黒目のはっきりした可愛らしい少女だ。彼女は王女の付き人である。

二人は年恰好も近く、互いが幼いときから常に近くにいる存在だった。

「ハナ」

廊下の先で年かさの侍女が少女を呼んだ。

手には皇かなドレスと淡いヴェールを持っている。

次に侍女の口から出た言葉が予想通りで少女は心の中で愚痴った。

セイラ様の馬鹿……

「いや、セイラ様は美しくなれましたな」

楚々と微笑む少女の前で使者は出っ張った腹を揺らしながら笑った。

使者を招いた部屋は急遽作ったようには思えぬほど上品に出来上がっていた。

それが上品であればあるほど、そこで生活してきたものにとっては可笑的い。

けれど、驍の行き届いた侍女たちは慇懃にお茶の用意をした。

「遠いところをようこそおいで下さいました」

セイラ王女は完璧な礼をとって使者を室内に迎えた。

その仕草は都で幾多の貴族のお嬢様を見てきた男も感心するほど

であつた。

お茶と茶菓子を薦めると、それを頬張りながら、なおも少女の美しさを褒め称える。

淡いヴェールで隠された頬はほんのり色づき、ご冗談をと微笑む。鉾脈の街には似つかわしくない深窓のお姫様ぶりだ。

ヴェールで顔の半分が隠れていたとしても関係の無い事だった。父である国王ですらセイラの顔をしらないのだから。

「ご用件は？」

聞き飽きた世辞はほっておき、王女は用件を尋ねた。

国王直属の使者がきたのだ。なにか重要な事に違いない。

「おお。そうでありましたな」

使者はクリームのついた口元を拭きながら、ごほんと咳払いをした。

「セイラ様。どうぞお喜びください」

何をだ

少女が笑顔の奥で鋭くつつこんだ事になど気づくわけもない使者はにこやかに王女を見つめ、

もったいぶった動作で王女に手紙を渡した。

旗と同じく王の印が入っている。

直筆の手紙だ。

手紙を受け取って怪訝な顔をする王女に使者は告げた。

「ご結婚がきまりましたぞ」

「はあ？」

思わず出てしまった声を慌てて引っ込める。

目を丸くする使者から目を離し、崩れたお姫様を立て直す。

居住まいを正して可愛らしく首をかしげ、上目遣いもばっちりだ。

「結婚……わたくしが？」

もとのお姫様ぶりに、先ほどのことは無かった事にしたのか、

使者はにこりと効果音がつきそうなほどはつきりと笑みを浮かべた。

「そうでございますよ。こんな良縁はございません。」

セイラはまだ14になったばかりの第8王女だ。

まだ上には適齢期の王女たちがいるというのにどうしてだろう。

少女の困惑など知らぬげに使者は、彼女の嫁ぎ先を告げた。

「お相手はアリオス王国のジルフォード王子ですよ。」

それで納得がいった。

アリオス国はエスタニアに隣接する武力で成り上がった国のことだ。

ここ数十年でぐんと領土も広がった。

けれど歴史を重んじるエスタニアではなりあがり者を好しとしない。

王女は挨拶もそこそこに手紙を握り締めて部屋を後にした。

残された使者は使用人たちがどうにかしてくれるだろう。

第3話：第8王女

王女の部屋に入り、手紙を放り出し、ヴェールと鬘を乱暴に剥ぎ取って一息つく。

亜麻色の鬘の下から流れ出たのはゆるいウェーブのかかった黒髪だった。

本当はドレスも脱ぎ捨ててしまいたかったが、背中で締め上げているこれを一人で脱ぐ事はできない。

諦めて椅子に腰掛けると背後から声がした。

「ハナ。お前のほうがよほど王女に見えるな」

カーテンの後ろから現れたのは、明るい亜麻色の髪を無造作に束ねた少女だった。

意志の強そうな大きな黒い瞳が面白そうに細められている。

街の少年たちと変わらない格好は所々泥で汚れているが、どちらの少女もいつもの事なので気にも留めない。

そんなことより、もっと重要な事があるのだ。

「セイラ様！」

王女もとい王女に化けた付き人のハナは少女に飛びついた。

言いたいことと言わなければならない事があるのだが、さてどちらから口にしようか。

「お昼には帰ってくるというたでしょう！」

とりあえず、言いたくて仕方が無かった愚痴からにする。

「まだお昼だよ」

指差した時計が指す時刻は3時過ぎ。
夕方というには早い時間である。

「そういうのは屁理屈というもの！」

喚くハナを宥めながらセイラは手を出せといった。

いぶかしみながらも差し出されたハナの手のひらに次々に色とりどりの丸いものが落ちてくる。

赤、青、黄、紫、緑……

「お土産だ」

と色とりどりの銀紙に包まれたお菓子を乗せていく。

そうされれば、怒りも次第に収まって、しょうがないですねと苦笑するしかないのだ。

「悪かったね。こんなに早く来るとは思わなかったから」

本気で予定外だったというように眉を下げられれば、怒りは完全に溶けてしまう。

「そうですね。夕刻だといっていたのに……」

ハナは酒樽のような使者を思い出し、はっと放り出した手紙をセイラに差し出した。

「なんだ。開けてもよかったのに」

受け取った手紙は使者がおし抱くように持ってきたものだという

のに、

セイラはなんともぞんざいに振り、ペーパーナイフさえ使わずに封筒の端を破り始めた。

「そうはいきません。国王直筆ですよ」

「開けてもどうせハナに見せるから同じだよ」

あっさりそう言うセイラにほんのり胸の奥が暖くなり、頬が緩むのを見られないようにと下を向いて封筒の残骸を拾った。

そして、無造作に机の上に座るセイラにハナは衝撃的事実を教えるために口を開く。

「セイラ様、結婚なさるようですわ」

「そうみたい」

意味が分かっているのか疑うほどさらりと流される返事に驚いてハナは声を荒げた。

ドレスに締め付けられていなかったらもっと大きな声が出たに違いない。

「結婚ですよ！ しかもアリオス王国の王子と！」

「そう書いてあるね」

ほらとセイラは手紙をよこした。

書かれた文字は優雅で、けれど内容は事務的にたんと結婚が決まったことを告げていた。

アリオス王国は隣国で、最近軍事力により大きくなってきた国だ。

国王は婚姻による和睦を申し入れてきたらしい。

エスタニア国王も、東の国と険悪なムードになっている現在、西の守りは堅いほうが良いと判断したのであろう。

その申し入れに快く応じたらしい。

「だからって何故セイラ様に」

おそらく、第6、7王女が候補にあがったが、あんな成り上がり国嫌だと突っぱねたのであろう。

どちらも正妃の娘だ。

野蛮だと言われる軍事国家に嫁がせるには抵抗があったのかもしれない。

それに比べ、セイラの母の身分は低い上、すでにこの世にはない。誰も文句を言うものなどいない。かつこの生贄であらう。

何故と問いながらも、セイラにこの話が届いた経緯が容易に想像できて、ハナは頬を膨らませた。

「まあ、いいんじゃない」

セイラは膨らんだ頬を指で突き、空気を抜けさせた。

「どこですか!」

あっけらかんというセイラにハナはかみついた。

「アリオス国がどんなところか興味もあるし。あっちは雪も降るらしいね。楽しみだ」

「セイラ様」

脱力してハナは座り込んだ。

どうしてこの人はいつもこうなのだろう。

どちらにせよ無力な少女に国王の決定を覆す事など出来ないのだ。

「私もお供しますからね」

王女であろうとも覆せない事はハナもよく知っている。

使者も手紙もこれは決定事項だと言っているのだから。

ハナは少々涙目になりながらもきっぱりと言い放った。

これはハナの決定事項。

何があっても覆す事のできない少女の誓いなのだ。

「当たり前。ハナも一緒に雪遊びしなきゃね」

一生を左右する話の中で嬉々として雪遊びの話をする少女に軽くため息が出る。

「……それにしてもジルフォード王子なんていましたかしら。ルーファ王子……今は国王ですわね。彼の話は聞いた事がありますけど、弟君のことなんて聞いた事がありませんわ」

アリオス国のルーファの名は近隣にも知れ渡っていた。

王子であつたときはその優れた武勇で国を大きくするのに貢献し、国王となつた今では武力でなりあがつた国とも思えないほど柔軟に隣国とも渡り合い、治世も悪くないと聞く。

妹姫がいる事はおぼろげに聞いたことがあるのだが、はたして弟君など聞いたことが無い。

「向こうも第8王女のことなんて聞いた事ないんじゃないかな？」

憤慨する友人にセイラはにっこり笑った。

「なるようになるさ」

第4話：アリオス国

「結婚……」

冬の気配が押し迫ってきたアリオス王国で今、巷を駆け巡る噂話は、国王の弟が結婚するというものだ。

大国の姫君と。

そんな政略結婚など珍しくもない。

彼らを驚かしているのは、あの魔物が結婚することだ。

人々は落ち着きなく、ざわめき、まだ見ぬ異国の姫に同情した。

そんな噂話も届かない、王宮の片隅。

膨大な蔵書を抱える書庫は今日もひっそりと佇んでいる。

地下一階、地上三階を誇る大きな書庫は、この時期たった一人のためにあるといってもいい。

一階から三回までは吹き抜けで、壁には隙間なく書架が並ぶ。

柱には賢人たちの姿は彫りこまれ、色ガラスをはめられた窓から差し込む光りによって生を受ける。

けれど今は日も暮れかかった時刻、賢人たちも薄闇に沈んでいた。そこへランタンを持った老人がやってきた。

老人といってもまだ六十代ぐらいであろうか。

長いローブで包んだ身は曲がったところなど無く、その瞳は静かに凧いだ湖の色だ。

「ジン様。今日はよう冷えます。お茶をいれましたから一休みしましょう」

優しくなよく通る声の主は管理人のカナンである。

すると三階から猫のようにしなやかに人が降りてきた。

その人物はこの暗い書庫で明かりすら持っておらず、うすい衣一

枚である。

その人物の髪は暗闇に溶ける事ない、見事な白髪であった。しかし、老人というわけではない。彼はまだ19歳である。ランタンの光りを受け、その瞳が金に輝いた。

「さあ、こちらです」

カナンに促され、ジンと呼ばれた青年は温かい部屋に入った。書庫の片隅に設けられたカナンが寝泊りする部屋である。

中はそれなりに広く、暖炉や簡単な炊事ができる場所もついている。

部屋の中央に置かれた机の上には湯気をたてるカップが二人分と甘い匂いの焼き菓子に乗っている。

いつもの席に着いた青年は冷えてしまった両手を暖めるように、カップを包み込んだ。

薄紅色の液体からは鼻腔を満たす花の香りがする。

青年の名前はジルフォード・アリオス。

このアリオス王国国王の弟である。

王弟もあろう人物が供もつけずに歩きまわるなどもってのほかであるが、この人物については例外だった。

ジルフォードは姿なき魔物の名前を持つ王子にかまうものなどこの王宮にはほんの数人しかいない。

誰もが名前を呼ぶ事にすら戸惑ってしまう。名を呼ぶことは魔物だと言っているのと同義なのだ。

億尾にも出さずに名前を読んでもくれるのは兄である国王とその妻である王妃、肝の据わった数人の家臣ぐらいであり、ジンと親しみをこめて呼ぶものなどカナンだけだ。

ジルフォードは先代の国王と王妃の子どもでありながら国王の座を赦されなかった王子である。

国王と側室の仲を怨んだ王妃が呪いをかけ生んだ子どもだとも言

われている。

その証拠のようにアリオス王族特有の銀髪を持たず、何者の浸食をも赦さないような白髪をしている。

さらに人々を慄かせたのがその瞳だ。

その瞳は特定の色を持たず、角度によって色を変える。

その恐怖と侮蔑を込めて人々は彼を 色なし と呼んだ。

ジルフォードは人々と関わり合いを持つことを避け、ほとんどの時間をこの書庫で過ごす。

カナンは幼少の頃から知り合いで、唯一心を許す人物だ。

傍から見れば、二人の間には会話らしい会話もなく打ち溶け合っているようには見えないが。

暖かい液体は喉元を通り、体全体に染み渡っていく。

その時初めて体が冷え切っていたのだと実感するのだ。

テーブルに乗っている焼き菓子は何れもジルフォードの好むものである。

めったに表情らしいものを出さず、ほとんど人前で食事らしい食事をしない彼の好みを知っているのはカナンだけだ。

好物だといっても表情を変えることなく、他の人から見れば本当に好きなのか判断はできない。

「ジン様」

ジルフォードは名前を呼んだ相手を見つめた。

正面から見れば彼の瞳は紫色になる。

人々が魔物と恐れる瞳もカナンはしっかり受け止める。

「ご結婚なされるようですね。おめでとうございます」

その表情に浮ぶのは本物の賛辞のようだ。

孫を見るような穏やかな顔でカナンは告げた。

「そうらしいね。兄上が言ってた」

ジルフォードは淡々とまるで他人事のように応えた。

もともと政略結婚であることは目に見えているが、ここまで無関心であるのはどうだろうか。

ジルフォードは二つ目の焼き菓子に手を出し、老人もそれ以上この話には触れなかった。

目の前の青年が何事にも無関心を通すのはいつもの事だ。

時には自分の生死にすら関心を持っていないのではないかと思われる。

「もう一杯いかがですか？」

そういうと空になったカップが差し出される。

どうやら今日のお茶は気に入られたようだ。

老人は進んで栄養を摂ろうとしない青年にせめてもと種類の薬草をお茶にブレンドしているのだ。

気に入らない場合でも青年は老人の気配りを汲み取ってか一杯目は飲み干してくれる。

二杯目を飲むのは気に入った証拠だ。

液体を注ぎ終わったカップを青年のまえに置きながら老人は告げた。

「明日には頼んでおいた本が届きますよ」

「そう」

興味のなさそうな声で告げられた言葉にほんのすこし嬉しさが混じっているのをカナンは知っていた。

老人が五十年近くをかけてもまだ読みきれない膨大な蔵書を青年はほとんど読み終わってしまったているのだ。

しかも内容を覚えてしまっている。

調べ事をしていた時、その内容ならと、本と頁数まで指摘してきた時には驚いたものだ。

しかし、その膨大な知識が生かされることも、青年が生かす気もないことをカナンは知っていた。

カナンしてやれる事は、たまにお茶を入れて新たな本を与える事だけなのだ。

カナンはこの哀れな青年を助けてくれるような王女がやってくるところを願った。

セイラ王女がアリオス王国の地を踏むのはあと一カ月後のことである。

第5話：ジニスの人々

玉の加工場はいつでも騒がしい。

硬質な音が響き、火花が散り、時には怒号が行き交った。

ここに来るのも慣れたもので、機具の間をすり抜けて、セイラは目当ての人物に声をかけた。

「ダン」

聞き慣れた声に振り返り、頬を緩ました男は加工場を仕切るダンだ。

首筋を伝う汗を拭きながらセイラの元へと歩いてくる。

「よう。嬢元気か？」

にかりと笑いながらセイラの頭をかき回す。

くちやくちやになる髪もいつもの事なので笑って頷いた。

セイラが年頃の貴族の娘のように髪を結い上げない理由はこの行為のせいでもある。

七割は面倒くさいという理由なのだが、残りの三割は飾りをつけたまま頭を撫で回されると痛いのだ。

以前ハナにせがまれて髪を結い上げ、その姿のままこの加工場に来たとき、同じく大きな手で撫でられ本気で禿げるかと思った。

「昨日の大層な行列はなんだったんだ？」

「お頭、大変だったんだよう」

ダンの隣に居た青年が眉を下げた。

加工場は高い位置にあり、行列には一番早く気がついた。

その可笑しな連中がセイラの屋敷に向かってしていると知って、殴りこみに行こうとしたダンをなんとか止めたのだと身振り手振りで説明する青年の頭に拳骨が一つ。

止めてくれてよかったとセイラは心の中で呟いた。

「都から来た使者だよ」

「使者？都の連中が何の用だ」

声を荒げるダンの周りに加工場で働く男たちが集まってき、口々にセイラに挨拶をした。

いつの間にか椅子が用意され、菓子が行き交い、自主的休憩に入ったようだ。

「私の結婚が決まったんだって」

がやがやと騒がしかった室内がしんと静まった。遠くで地を削る音が聞こえてきた。

周りを囲んだ男たちが目配せをし合い、言葉の真意を確かめる。誰もダンに視線を向けない。

もう少し反応があるだろうと思っていたセイラは拍子抜けし、聞こえなかったのかと同じ言葉を繰り返した。

「誰とだい？」

ぴくりとも反応しないお頭に怯えながら先ほどの青年が尋ねた。

「アリオス国のシルフォード王子だって」

明るい声が不穏な空気を孕んだ部屋に思いのほか響き、男たちはすっと一歩分身を引いた。

「アリオス……？」

地を這うような声にあるものはすぐみあがり、あるものは次に行動すべく準備し始めた。

「そう」

「じるふぁーど？」

俯いていた顔を突如上げたダンに驚き、セイラも微かに身を引いた。

ひくりと痙攣を繰り返す口元と見開いた瞳が怖い。

「どこの馬の骨だ！」

怒号にびりりとガラス窓が音を立てた。
やれやれと数人の男たちがダンを椅子に押さえつけると、ダンはやをむく獣のように喉を鳴らした。

「え……」

一国の王子を馬の骨呼ばわりする彼にどう説明していいのだろう。
セイラとて相手の情報は名前しか持っていない。

「アリオス？」

「アリオス！　今すぐ玉の流通と加工取引の中止だ！」

「ええっ！」

予想だになかった展開にセイラは驚きの声を上げる。
顔を真っ赤にして息巻くダンの肩をしわくちやの手が叩いた。

「止めんか。馬鹿者」

ダンの半分ほどの身長しかない老人は先代の頭だ。
引退した今でもふらりと現れては茶をすすっていく。

セイラにとってダンが父親代わりならば、彼はおじいちゃんが代わりだ。

深い黒曜石のような黒を湛える瞳は鉱山の全てを知っている。

セイラはその瞳を細められるのが好きだ。

冷静な人が出てきてくれてよかったとため息が漏れる。

「娘の門出だ。快く送り出してやろうじゃないか」

その言葉にダンは手を握り締め、ぐぬと唸った。

ダンとて解っているのだ。

国同士の契約に口を挟めぬことぐらい。

けれど、今まで一度として顔も見に来ぬ国王の言いなりにさせるのは腸が煮えくり返りそうなほど腹立たしい。

愛娘を他国の顔も見たことの無い連中の元に送るのも嫌だ。

鉱山の誰もが認めセイラを幸せにしてくれる男に嫁がせようと思っていたのに。

「セイはジニスの娘だ。どこへ行っても変わりません」

「だがよ……」

それでも言い募るダンに老人はふと瞳を緩ませる。
ぐずる子どもによくやってやる表情だ。

大概の子どもはその瞳の色に惹かれるように涙を止める。
その色が突如、性質を変えた。

「アリオスの連中がセイを泣かすようなことがあれば、その時はア
リオスとの契約をすべて破棄じゃ！」

筋張った拳が突き上げられると、その意見に賛同した男たちも次
々に拳を上げ、咆哮する。

絶対泣き言なんて言わないもん……

まだ行く準備も整っていない内からアリオスでの生活規則その一
が出来てしまった。

後で奥さんたちに変なことをしないように注意して欲しいと言っ
ておこうと密かに決めた。

血気盛んな彼らもジニスの女陣には頭が上がらないのだ。

「婚礼には他の誰にも負けねえ贈り物をしてやる」

「うん。楽しみにしてる」

ぼそりとまだ納得してないと感じられる声で呟かれ、セイラは満
面の笑みを浮かべた。

あまりにも騒いでいたため様子を見にやってきたダンの奥さんに一喝され男たちはクモの子を散らすように自分たちの待ち場に帰っていった。

事情を聞いて彼女はきりりと目尻を上げた。

「まったく馬鹿お言いでないよ。セイがたった一人でしくしく泣くもんか。仲間を見つけて楽しくやるよ。あんたらが手を出しちゃ、余計厄介な事になりかねないじゃないか！ まったくうちの男共ときたらろくな事考えないんだから」

ダンはおさんの前で出来るだけ小さくなっていった。

老人はダンが捕まっているのをこれ幸いと早々に逃げ出した後だ。

「心配なのは分かるよ。可愛い娘は嫁にやりたくないもんさ。だけど、この子が人一倍強いのはあんたがよく知っているじゃないか」

気風の良いダンの奥さんは怒ると怖いが慰め方もうまいのだ。

縮こまっていたダンも「おう」と顔を上げた。

彼女はセイラの傍に来るとそっと背を押した。

「行くんだろ？」

「うん」

加工場を抜け、山を登っていけば、街全体を見渡せる場所に出る。少し開けたその場所には小さな盛り上がりがあり、その周りには白い花が群生していた。

まるでセイラが訪れるのを知っていたかのように一番美しい状態を保つ花に笑みを向けた。

「母さん」

土の下に眠るのはセイラの母だ。彼女の墓を飾るために幼いセイラは懸命に彼女の一番好きだった花を植えたのだ。

誰よりも強いと思っていた母はあまりにあっけなく最期を迎えた。病魔が巣くっているとは思えぬほど毎日豪快に笑う人だった。今でもひよっこりと現れるのではないかと思うほどだ。

「セイは結婚するみたい」

セイラは墓の前に座り、まるで其処に母がいるかのように話しかけた。

「しかもアリオスの王子とだよ」

すごいだとセイラは笑った。

アリオスの話はなぜか母がよくしてくれたのだ。

ほとんどが雪の話だったけれど。

嬉々として語る母の言葉を聞きながら何時かアリオスの地を踏みたいなあと思然とした憧れはあった。

それが、まさかこんな方法で叶うなんて予想もしていなかった。

「行ってくるね」

その言葉に「いつてらっしゃい」と風が花を揺らし、「大丈夫」と風に揺らめく髪が頬を撫でた。

第6話：出発の日

話が決まった後にはほとんど拍子にことが進み、あっという間に出発の日となった。

都に呼ばれて父である国王に会うこともなく、いくばくかの使者がジニスを訪れ決まりきった文句を述べて頭を下げていった。

ソレに比べ街中の人々は賛辞と別れの悲しみをない交ぜにして盛大に送り出してくれた。

数人の使用人たちは、屋敷に残り、母の墓を守ると約束してくれた。

鉦山の長であるダンなど厳つい顔を涙でぐしゃぐしゃにしながら笑い「辛くなったら帰って来い」と馬が驚くような大声を上げた。

しめつぽいのは似合わないとはかりに鉦山の男たちは愛娘のようなセイラの旅出を歌を歌い、踊り、酒を飛び散らして彩った。

宴は結婚が決まったと報告した日から出発するその日まで毎日続けられた。

今日はダンの家で、今日は誰々の家だと順繰りにほとんどの家をめぐり、その度に街中の人々が集まり騒ぐのだ。

昨日の夜から今日までが一番騒がしかった。
行商に来たほかの街の人が目を剥くほどだ。

なかなか終わらない騒ぎに堪忍袋の緒が切れた使者が何度も怒鳴り散らしたが、声の大きさに鉦山の男たちに敵うはずない。

ちなみにこの使者は、手紙を届けに来た使者ではない。
体は細く、少々長い前歯をむき出して甲高い声で話すものだから

ダンはずミと呼んでいた。

ずミと命名された使者は、彼らが聞く気がないと知ると、ふて腐れて自分の馬車に閉じこもってしまった。

朝一に出発のはずが、ジニスを出たのはもう日が傾きかけてから

だった。

「ふふ、少し寂しくなりますわね」

馬車に向かい合わせで座ったハナはその様子を思い出して苦笑した。

窓の外は鉾山の面影はもう無く、田園が続く。

仕事をしつつ、何かと人々が行列に目を向ける。

セイラが持参したものは馬車に納まりきるぐらい少ない。

あの長い行列たちは何を運んでいるのか見当もつかなかった。

孤児であったハナは故郷を知らないがジニスは自分の故郷といってもいい場所だった。

そこを離れるのはやはり寂しい。

「どんなに離れていても皆は家族だよ」

言い切ったセイラにハナも微笑を浮かべ頷いた。

「カンタスは良いところだといいですね」

「そうだね」

カンタスとはアリオス国の都のことだ。

自国の都すら知らない二人には他国の都など想像することもできない。

「どれくらいかかるんだ？」

出発して二時間もたたないうちにセイラは愚痴を零した。

もともとじっとしているのを好む正確ではない上に馬車など乗り

なれていないのだ。

普段は着ない裾の長い服で動きを制限されている事もあるのだろ
う。

動けないと思うと余計に動きたくなる。

「……十日はかかりましてよ」

ハナはその様子にため息をついた。

鉱山の街ジニスはエスタニア国の西にあり、国境線にも近い。
しかし、都からほど離れていないにしろ、他国とは遠いものだ。
都からだとい月は優にかかる。

「馬に乗りたい」

ほそりといった言葉はすぐに却下された。

エスタニアでは高貴な女性が馬に直接乗ることなどまずない。

所作が美しく、お淑やかで出過ぎないことが好しとされるのだ。

ジニスでは多少のお転婆も許されたが嫁ぎ先の道中ではまずかろ
う。

このお転婆王女は裸馬をも見事に乗りこなした大の男に感嘆の息を
洩らせたのだが。

「ああ、早く着かないかな」

茜色の空に眩きは静かに消えていった。

第7話：疑問

タナトスはそろそろ冬の装いを整えつつあった。

足元に忍び寄るのは冷気で、足元から全身の熱を奪っていく。

夕暮れには途端に寒さが増し、外を行き交う人々は出来るだけ体温を逃さぬようにローブで身を包み、足早に家へと向かう。

そんな寒さなど知らぬ暖かい室内で二人の青年が対峙していた。

一人は書類に目を通し、一人は壁に身を預けて。

書類に目を通す青年の髪は銀に煌き、彼が手に嵌める指輪形の紋章は王家のもの。

ルーフア・アリオス。

アリオスの国王だ。

その青年に鋭い視線を向ける眼帯の男はジョゼ・アイベリー。

漆黒の衣装で包んだ均整の取れた体と腰に帯びた剣は彼が軍人である事を示し、

真紅の腕章で、軍人の中でもかなり身分の高い事が知れる。

格好を見ずともアリオスで隻眼の軍人といえれば誰もが尊敬と憧れの目を向ける。

「何でダメなんだよ」

不機嫌を隠そうともしない声がジョゼの口から零れ落ちる。

「どうしてもだ」

ルーフアは刺さるような視線も一言でいなし、新たな書類に判を押す。

届けられる書類は後を絶たず、ジョゼが訪ねてきてから三回ほど新たに届けられた。

「何でケイトはよくて俺はダメなんだよ」

「立ち位置が違っただろう」

次第に声が大きくなるジョゼに駄々をこねる子どものようにだと苦笑が浮んだ。

「俺だってジニスのお嬢ちゃんを早く見たいんだよ」

隣国から嫁いでくる王女の出迎えに自分が選ばれなかったことが気に食わないと怒鳴り込んできて早一時間弱。
せめてもの配慮に彼の隊からで出迎えのものを選んだのに、それも気に食わないらしい。

ルーファも戦場を共にする男の性格をよく知っていた。

「ジョゼ・アイベリーという男は私の言葉など聞かぬ奴だと知っているからな」

その言葉から相手の意図を読み解いて、ジョゼはにやりと物騒な笑みを浮かべた。

「ダリアがお茶を用意するようだが、どうだ？」

気が済んだのか背を向けるジョゼに声をかけた。
ダリアは王妃のことだ。

「お忙しい国王様の至福の時間を邪魔するほど野暮じゃないんでね」
ルーファが愛妻家である事は周知の事実だ。

一日に一度は王妃が淹れたお茶を口にすることも。

国王夫婦の日課であるお茶会に居合わせた者は幸せになるなんて可笑しな噂もあるようだが……

確かにお茶も菓子も申し分ないのだが、終始花を飛ばす二人と同じ空間にいるのは少々うざつたいとジョゼは思う。

「いらん気遣いをするより、早く軍の編成案を出して欲しいのだがな。將軍？」

「気が向いたらな。どうせお前が考えてるし」

ルーフアはジョゼが去った扉に向けてため息を吐いた。

確かに彼の頭の中には完璧な編成案が出来上がっていた。

第8話：隣国のお姫様

うんざりするほど馬車に揺られて一行はやつとアリオスの国に入
った。

もう一生分の馬車に乗ったと思うほどだ。

一行の歩みはほんの少し予定より遅れていた。

慣れぬ道であったこともあるが、大部分はセイラにある。川を見
つけば入り、森があれば誘われるままに入り込む。

その度に、行列は歩みを止め、使者から王女らしからぬと説教が
始まるのだ。

それもすべて右から左へと抜けて行くのだからあまり意味は無い。
国境に接する街で一行はアリオスの使者から出迎えを受けた。

毛つやの良い馬が整然と並び、兵士たちが敬礼して待ち構えてい
た。そ

の兵士たちを率いていて最前列にいた青年はケイトと名乗った。

垂れ目気味の瞳は優しい印象を与え、声も軍人とは思えぬほど柔
らかかった。

他の兵士より幾分小柄ながらも、まだ若くこれから成長して行く
のだろう。

その年齢でこれだけの隊列を率いる事ができるのなら実力も期待
できる。

ケイトはセイラ王女を見るなりどきりとした。

小さな王女はぐったりとし、その頬に色がない。

旅の疲れで体調を崩したのかと危惧していれば、俯いた彼女が小
さな声を洩らした。

「
だ」

「は？」

聞き取れなかったケイトは一步近づいた。
近づくほど彼女の小ささが強調されるようだった。
かくりと落とされた首は細く、簡単に折れそうだ。
こんなに頼りない体で故郷から離され、アリオスまで来たのかと
感慨にふけるケイトをよそにセイラはぐっと拳に力を込めた。

「もう馬車なんて嫌だ！」

セイラは天に向かって吠えた。
ここ数日馬車に揺られ続け、自業自得ではあるが、宿からは一歩
も出してはもらえなかったのだ。
アリオスで泣き言を言わないという生活規則その一は、国境を跨
いだその日に破られてしまった。

「セイラ様は馬車がお嫌いですか……？」

何も思いつかず、そんなことを言ったケイトの背後で誰かが噴出
した。

その声に聞き覚えがあるケイトは、まさかとは思いつつ振り返り
はしなかった。

「では、今日一日ここで休息を取りましょう」

「いいの！」

喜色を満面に浮かべる少女に思わず苦笑が漏れた。
合流してすぐに三つ先の街まで行く予定だったが、このまま体調
を崩させるわけにはいかない。

日が沈みかけ、そろそろ火を灯そうかと悩む頃にケイトは部屋から抜け出して、馬を眺めるセイラを発見した。

一定の距離を保ち続けるセイラに馬が怖いのかと思い、ケイトはそっと近づいた。

「乗ってもいい？」

どうやら怖いわけではないようだ。

エスタニアのお姫様は馬になど乗った事がないのだろうと手を差し伸べた。

「どうぞ」

「ありがとう」

乗る手助けをしようと出した手はとられることなく、一呼吸の間に、セイラは馬上の人となっていた。

えっ？

「良い子」

満面の笑みを浮かべたセイラは馬の頭を撫で、手綱を握っている。

「ちょっとかりるね」

馬の腹を蹴ると馬は飛ぶように走り出した。
数瞬出遅れば、もう少女の姿は小さくなりつつある。
慌てて別の馬に飛び乗ろうとすると、横から声がかかった。

「俺がいく」

その声の主も瞬く間に小さくなっていた。
通り過ぎる瞬間、馬上の男の顔は心底面白いといったように笑みを浮かべていた。

あの顔のときは何を言っても聞きやしない。

ああ……まったくあの人は

やはりあの笑い声はあの人だったのだとケイトは肩を落とした。
彼に任せておけば、まず大丈夫だと思いつつ、未だに少女の走りっぷりが信じられないでいた。

初めて任された大役に心躍るのはもちろんだったが、姫君の扱いなんて全く分からない。

タナトスには王妃を始めたくさんの高貴な女性がいるが、やっと一つの隊を任せられるようになったケイトにとっては遠い存在で、故郷の村には老人と子どもばかりだった。

無い頭を振り絞って作り上げたお姫様像を隣国の王女様はことごとく破壊してくれる。

「あなた！　なんてことなさるんですか！」

はるか彼方に追いやった故郷の光景を思い出そうとしていたケイトの上に鋭い声が振ってきた。

あまりの鋭さにぎくりと身体を竦ませて背後を振り仰ぐ。

怒りを露に宿から出てきた少女は、確か王女の侍女でハナと言っただろうか。

「大丈夫ですよ。こちらのものが付いていきましたから、落馬して怪我なんてことにはならないはずです」

「落馬？ そんな心配セイラ様には無用ですわ。私がいいたいのは、何でセイラ様に馬をお貸しになったかですわ！」

正確には、まだ貸したわけではないけれど、少女の剣幕に口答えをすることが出来ない。

言いよどむケイトにハナは指先を突きつけた。

「いいですか？ セイラ様に与えてはいけないものの一位は馬ですの。馬！ 退屈なさっている時はなお更ですわ。ああ、本当になんてことしてくれたんですか」

段々高くなるハナの声に自分はそんなにひどいことをしてしまったのだろうかと不安が湧き上がる。

「馬鹿みたいに駆けていつて迷子になるのなんて目に見えていますわ！ でも、まあいいかで突き進むお馬鹿さんなんですよ。セイラ様は！」

ここまで主をぼろくそに言う侍女も初めてだ。

ケイトの知っている侍女は静かに後ろに控え、けっして口答えなんてしない。

「明日、出発できるといいですけど」

一通り怒りを発散したハナはセイラが駆け抜けていった道の先を見つめていた。

その視線には半分諦めが浮んでいる。

それは怒鳴られるよりもケイトの中に焦りを生じさせた。

「ええっ！」

一日休みを提案したのは自分だが、あまり到着が遅れるのは好ましくない。

王女の後を追っていった人物がいかなる危険から王女を守ってくれるのは確信している。

けれど、連れ戻してくれるかどうかは分からない。

初めての任は早くも失敗か。

「迎えにいつてきます」

手綱を掴み、ケイトは戦場もかくやといった速さで駆け出した。

第9話：隣国のお姫様2

頬を打つ風は冷たいけれど心地よく、ずっと縮こまっていた体がほぐれていくよう。

結われていない髪は自由気ままに跳ね踊り、眼前では空が燃え上がる。

丘の上まで駆け上がると、空は広さを増し、濃さを増す。

感嘆は我知らず零れ落ち、馬の足もその光景に魅入られたかのようになり止まる。

「きれい」

遠く連峰の間に熟れた太陽がゆるりと沈み行くと次第に藍色が忍び寄り、一番星が存在を主張する。

何処から見ても落陽は美しいものとセイラはもう一度ため息をついた。

その後ろで男は別の意味の感嘆を洩らした。

少女が乗っているのはケイトの馬だ。

連れてきた馬の中で一番性格の穏やかな馬ではあったが、それでも軍馬だ。

それを易々としかも言うては何だがちんちくりんの少女が乗りこなすなど驚いた。

速さも貴族の令嬢が趣味で乗馬をするようなものではない。

最初はお姫様の遊びに付き合っただけでやるつもりだったのに、いつ間にか本気で鞭を入れていた。

念願かなって騎兵隊に入った者たちが見たら、さぞ間抜け面をसरだろつ。

男なら軍に誘うんだがな……花嫁じゃなあ

そんなことを思われているなど知る由もないセイラは鬘を撫でながら十分に景色を堪能していた。

そのセイラに一步近づくと男は気になっていたことを問うた。

「セイラ王女は結婚相手に興味はないのですか？」

アリオスの人間に会って半日ほどが過ぎ、それなりに会話を交わしていた少女だが一度も自分の結婚相手について触れてこない。

「ん？」

振り向いたセイラは初めて後ろをついてきた男の顔を見た。

目深に胃を被っているため顔は良く見えなかったが、立派な体躯できつと背は高いだろう。

そして男の左目が目を惹いた。

太陽と同じ色をしている。

落陽の色を写しているのかと思ったけれど、右目は朱を写しながらも黒と知れる。

男が瞬きをした時、左目の上を刃が過ぎた痕があった。

おそらく左目は見えていないのだろう。

けれど、視力を失った瞳はセイラの真価を問いただそうと何かを見ている。

「楽しみは後にとっておくことにするよ」

気にならないわけではない。

あえて問いたださないのは幾ら話を聞いて想像を膨らませても本人に会えばきつと違う感想を持つから。

笑顔を向けるセイラに「そうですか」と僅かに口の端を上げた。

「エスタニアのお姫様は馬になんて乗らないと思っていましたが」

「んゝ他の人たちのことはわかんないけどなあ。けど、乗らないなんてもつたいないよね？」

馬車の窓からじゃこんなに美しくは見えないとセイラは両手を空に伸ばした。

落陽に輪郭が溶け、風を受けた髪も透けて、セイラ自身が光りを発しているように見えた。

男はその光景に目を細め、彼の耳は背後の音を拾っていた。

次第に蹄の音が近づいてくる。

ケイトが追ってきたのだろう。

「セイラ様！ そろそろ宿に戻ってください」

「そうだね。ハナが怒るしね」

息を切らすケイトに告げると、僅かばかり彼の体は強張った。すでに怒られた後だ。

帰ってきた三人を見つけ、使者はキーキーと甲高い声でお説教を始めた。

二人はあらぬ方を向き、一人は懸命に頭を下げた。

その後、ハナにまで掴まるのだが、やはり頭を抱えるのはケイトだけだった。

第10話：魔物

アリオスの街々はあまり飾り気が無く素朴な感じがする。それはどこかジニスを思わせた。

違うのはどんな小さな街でも街道がすべて石畳で整備されている事だ。

途中から馬車の旅も随分と楽になった。

無理を言って時には馬に乗せてもらっていたのだが人目の有る所ではそうもできない。

窮屈な馬車内は窓さえもカーテンで塞がれて、さらに閉塞感が漂っていた。

軽々しく顔を出してはいけないと忠告した使者の言葉などつくの昔に忘れ、窓からこっそり顔を出していたセイラは感嘆をもらした。

「すごいな」

「ほんとですね」

馬車がすれ違っても十分に余裕がある。

街には市がたち賑やかな声が聞こえてき、煌びやかな行列の人々は街道に沿い見上げていた。

不安そうな表情を浮かべるものが多いのはなぜだろう。

タナトスの一つ前の街で馬車が止まっている間に一人の少年が寄ってきた。

四、五歳だろうか。

大きな瞳をセイラに向ける。

頬と耳が赤く染まり可愛い。

「おねえちゃんがお姫様？」

その質問の返答にセイラは口ごもる。
お姫様という柄ではない。

「お嫁さんに来たお姫様？」

「うん……まあね」

嫁ぐために来たのだからしぶしぶ頷いた。
頷いた途端に少年の瞳が曇る。
もしかしてお姫様が予想と違ってがっかりしているのか。

「あのね、あの……」

「どうしたの？」

「お城には魔物が居るんだって……」

「魔物？」

「うん。父ちゃんが言ってたの。だからお姫様可愛そうだって」

じわりと涙を浮かべる少年にセイラは赤い飴玉を渡し、にっこりと笑った。

エスタニアにも魔物はたくさんいるのだ。
長い歴史の中でたくさんのが生み出された。
神だって亡霊だってアリオスの比ではない。

「おねえちゃんが暮らしてたのは、ジニスっていう街だけど、そこ

にも魔物はいたよ」

目を見開いた少年の瞳から一粒涙が零れた。

「ジニスは鉱山の街なんだけど、その魔物はせつかく採った玉を食べてしまうんだ」

セイラは黄色い飴玉をがりりと噛み砕いた。

「でもね、魔物っていつでも優しい生き物なんだよ」

「でも……」

「仲良くする方法を知っていれば大丈夫。心配してくれてありがとう」

「おねえちゃんはお城の魔物と仲良しになれるの？」

「きつとね」

笑顔を向けると少年は尊敬のまなざしを向けた。

遠くで少年を呼ぶ女性の声に少年はセイラに手を振り、走っていった。

暫くすると馬車は動き出し、それから二時間ほど走った。

「もうすぐですよ」

顔を出しているとすぐ前を走ってきたケイトがにこやかに言った。彼の言葉に身を乗り出せば、前方に大きな城壁が見える。

タナトスはぐりと高い塀に囲まれており、街全体が要塞の役割をはたすのだとケイトが教えてくれた。

巨大な門が口を開き、一行を飲み込んでいった。

第11話：対面

セイラは淡い水色のドレスを纏い、いつもは無造作に垂らした髪の毛を結び上げ、真珠を散らしてある。

いつもの少年ぼさは消え、王女といっても差し支えない。

行列が運ぶ荷物の中身を知ったのは用意された部屋に通された後のことだった。

侍女たちが衣装やら装飾品やらを山のように持ってくる。

その量たるや何人王女がいるのかと疑りたくなるほどだ。

けれど侍女に見ればそれなりの地位のある貴族の娘なら当たり前だと。

その言葉に絶句しているうちに、上着は剥ぎ取られ、髪に櫛を当てられる。

散々駄々をこねてみたが、初めてアリオス王国の人々と対面を果たすのだ。

今日ばかりはハナと変わるわけにはいかない。

めかしこんで廊下に出れば踵と石造りの床がぶつかり高い音を奏でた。

それだけでいつもの自分ではない気がしてくる。

隣に立つのはハナでも昔から仕えてくれている老執事でもない。

父であるエスタニア国王が用意した使者だ。

まるでエスタニアの栄華を誇るように金銀で飾られた衣装を身に付けている。

細い肢体には付けられるだけ付けた胸の紋章が重くて、倒れてしまわないだろうかと心配になる。

「はあ……」

いくら無鉄砲で好奇心旺盛なセイラでも緊張はする。

初めての他国で隣にはいつも寄り添う友人の姿もないのだ。

大きく深呼吸して気合をいれ、それと同時に目の前の扉が開けられた。

そこに広がるのは天井が高く、開放感のあるホールだ。

軍事国家といわれるように堅固な石造りのホールだ。

ごてごてと無駄な装飾はないが、そこかしこに飾られた花のおかげで冷たい雰囲気は薄れセイラには好ましく映る。

ただ隣の使者がひどく浮いて見えるが気にしないことにした。

周りから突き刺さる視線が少々痛いのが気にせずに進みでた。

王座の前まで進み深く頭を下げる。

「セイラ殿。良く来てくれた。」

その声はまだ若く、穏やかだった。

セイラに声をかけたのはアリオス国王ルーファ・アリオスだった。銀の髪に碧玉のような鮮やかな瞳の青年である。

その表情は優しくで軍事力を盾にのし上がった国の王には見えない。

その横には金髪に青空色の瞳を輝かせた女性が寄り添っている。

エスタニア国王の後宮にさえこれほど美しい人はいない。

思わず見とれていると、女性がふわりと微笑んだ。

花が咲くようとはこのことだろうか。

美女を見慣れているであろう使者も彼女に見惚れてしまっている。

「王妃のダリアです。こんなに可愛らしい妹ができてうれしいわ。」

声も同じく美しい。

玻璃を叩いた時のように高く澄んだ声だ。

「私もこんなに綺麗な義姉ができるなんてうれしいな。」

率直な感想を漏らすとダリアはもう一度微笑んだ。

隣の使者が急いで言葉遣いを諫めたが、出てしまったものは仕方がない。

視線を少しずらせば、知った顔が目に入った。

あの人は……

銀の甲冑は漆黒に変わっており、色を失った瞳には玉の散りばめられた眼帯がされているが、夕日の中で会った男だった。

セイラの視線に気づいたのか、男は口の端を上げた。

軽く頭を下げて、一番痛い視線の持ち主へ……

何故だろう。

ルーフアより鈍い銀の髪を結い上げた女性が貫かんばかりの視線をセイラに向けているのだ。

暫く見詰め合ってみたのだが根負けしたのはセイラのほうだ。

彼女の瞳からは理由の分からない怒りしか伝わってこない。

「妹のテラーナだ」

ルーフアの言葉にテラーナは頭を下げた。

「よろしく」の言葉に返事はない。

無礼を承知で辺りを見渡す。

これで国王と王妃に顔見せは出来たのだが肝心の夫はどこにいるのだろう。

目の前にはいないし、周りにもそれらしい人は見当たらない。

「それでジルフォード殿下は」

使者もそのことに思い当たったのであろう。国王に尋ねた。

遅刻か……来る気が無いかな？

隣の王妃が目を伏せる。

その行動でセイラは相手が来ないことを悟った。

ちよつと残念な気もするが、そのうち逢えるだろうとその時は高を括っていたのだ。

「それが来る気が無いようで」

どんな言い訳をするかと思っていたが、国王はありのままを告げた。

それにはセイラは呆氣にとられ、使者はしばし呆然としていたが、体制を整えると猛然と国王に食って掛かった。

エスタニアはアリオスとは比べ物にならないほど大国なのだ。

友好のためだといっても顔すら出さないと失礼だと。

ハナがいたらこんなことありえないと憤慨するだろう。

怒った顔がありありと浮んだ。

「どうするおつもりですか！」

なおも言い募る使者の横でセイラは笑がこみ上げてくるのを感じた。

この率直な物言いをする義兄をセイラは氣に入ってしまったよう

だ。

この男の前では先に腹をたてたものが負けてしまう気がする。怒らせるだけ怒らせておいて相手が疲れ、気が殺がれた時にがぶりと噛み付く。

「かまわないよ。ビラスト伯爵。」

確かこんな名前だったはずだ。

ダンの命名通り、ネズミと密かに読んでいたので思い出すのに時間がかかった。

いきなり止められた使者はしばらく口をぱくぱくさせていたが、ようやく「セイラ様。ですが・・・」と言い募った。

「こんな小娘が妻だと知ったらがっかりでしょう。もう少し秘密にしておこう。」

セイラはいたずらを仕掛けるときのように笑いルーファを見る。

「長旅で疲れているんだ。友人が暴れだす前に休んでも？」

「ああ、それは申し訳ない。きょうから貴女はアリオスの住人で我々の家族だ。ゆっくりくつろいでくれ。」

到着一日目はこうして暮れていく。

第12話：部屋

セイラ王女のために整えられた部屋は田舎町のジニスに構えられた部屋に比べようもないほど広く豪華な造りだった。

至る所にレースがあしらわれ、白を基調とし全体に淡い色調で纏められている。

いかにも良家のお嬢様が好みそうな部屋である。

しかし例外はあるようで、部屋に入った瞬間、こっそりとレースを外してしまおうとセイラは思った。

セイラがジニスから持ち込んだものはこの可愛らしい部屋に合いそうもない。

「全くなんて方ですの！」

予想通りハナは烈火のごとく怒り出す。

顔見せに來ないことに始まり、今では花瓶の置き方にまで文句を付けている。

「ハナ落ち着きなよ」

セイラは踝まで沈むふかふかの絨毯の上に持参した本を広げながら苦笑した。

「これが落ち着いてなどいられますか！だいたい国王もそれを許すなんて！」

ハナが地団駄を踏むが、衝撃はやんわりと絨毯に吸収されてしま
う。

絨毯の上でも安眠できそうだ。

「式には会えるさ」

「式まで何日あると思ってるの!」

式までは一ヶ月とちよつとの間がある。

それまでにこの国に慣れて欲しいという心遣いなのだがハナの怒りには逆効果かもしれない。

「ハナ! 見てみなよ」

セイラは丸テーブルの上に置かれた皿を指差した。
その上には可愛い焼き菓子が並んでいる。

「向こうでは見ないお菓子だね」

「そうですね。この白いのは粉砂糖かしら」

ハナはお菓子作りがうまいのだ。

セイラのおやつは専らハナが作っていた。

ハナの気を引くならお菓子の話だということを十分に理解していた。
た。

研究したくてうずうずしているハナに手を付けていいと言つとさ
つそく解体に取り掛かった。

怒りはすっかり何処かへと追いやられてしまったようだ。

第13話：冬の化身

アリオスの大地はすでに白く覆われつつあった。
白い雪の結晶が飽きることなく空から降り続ける。

踝の高さまで積もった雪に足跡を残しながら少女はご機嫌な様子だった。

彼女の国ではさほど雪は降らない。

年に一、二度うんと冷えた日にハラハラと振るぐらいだ。
雪遊びをするほどの雪が降ったに日は数十年に一度の大雪だと騒ぎになってしまう。

ここでは年の三分の一は雪に埋もれているので、人々はさほど關心など持たず、寒いと室内に閉じこもってしまう。

少女はたったひとり白いキャンパスの上ではしゃいでいた。
かれこれ三時間ほど。

冷えた指先も赤くなった頬も気にならないほど雪に没頭していた。

「綺麗」

手のひらにとった結晶はすぐに溶けて消えてしまう。

少々残念に思いながら、次に手を伸ばす。

木の上に積もった雪が一気に落ちるのが嬉しくて仕方ない。
落ちてきたふかふかの雪に倒れこみ、全身で雪を堪能する。

「……」

少女は目を瞬いた。

冬の化身がそこに居た。

雪のように白い髪。

すらりと伸びた肢体。

振り仰ぐ先には無数の結晶が舞い踊る。

一瞬だけ合った瞳はルビーのような紅だった。

言葉を発するのも躊躇われるような光景。

呼吸さえも自然に止まる。

何を見つめているのだろう

視線の先を辿っても灰色の空と白い雪だけ。

手を伸ばしても掴めるのは雪だけだ。

もう一度、冬の化身に視線を戻すとそこには何も居なかった。

本当に一瞬だけ見えた美しい幻なのかと思った。

「そんなわけではないか」

あんなにも鮮明な幻など。

同じ場所に立てば同じものが見えるだろうかと転がったまま身を引
きずるようにして近づいた少女の視線の先には一人分の足跡が残っ
ていた。

少女のものよりも大分大きい。

立ち上がり、その足跡を踏みしめて振り仰ぐ。

「雪好きなのかな？」

視線の先には、やはり白い結晶が舞うばかりだった。

第14話：雪色

セイラがアリオスに来て一週間ほどが経つ。

彼女の評判は概ね良好と言えた。

身の回りのことは自分で行い、ほとんどのことは彼女つきの侍女のハナがいれば事足りる。

大国の姫君とは思えないほど素直に礼を言い、挨拶を欠かさない。

アリオスの城で働くのは身分の高い家の出身ばかりではなく、そういった者達から高い評価を得ている。

アリオスは武の国だ。

女性が馬を乗り回すのも剣を振るうのもかまわない。

けれど王族という目で見ればセイラはあまりに異端なのだ。

その奔放さが一部で陰口の対象になっていることを知っているケイトは軽いため息をついた。

侍女の中には気位ばかり高い貴族の娘もいる。

その娘から見れば姫君のくせにという嘲りと、アリオスに根付いたあの確執のせいもあるのだろう。

ケイトは調練の帰りだった。

廊下を歩いていると数人の侍女が窓の外を見て笑っているのに出くわせた。

確かテラーナ付の侍女だ。

雪が降り積もる庭に何があるというのか。

「どうかしましたか？」

「まあ、ケイト様」

「調練は終わりましたの？」

侍女たちは居住まいを正し、笑顔に向けた。
物腰の柔らかなケイトは、他の兵士より話しやすい事もあり侍女たちの間では人気がある。

「ええ。外に何か……」

窓の外を見下ろして、ケイトはぎょっとし、挨拶をそこそこに駆け出した。

人気のあるケイトがセイラのお守り役に付けられたのを面白く思っていないのが理由の一つだということを彼は知らない。

あの人は何やってんだ……！

ケイトが二階の窓から見たのは雪に埋もれるセイラの姿だ。
ついでに言うとう匍匐前進をしまじめていた。
階段を二つ飛ばしで一階へ。

冷たい風の吹きすさぶ回廊に出て、その姿を見つけると叫んだ。

「セイラ様！」

雪に足をとられながら近づくと、小さな足跡が山ほどとセイラが這ったであろう跡があった。

「……ケイト」

セイラは仰向けになり、近づくケイトに視線を向けた。

「ええ。ケイトです。ケイト・メイスンですよ。セイラ様。貴女は
いったい何をしてるんですか」

「ケイトって何歳？」

「……」

セイラは初めて冑を取った姿のケイトを見た。

鈍い銀色の冑の下にはオレンジに近い茶が潜んでいたのだ。

短い髪は柔らかな色を放ち、ケイトのイメージにぴったりののだが、余計に若くというか幼く見せる要因になっていた。

「……………二十二ですが」

「そう」

実は十七、八だと思っていた。

「分かってますよ！童顔で小さいことくらい。それより本当に風邪引きますよ」

どうやら気にしていたようだ。

珍しくすねたような声に笑いが漏れる。

ケイトは少々乱暴にセイラについた雪を払い、自分が被っていたマントをすっぽりとセイラに被せた。

マントを取り去ったケイトは見ているほうが寒くなるような薄着だった。

「ケイトが風邪ひくよ」

マント引き剥がそうとするセイラを押し止めてケイトは苦笑した。

「鍛えているから大丈夫ですよ。調練の帰りなのでそれしか持つてなくて申し訳ない」

「いやいや、寒いよ」

「貴女に風邪なんてひかせたらハナ殿にんと言われるか……」

しばらく押し問答をしていたのだが、聞こえてきた声に仲良く二人で身を強張らせた。

「お二人とも何をなさっているのかしら。そんな雪の中で」

吹雪の声に石像と化した二人は動けない。

「聞いてらっしゃるの？」

更に冷たくなるハナの声に二人は何度も頷いた。

「なんて格好ですの」

「そうですね。ハナ殿。早くセイラ様を室内に」

セイラを押しやる薄着の男にハナはくわつと牙を向いた。

「貴方ですわ。貴方！ 雪降る中でそんな薄着をするなんて馬鹿ですわ。風邪をひいてセイラ様にうつさないで下さいませ。セイラ様の防寒対策は完璧ですわ。インナーも靴下も二枚ですし、上着は裏起毛、マフラー……」

ハナの視線を受けてセイラはあらぬ方向を向いた。

「セイラ様、マフラーと手袋はどうなさったのですか？」

「え……うん。あの、雪だるまさん2号が」

「はやく取ってらっしゃい！」

セイラは脱兎の如く走っていった。

セイラとケイトは引きづられるように部屋に連れて行かれ、椅子に座らされた。

暖炉には火が入り、室内は丁度良い温度だ。

二人の前の大きなカップにはたっぷりのお茶が注がれ、湯気を立てている。

大丈夫だと言ったものの寒いものは寒いので、ケイトはありがたく上着を受け取り、お茶を口にした。
ほんのりとした甘さが体に溶けていく。

「さっき、冬の化身に会ったんだ」

「冬の化身ですか」

見事にはもった声にセイラは笑い出した。
ケイトはそれは何かの例えだろうと思った。
ハナも雪のことかと聞いたぐらいだ。

「うん、雪色だったね。髪の毛が雪色なんだ」

雪、つまり白いという事か。

それならばケイトには一人だけ心当たりがあった。けれど上司から伝えるなどの支持が出ていた。

「あのお嬢ちゃんが自分で見つけるまで」と。

上司は笑っていたので、命令ではなく彼の楽しみのためにだろう。それにしてもお国柄の違いとはこんなにも出るものだろうか。それともセイラの感性だろうか。

この国で、あの色を雪色と呼ぶものはいない。

「すぐに消えちゃったからな」残念

「だからって匍匐前進なんてしないで下さい」

「見てたの？」

「見てましたとも。セイラ様、もう少し、その……ですね」

「お姫様らしくなさいと言いたいのでしょう？」

ハナの助け舟に小さく頷きながらセイラを見た。

「ダリアの真似事はできないよ」

「誰も其処まで求めませんから……」

王妃であるダリアは外見からして物語から飛び出てきたかのようだ。

笑みの浮かべ方から動きまで文句の付け所がない。
あれをお手本にしろというのは、あまりにつらい。

「あとお姫様の知り合いって姉様ぐらいだけど……それこそ無理」

セイラは何かを思い出したのか空笑いを浮かべた。
エスタニアの姫君なら申し分ないだろう。

例外はあるようだが。

なぜセイラが遠い目をしているのか分からない。

「セイラ様には無理でしょうね。」

ハナも同意するようにほうと息を吐いた。

「それでも、一通りの礼儀作法は身につけているのですけどね」

おかわりと叫ぶ少女からは想像できなかった。

「おいおい頑張ってください」

「うん」

「セイラ様は書庫に行かれました？」

「ううん。行っていない」

「城の書庫は中々面白いですよ。一度行ってみるのもいいと思います」

上司は彼の情報を与えると言ったけれど会う手助けぐらいはして

やってもいいだろう。

「場所は」

「ダメ」

しつとセイラは己の唇に人差し指を乗せた。

「自分で探す」

その言葉に微笑んでケイトはもう一度カップに口を付けた。

第15話：散策

「うわぁ……」

セイラは目の前の光景に思わず声を上げた。

上から下まで視界一杯に本が並んでいる。

全身を独特の匂いに包まれると思わず顔が緩んでしまう。

この日セイラは書庫探しと称して城の内を散策していた。

好奇心の塊としては狭い通路など見つけるとわくわくしてしまうのだ。

ケイトに注意されたこともあり、部屋を出る時こそヴェールを付けそそとしていたが、そんなものすでに取り払っていた。

結った髪の毛も手櫛で下ろし、後は見つからないように注意しながらの探索だ。

人の少ない通路を選んでいると狭い通路に行き当たり、その先には他の建物よりも古びた建物であった。

青みがかった灰色の外壁を蔭が覆い、ドーム状の屋根と重厚な扉を持っている。

人気のない場所にひっそりと佇むそれは隠れ家のように、近づかないわけにはいかない。

悲鳴でも上げそうな扉は予想に反してすんなりと開いた。冷たい空気が頬を撫でると先ほどの光景が広がっていた。

「すごい」

セイラは本を読むのが好きだった。

博識であった母の影響もあるだろう。

しかしジニスのような鉾山の街では学術の街のように大きな図書館があるわけではなく貸本屋が一軒きりだ。

自分が所有しているものも限度があり、一度にこれほど多くの本を見た事がない。

しかもセイラにとってはほとんど見る機会のない外国の本だ。どれほどそうやっていたのだろうか。気がつくと部屋の隅から老人が現れた。

「いらつしゃい」

老人は微笑みながら優しい声で告げた。

「あの、見て回っていいか！」

あまりの興奮に、王女らしく振舞う事も忘れ、言葉は疑問系にすらなっていない。

そんな少女の姿に老人は笑みを深めた。

「はい。ご自由にどうぞ。ここは寒いですから、これをどうぞ」

と暖かそうなケープまで貸してくれた。

「ありがとう！」

セイラはケープを受け取って奥を目指す。

足音が壁に反響して響いた。

とりあえず三階へと部屋の中央の螺旋階段を駆け上り、降り注ぐ色とりどりの光に感嘆しながら賢者の石像に挨拶をする。

ひしめき合った本の背表紙には見た事もないタイトルばかりが並んでいる。

一番奥までたどり着くと、気になるタイトルのものを引き出しては眺める。

寒さなんて気にならない。

本を見る事に夢中になったセイラは一階の片隅で老人がそつとため息をついたことを知らない。

「本当に、間の悪いときに……」

カナンはすぐに少女がセイラ王女であることに気がついた。

本を愛す可愛らしい王女は好ましい人物に映る。

それと同時にカナンの懸念は当たってしまった。

ジルフォードは未だに婚約者である少女に顔を合わせていないのだ。少女が書庫を訪ねてきたところにはここで顔を合わせることもあるだろうと思っていたのだが今日に限ってジルフォードは書庫に現れていなかった。

第16話：神の名

三階の一番奥の本棚に見知らぬ少女がいる。

ジルフォードから見れば知った顔などほとんどいないのだが。

三階の一番奥には古い歴史書が置いてあり、普段余り人の来ない書庫の中でさらに人気のないコーナーだ。

黒いケープを羽織った少女は床に座り、なにやら真剣に本に見入っている。

彼女の見ている色あせた歴史書は、この国の者なら誰でも知っているような国立物語がしるしてあるものだったはずだ。

そんなに面白い物だったかとジルフォードは考えた。

確か自分も初めはここから本を読み始めたのだ。

この城に新しく来た者だろうかふとそんな考えがよぎる。

亜麻色の髪はこの国のものではない。

エスタニアから来た者の一人であろうか。

そこまで考えるとジルフォードはその場所を後にした。

彼にとって少女が何者であるかは重要なことではない。

三階の隅の壁には縄梯子がかかっており、その上はロフトのような空間になっている。

そこはジルフォードの特等席。

机とたくさんのクッションが置いてあるだけの部屋だ。

一日の大半を彼はここで過ごす。

読みかけの本を手にとると壁に背を預け読みふける。

彼の読み物には傾向があるわけではなく、伝記、小説、歴史書、学問書から雑学に至るまで何にでも手を出している。

今日読んでいるものは「ジュエルホッシの優雅な一日」なる本だ。ちなみに昨日読んでいたものは「空間を統べる方法その3」という数学書だった。

面白いのかそうでないのか判断できない無表情で彼は読み進んでい

く。

彼が情報を得ることが出来るのは活字からだけなのである。

彼と進んで会話をしようとする者は少ない。

それを感じてか彼自身から話しかける事などまずないのだ。本を読み終えようとしたそのとき、

「いやああーっ」

下から悲鳴が聞こえた。

先ほどの少女だろうかひっそりとした書庫には思いのほか大きく響いた。

「ど、どうかなさいましたか？」

慌てた様子のカナンの声がする。

聞こえてくるのは階段を上ってくる音だ。

虫でも出たのだろうか。……そんな声ではなかったが。

むしろ感極まってというような感じだった。少々大きすぎる感も否めないけれど。

気になったのかジルフォードは縄梯子を降りた。

おろおろするカナンの後ろにそつと続く。

先ほどの少女は立ち上がり、一点を集中して見ている。

そこにはやはり古ぼけかび臭い本が整然と並んでいるだけだ。

「あつあつた……。」

震える少女の指が行き着いたのは殊更古い本だった。背表紙は擦り切れ、中の紙はすっかり変色している。

金文字で書かれていたであろうタイトルは擦れてほとんど見えない。かろつじて繋がっている紙の束を少女は聖遺物のように丁寧に扱う。

しかし、少女は思案しているようだ。俯いて手の中にあるそれを見つと見ている。

あまりにも脆いその本は表紙を開けた途端悲鳴をあげてばらばらになってしまいそうだったからだろう。

「一階の机を使用してはどうでしょう？」

見かねたカナンが申し出ると、弾けたように少女は顔を上げた。

「……ありがとう。」

やっと自分の失態に気がついたのだ。ほんのり頬が色づいている。

「ついでにお茶を入れましょう。体が冷えましたでしょう」

「うん」

自覚してみれば体の芯は冷え切っている。

思っていたよりも長く冷たい床に座りっぱなしだったようだ。

「さあ、ジン様も一緒にしましょう。」

カナンは気がついていたらしい。

後ろを振り返り微笑みながら告げた。

「……ジン？」

少女の言葉が繋がる。

カナンが体の位置をずらすと青年と少女は向かい合う形になった。少女の大きな黒い瞳が青年の紫色の瞳を捉える。

ああ！ 冬の化身だ

この間見つけた美しい人物はやはり実在したようだ。
雪色の髪は健在だった。けれど、瞳の色が違う。

「君の名前？」

青年は返事をしなかったが少女はそれを肯定だと取っただけ。

「ジン」

少女はもう一度その名前を口にした。なぜかうれしそうに。

「……？」

「いい名前。」

青年は困惑した。自分の名前を褒められた経験などないのだから。
むしろ嫌悪すべき魔物の名前なのに。

「ジンは神の名だ。夜の神の名だ。」

「……」

「ああ、恐ろしい神ではないぞ。夜の眠りを守護するものだ。」

「エスタニアの？」

アリオスの国では聞いた事のない話だ。

青年の声は静かなのにどこか耳に残る。

「うん、そうだ。エスタニアの神だ。エスタニアの神を知っているのか？」

「いや……」

「そうか。ならば今度エスタニアの神話の本を持ってこよう。ふふ。ジンの髪は雪色だねえ。アリオスで見た一番キレイな色」

カナンでさえその言葉に目をむいた。
彼でさえ髪の色に触れたことはない。

「冬の女神でさえ、そんなにきれいな色は持っていないよ。んっ？」

セイラはすいと青年との距離を詰めた。

「わぁ！」

青年の瞳が紫から緑へと色を変える。
光りの反射かと思っていたけれど、そうではない。
本当に色が変わるのだ。

「すごい！　すごい！　すごいー！」

セイラは大事な本を持っていることも忘れ何度も飛び跳ねた。
もっと近くで見ることのできない己の身長が恨めしい。

「月の雫みたい……」

月の雫はジニスでも滅多に取れない貴石だ。

光りの当て方により色を変える石を月になぞらえて名づけられたのだ。

時にはリーズの涙と呼ぶものもある。

緩んでいくセイラの頬を見てカナンもつられて微笑んだ。

予想していたよりもずっと早く、この少女は青年を救ってくれるかもしれない。

言葉に窮している青年に苦笑を向けながら老人が声をかけた。

「さあ、お茶にしましょう」

「うん」

セイラはカナンの後に続く。

途中で振り返り、一向に動こうとしない青年の手を掴んだ。

「ジンも」

なんの億尾にも出さずにとられた手に驚いた。自分のものより暖かい手。

「ジンの手は冷たいな。知っているか？ 手の冷たい人は心が温かいのだ。」

どこかで呼んだ事のある情報だ。

しかし、人と触れ合うことのない彼にとって己の手が冷たいかどうかなど知る由もなかったのだ。

「ああ、そつだ。私は……」

そこでセイラは口ごもった。

自分の姿と行動を振り返って、冷え切った体に冷や汗を浮かべる。ボールをむしりとり、共も連れずに徘徊し、床に座り込んだと思ったら奇声をあげる。

ついでに人の瞳を覗きこむために飛び跳ねた。

さすがにやばいかな〜ケイトに怒られる

「セイだ。」

ちよつと考えてジニスで呼ばれていた愛称を伝えた。

「……セイ」

「そう」

どうせいつかはれるだろう。まあいいやと気楽に頷いた。

青年は軽快に歩く少女の一步後ろに続く。

個室に入ると暖かい空気が頬を滑る。セイラは改めて身の冷たさを知った。

暖炉で焚かれた火といくつもの蠟燭で部屋の中は明るく暖かだった。勧められた席に腰を下ろし、恐る恐る本を机の上に置く。

向かいの席には青年が座っている。

湯気の出るカップを受け取ってお茶を飲みこめば体の中から暖くなる。

「おいしい」

今までに飲んだことのない味だったがセイラはすぐに気に入った。

「それはようございました」

「カナンが淹れたの？」

「左様でございます」

「カナンはお茶を淹れるのがうまいね。私の友達にもうまいのがあるよ。」

ハナの顔が思い浮かぶ。

何も言ってこなかったから今頃怒っていることだろう。

「今度紹介しよう。菓子を焼くのもうまいんだ」

第17話：冬と夜と月

他国に来てもう一週間というべきかまだ一週間というべきか。

めまぐるしく変わった生活環境にも今や慣れ、ハナはアリオスの侍女ですら感嘆するほど完璧にこちらの礼儀作法を覚えていた。

元々順応性は高いため、同じ年頃の侍女とはすっかり仲良しになっていた。

気になるのはやはり主の夫となる人物だ。

この一週間、顔を見せる素振りどころか挨拶状一つよこさない怒りを突きぬけ呆れるばかりだったが、生活が落ち着いてくるとおかしいことに気がついた。

まったくジルフォード王子の話題がでないのだ。

名前を出そうものなら仲良くなった子でさえ奇妙に顔を歪めて、そそくさと去って行く。

これはいったいどうしたことであろう。

未だに容姿はおろか、居場所さえ分かっていなかった。

「ねえ、貴女」

呼び止められ、振り返った先に数人の侍女の姿があった。知った顔ではない。

一週間そこそこで把握できるほど侍女の数は少なくないが、セイラの生活に関わる範囲の侍女には顔見せを終えたはずだ。

「何でしょう？」

「貴女ハナさんでしょう？」

「ええ」

確認などせずとも、服装の違いで分かるはずだ。

「貴女、孤児だったって本当かしら」

言葉は疑問ではなかった。知っていて尋ねているのだ。

「ええ」

孤児であつたのは事実だ。

ハナの言葉を聞いて、侍女たちはさざめきあつた。

孤児でも王族に取り入る事ができるのだと。

まああの王女ですものねと。

「セイラ様の恩寵は誰の上にも注がれますから。あなた方の仰るとおり、私ほど幸せ者はありません」

満面の笑みに言葉をなくしたのは侍女たちのほうだ。
けれど挑むように肢体に力を入れて口の端を歪めた。

「その恩寵とやらが、あの方にも注がれるといいですね」

「できますかしら？」

「あの方？」

聞き返したハナの言葉に侍女の目がきらりと光る。

「あの 色なし のことですわ」

「おやめなさいな。ハナさんはご存じないのよ」

「セイラ様もお可愛そうに」

「魔物に嫁ぐなんて」

ハナの困惑を感じ取って侍女たちは笑みを深くした。

「あら、ごめんなさい。お仕事のお邪魔をしてしまったわね」

多くの疑問を残したまま、侍女たちは優雅に去っていった。

ドアを開けると部屋の主は長椅子に寝そべっていた。

どうやらふかふかのベットより此方のほうが好みのように夜の居場所もそこだ。

ベットの上の皺一つなく伸ばされたシーツは、同じ姿のまま朝を迎える

「セイラ様。帰っていらしたんですね」

部屋を出て行ったときと装いがだいぶ違う気がする。何度文句を言っても意味が無い事を学習済みである。

「先ほどジルフォード殿下について聞きましたの。けれど、色なし

やら魔物やら分からない事ばかりですわ」

「ふうん。まあ会えば分かるんじゃない？」

「そうですね」

頷きながらもハナは釈然としない。

侍女たちの言葉には嘲りだけでなく確かに畏れがあったから。
お茶を入れ始めたハナにセイラは笑顔を向けた。

「今日ね。もう一度、冬の化身に会ったんだ」

「ああ、この間言っていた方ですね」

「うん。彼の名前はジンって言うんだ」

「まあ、幸運なかたですね」

エスタニアで神の名を持つことが出来るのは王家に連なるものだけだ。

自国を遠く離れた場所でその名を聞こうとは。

エスタニアでは生まれたときに王子には男神の名を、王女には女神の名をつける。

セイラの父である現国王はタナトという芸術の神の名が、セイラにはリースという月の女神の名がついているように。

歴代の王子の中でジンの名を貰ったものはいなかった。

かといってジンが嫌われているわけではない。

夜の神は太陽の神と同等の力を持つ存在として崇められ、街の守護神とするところも多い。

けれど誰にも侵蝕されない闇という性質は頑固者、偏屈という印象

を与えるために今まで王家では選ばれなかったのだ。
しかし、妻である月の女神リースの前だけでは表情をかえるという
可愛いエピソードもあり民衆の間では大人気だ。

冬の化身で夜の神

「冬と夜の組み合わせなんて素敵ですね」

冬の夜は空は澄みわたって漆黒に星のきらめきが映える。
鋭い寒さの中にすべてが冴える

「それにね、月の雫みたいな瞳だった」

なによりも衝撃的だったのは美しく色を変える瞳。

「不思議な方ですね。とてもキレイでしょうね」

「うん。とってもキレイだった。カナンっていう書庫のおじいちゃんにも会ったよ」

湯気の立つカップが目の前に置かれた

「カナンはね、とってもお茶を淹れるのがうまいんだ」

書庫で飲んだお茶の色、香り、味などを細かに話してやると、ハナは予想通り会いたいといってきた。

「紹介する約束をしたからね、たくさんお菓子をもっていってお茶会しようよ」

「ええ！お菓子作り頑張りますわ！」

俄然やる気を見せ、レシピの束を取り出すハナの姿に、やっと見つけた本の興奮を語る機会を失ってしまった。

第18話：お茶会

「ハナです。」

ウェーブのかかった漆黒の髪を持つ少女は甘い芳香の漂うバスケットを胸元に持ちにこりと微笑んだ。

数日後、セイラは約束通り、神話の本と自慢の友人を引き連れて書庫を訪れたのだ。

「カナンです。ここの管理人をしています」

老人は柔和な微笑みを浮かべ、少女たちを書庫に招きいれた。

「ジンは？」

紹介したいもう一人が見つからずセイラはあたりを見渡した。

「先ほどまで居られたのですが……」

カナンが珍しく言葉を濁す。

「人見知りが激しいのか？」

少女は首をかしげた。

友人を連れてくるとは言ったものの相手は同意を示したわけではなかった。

まずかっただろうか。

「いえ……」

人見知りか、激しいわけではない。

ただ人と関わる事を極端に避けているのだ。

この前、セイラと関わったのは不可抗力と言っても良い。

「ジン。ハナだ。春雷の女神の名を持つ娘だ。良い子だよ。神話の本とお菓子もあるから良かったら降りてきて。」

書庫内に響き渡る声の後、しばらく時間を置いてから白い影が現れた。

「まあ……」

ハナの上げた声にジルフォードは微かに目線を逸らした。

この国では大概のものが言葉にならない声をあげ、彼から眼を逸らすのだ。

「キレイですね」

だから少女の続けた言葉の意味がよく分からなかった。

この間のセイと名乗った少女の行動こそ理解不能だったが……

「言っただろう？ 冬の化身だって。きれいな雪色だ」

「ええ」

エスタニアは広い国だ。

多くの人種が入り乱れて暮らしている。

髪の色もさまざまだけれど、これほど見事な白はお目にかかれない。厭うなど思いもつかない。

「それに瞳も……」

異国から来た少女たちは臆することなく青年と対峙していた。

「月の雫」

「そう、本当にそうですね。月の雫のよう。」

そう言って少女たちは、お互いの認識があっていることに微笑んだのだ。

「月の雫って知ってる？」

ジルフォードはこくりと頷いた。
知っている。

どんなものでどこの特産品かも。
けれども己の瞳の色がそうだと言っただけの少女たちの思考が理解できなかったのだ。

「私は好きだぞ。」

微笑んだ少女に何も返すことが出来ずにジルフォードはただ立ちすくんだ。

「そろそろお茶を淹れましょうか」

微笑と共に出された提案に少女たちはすぐさま同意した。

「お手伝いいたします。」

ハナはカナンの後ろに従った。

ぽつんと取り残された二人の間をしばし静寂が居座った。
ジルフォードの視線は床の石材の割れ目を辿るかのようになにに向けられたままだった。

伏せられた瞳からは紫は消え、深い碧がほんの少し顔を出す。

「ジン」

呼べば僅かばかり視線が上げられた。

何か対処しきれない出来事にあっってしまった子どものような雰囲気だ。

「ここは冷えるぞ。早く行こう。ほら、本もあるしな」

少女は右手にある本を掲げて見せ、空いた左手で青年の手を取った。その手を引けば、青年は素直について来た。

華やかな香りの紅茶に蜂蜜を一すくい。

机にはガンディと呼ばれるエスタニアの焼き菓子と様々なジャムや蜂蜜が並べられている。

さくさくと口当たりのよいガンディにバースという薄紅色の花弁を持つ花のジャムをつけて食べるのがセイラの好みだった。

「これは色彩豊かですね」

カナンは感心したように息を吐く。

ジャムは全部で6種類。蜂蜜は3種類。

それぞれに色も味も違う。

ガンディも様々な形にあしらわれていて何とも可愛らしい。

「ジャムはハナの手作りだぞ」

まるで自分のことのように誇らしげに告げ、少女は焼き菓子を頬ばった。

「さあ、ジン様もカナン様もどうぞ。」

カナンとハナはこのジャムにはどのお茶が合うのだの、あのお菓子はこうしたほうが良いのだと話し合いを始めた。

案の定、ハナはカナンの淹れたお茶を大層気に入ったようだ。

セイラの向かいに座ったジルフォードは、言葉を発する事はなく、もくもくとガンディを咀嚼している。

おいしくなかったこと危惧しているハナにカナンはそつと耳打ちした。

「お気に召したようですよ。嫌なものは決して二口以上召し上がりません」

どうやら何もつけずに食べるのが良いらしい。

ハナの作るガンディにはナッツと蜂蜜が入っており、そのままでも十分においしい。

普通、ガンディには何も入っていないのだがナッツと蜂蜜はハナのアレンジだ。

あらかた菓子も食べ終えた頃、持参した本を見せることになった。

「ほら、これがハナメリーだ。」

少女が指差した頁には豊かな髪を波打たせた美しい女神の姿が描かれていた。

きりりとした目元も淡い微笑により柔らかく見える。

手には光り輝く雷を持ち、足元には鮮やかな花園が広がる

「春雷の女神、豊穣の女神でもあるんだ。」

なるほど、ハナという少女はこの絵の風貌によく似ている。

「こっちはトゥーラだ。夏と戦を司る女神」

少女は隣の頁を指差した。

ハナメリーと同じく、きりりと意志の強そうな瞳。

けれども引き結ばれた唇のせいで厳格な雰囲気をかもし出している。風になびく、一つに結われた髪、手には大剣が握られている。

豊かな身体を包むのも無骨な鎧だった。

「ジンはこっちだ」

少女が開いたページは漆黒に塗られていた。

それは夜空のようで端々には星がちりばめられている。

「ジンには姿が無いんだ。闇そのものだから。夜の神、安らぎと眠りを司る」

好きに見るといいとセイラはジルフォードに本を預けて席を立った。

この前は、ほんの一部しか書庫の中を見ていないのだ。

今日は続きをやらうと思っていた。

残されたジルフォードは何気なく、次のページを捲る。

そこにはジンと全く同じ構図の闇の中に膝を抱いた女神の絵があった。

リーズ。

月の女神と書かれてあった。

その姿は闇に抱かれ安堵の眠りにいるようだ。

金の髪がゆりかごのように身を包み星の子守唄がその身を守る。

ジンはしばらくの間、その絵を見つめページを捲った。

第19話：暁と闇

セイラは次の日も書庫を訪れた。

ハナは仕事があるそうなので、残念なことに一人きりだ。

書庫に入るまでにたつぷりと雪遊びもした。書庫の扉の左右には不可思議な雪像が並んでいるのが証拠だ。

「こんにちは。カナン」

「いらつしゃいませ」

カナンは不思議な人だ。挨拶を交わしただけで頬が緩む。雪遊びで冷えた体も暖かくなるようだった。

「ジンはいる？」

「三階のロフトにいらつしゃると思いますよ」

後でお茶を淹れましょうという言葉に頷いて階段を上っていく。三階の隅で見つけた不安定な縄梯子を上っていくと、狭い場所に出た。

狭いといっても二、三人は優に寝転べるが備え付けられた机にも床にも本がたくさん置いてある。

それに埋もれるようにして青年の姿があった。

「……入っても良い？」

青年が頷くのを見て縄梯子を上りきる。

入り口は狭いが、中に入るとセイラなら立ち上がっても十分に天井

まで余裕があつた。

壁にあいた窓からは午後の柔らかな光りが差し込み、ふかふかのクッションがたくさん。

入り口が狭いため、冷たい空気もあまり流れ込んでこない。なかなか快適な空間だ。

「聞きたいことがあるんだ。いろんなところに飾ってある鳥って何？カラスかなと思うんだけど」

旗や石像として飾ってある羽を広げた鳥は口になにやら赤いものを咥えている。

その鳥はケイトの鎧の胸にもついていた。

問うのはケイトでもカナンでもよかったのだが、ジンと話してみたかった。

「……あれはマルス將軍の象徴。咥えているのは太陽だと言われている」

「マルス將軍」

この間見ていた本に出てきた名前だ。確かアリオスをつくった人で軍神ともうたわれていた。

「えーっと、暁を背に？　だっけ？」

出だしを思い出そうと記憶を辿る。

「『暁を背に對の魔剣を従えて咆哮せしめし軍神マルス。右手に持ちしは漆黒の刃『月影』左手に持ちしは真紅の刃『陽炎』。『月影』に切り裂けぬものは何もなく、『陽炎』に守れぬものは何もない』」

その国立物語に則してアリオスでは右軍を月影、左軍を陽炎と呼ぶ。

「そう。それだ」

セイラは一番手触りのよいクッションを探り出し、抱きしめた。

夜の色だ

寝転んである角度から見上げると青年の瞳は新月の夜の色に変わる。

「アリオスは太陽から始まるんだね。エスタニアは逆だな。『はじめに闇が意思を持ち、対なるものを創りあげたました』だもん。」

その闇とはあの瞳のような美しい色だろうか。

そうだと良いのにセイラは思った。

「はじめの闇はね混沌だっていう説と夜だ^{ジン}っていう説とあるんだよ。どっちかな」

賢人ですらその答えを知らない。

「ここで本を読んでも良い？」

ダメならカナンの所に行くと言っ前に青年は頷いた。

それに微笑んで目を閉じれば、遊び疲れか居心地のよい場所のせいか急速に睡魔が押し掛かってくる。

「後でね……カナンの所でお茶を飲もうね……」

クッションを抱きかかえ瞼を閉じた後動かなくなった少女に青年は静かに毛布をかけた。

第20話：語り部

「城下に連れて行ってあげましょう」

ケイトにそう言われて、タナトスに來た時以來、初めて街に降りてきた。

さすが都となると随分にぎやかだ。

市の大きさは他の街とは比べ物にならないし、人の多さも半端じゃない。

ついお祭りでもあるのかと呟いてしまうほどだ。

大門から城の門までは太い道が通っているが、一步居住区に入れば小さな路地が有象無象に入り乱れている。

細い階段が無数に走り、ソレを上れば民家の上は繋がっており、平らな屋根の上を自由に歩きまわれる。

タナトスは迷路のようだ。

「すごいなあ」

吐き出した息は白くなり消えていく。

ケイトに連れられて街に來たのはいいけれど、今ケイトからはぐれと戻れる自信は全くといっていいほど無い。

城はすぐ其処に見えているのだが、門まで続く大きな道に出るのも自力では出来ないだろう。

「本当ですね。目が回りそう」

「タナトスは増築を繰り返した街ですからね。こちら辺は新しいからましなほうですよ。裏街に行けば私でも迷ってしまう」

「へえ……」

人がやつとすれ違えるほどの路地を抜けると石畳の広場に出た。
そこには石の舞台があった。

「あれは何するの？」

「ああ、腕試しといいますが……演舞や大会をやることもありますよ」

このような広場は至る所にあるという。

広場の端には人だかりがあった。

そのほとんどは子どもだ。

椅子に腰掛けた派手な男の周りを半円状に囲っている。

「あれは？」

「おそらく語り部でしょう。物語を聞かせるのですよ」

ハナの問いにケイトが答え終わるよりも早くセイラは駆け出していった。

そして子どもの後ろにちょこんと座る。その様子に苦笑しながら二人も後に続く。

「さて、今日は何のお話をしようかね。マルス將軍の話がいいか。エイナの話がいいか……そう言えば、最近エスタニアのお姫様が来たって言うじゃないか」

セイラはぱちりと瞬きをした。

「じゃあ、恐ろしい色なしの話をしようか」

ケイトは色なしという単語に眉を諫め、行きましようとしてセイラの肩を叩く。

けれど、ソレよりも早く男は朗々と語り始めた。

「初雪が舞う、ある寒い日の朝のことだった……」

広場は音をなくし、男の声だけが静かに響き渡る。

子どもたちは口を開けたまま、その話に聞きいつた。

男の巧妙な語りに場を去ろうと言ったケイトでさえ動きを止めてしまった。

「ジルフォードだ」

男が王妃のサンディアから生まれた子どもたちの話を終え、恐ろしい口調から恐怖を感じ取っていた子どもたちの間を明るいつ声で割った。その言葉に男は目をむいた。

「お、お嬢ちゃん？」

「王弟のことだろう。彼の名前はジルフォードだよ」

「お嬢ちゃん。アリオスの人間じゃないね。この国で王子様の名前は禁句だよ」

「なんで？」

「なんでってそりゃ……」

苦笑していた男は急に口ごもった。「なんで」なんて聞かれたことは無い。それは当たり前のことになっていた。

「ジルフォードは彼の名前だよ。色なしなんて呼ぶほうが失礼じゃない」

「う……むう」

返答に困る男にセイラは更に言い募った。

「それに何で恐ろしいのさ。どこか呪われてるの?」

「お嬢ちゃん、ワシの話を聞いてたかい?……王子様はね」

「銀髪じゃないし、碧眼でもない」

「そうだ」

「で?」

「で……とは?」

「銀髪碧眼じゃないから何か悪い事がおきるの?アリオスは国を拡大してるし、優秀な国王を戴いてる。何か問題が?」

「いや、問題って言われても……なあ」

「それとも、ジルフォードは魔法が使えたり疫病を流行らせたり出来るの?」

物語には不思議な力を使う人物がたくさん出てくるけれど、生憎セイラは実際にその力を使う人を見たことが無い。

男の話に恐怖を顔に浮かべていた子どもたちはそれを困惑に変えた。

「怖くないの？」

「呪われてないの？」

「魔法？」

どンドン距離を詰めてくる子どもたちに男は叫んだ。

「そっそんなの知らないよう！ お嬢ちゃん。あんた何者さ。ワシの商売の邪魔したいのかい！」

「邪魔する気はないけど。邪魔したならごめん」

素直に謝る少女に男は口ごもりながら視線を彷徨わせた。

「お詫びに、一つ私がお話をしてあげる。おじさん、この話を商売に使ってもいいよ」

その言葉に男は目の色を変えた。子どもたちもセイラを中心に円を描きなおす。

『あるところに美しい玉ばかりを食べる魔物がいました。』

せつかく苦労して採った玉を食べられてしまうので人々はとても困っていました。

人々はその魔物を口々に悪く言います。

なんて醜い姿だろう。なんと恐ろしい瞳だろう。大きな爪で襲ってくるよ。捕まればひどい目にあうよ。

子どもたちは、その話を聞いて家から出れません。

ある日、人々は魔物を捕まえたのです。

そして鎖で繋ぎ、檻に入れて散々悪口をいいました。

お前などいないほうがいいと。お前は悪い魔物だと。棒で打ち据え、石を投げました。

魔物はぼろぼろと泣き出しました。そこに一人の男が現れました。

「おやめよ。痛い辛いと泣いているじゃないか」

けれど人々はいいました。この魔物が悪いのだ。

「こんなにもキレイな涙を流しているじゃないか」

男が触れると魔物の涙は固まり、美しく光る玉になりました。

「美しいものだけを食べて生きているのに、お前たちの言うように醜いわけじゃないか」

男が檻を開け、魔物を外に導き出すと、その姿は月の光を浴びて淡く光りました。

そこには大きく裂けた口も鋭い爪もありません。

大きな金色の瞳があるだけです。その瞳で玉を探すのです。

「醜いのはお前たちの心だよ」

人々は俯いて視線を逸らしました。
男は魔物を鎖から解き放ちました。

「お前。^{ジニス}街^{ジニス}において。お前に必要な分だけ上げるから玉を捜す手助けをしておくれ」

魔物は男の手をとりました。

男は魔物にサイと名をあげたのです。

サイは喜び、玉を一番美しく見せる方法を教えてくれました。
こうしてジニスは何処よりも優れた鉱脈師の街になりました。そしてジニスでしか取れない半透明な玉をサイと呼ぶようになったのです。」

セイラが一度瞬きをするとお話は終わりだと告げた。

「魔物は怖くないの？」

一人の少年が大きな瞳を瞬かせた。

「魔物は怖いものかな？私はね、魔物はとても美しい生き物だと教えてもらったよ。美しくて優しくて、ほんの少し臆病だと。人はその美しさと優しさに恐れてしまうんだ。自分がひどく醜いと意地悪だと気がつかされてしまうのが嫌なんだって。だから、先にお前のほうが悪い、おかしいと決め付けて近づかないようにするんだ。魔物は臆病だから、違うよって言えないんだ。だからね、仲良くす

るには人が君のこと嫌いじゃないよ。ひどいことなんてしまいよ。友達になろうって言わなきゃダメなんだよ」

「魔物と仲良く？」

不安そうに見つめてくる少年にセイラはふわりと笑った。

「ちゃんと見て」

セイラは少年と己の瞳を交互に指した。

「何にも惑わされずに君が判断するの。本当に恐ろしい？ 仲良くなれない？ なれると思ったたら手を差し出して。とても勇気のいる事だけど、君たちは強い」

「うん。おいら剣をならってる」

「僕も！」

次々に手を上げる子どもたちにいちいち頷いて見せた。

「剣を持つと同じくらいよく考えて」

「うん」

至る所で子どもが頷くのに良い子だとセイラが告げると子どもたちははにかみながら頬を染めた。

「お嬢ちゃん。話に出てきたジニスってのはエスタニアのジニスかい？」

「そうだよ」

「そうかい。他国の話は受けがいいんだよ。さっそく使わせてもらおう」

どうぞとセイラは微笑んだ。

「アリオスの素敵な話でしょうか？」

皆こぞって首を縦に振った。

第21話：思惑と真実

自分に腹違いの弟がいることは母に聞いていた。

その弟が西の離宮からここに移された事も。

ルーファとジルフォードが初めて会ったのは寒い冬の日だった。会ったといっても偶然同じ廊下に居合わせたに過ぎなかった。

冷たい石の廊下に少年は佇んでいた。

その少年が弟だと瞬時に気づいたのは、彼の持つ色彩のためだ。目が合ったのは一瞬、すぐに付き人に視界を遮られてしまった。

彼らはジルフォードがルーファを捉えるのを恐れるように壁を作った。

どうしてこれだけの大人がいて馬鹿みたいな噂話を信じているんだろう。

子どもの思考にも彼らの行動は愚かしく映った。

ほんの僅かに見えた弟は無表情だった。

何の感情も知らないような紫の瞳。

恐ろしくは無かった。

まるで童話の挿絵の人物のよう。

嫌悪するには遠すぎて守るにはあまりにも幼すぎた。

その幼い手をその時、とっていれば何か変わっただろうか。

思わぬところで弟と再会した。

勉強の師であるハマナの部屋を訪ねたときだ。

決まった勉強の時間ではなかったが、どうしても気になることがあり扉を叩くと彼はにこやかに部屋へと案内してくれた。

部屋の片隅にその色彩はぽつりとあった。

とりまきがこの部屋には入ってこれないことになぜか安堵したのを覚えている。

何度かこの部屋で会ううちに、自分は弟と話をしてみたかったのだ

と気づいた。

合わなかった視線が合うようになり、会話も次第に成り立つようになった。

ハマナが賞賛するようにジルフォードの頭はよかった。

西の離宮に隔離されていた間、教育らしい教育を受けていなかったにもかかわらず、知識はルーファの背後に迫っていた。

己の事さえ除けばジルフォードの思考は時に嫉妬を覚えるほど柔軟だった。

もつと多くのことを学ぶべきだ。

ハマナは賢人に違いないけれど全てを教える事はできない。

自分とて十数人の師がいるのだから。

聞けば他に師はいないと言う。

それならば一緒に授業を受けようというところ、ジルフォードは首を横に振った。

「どうして？」

と問えば

「国のため」

まさかそんなことを言われるなど思っていなかった。十にも満たない己より若い少年に

「争いの種は抱え込まないほうがいい」

反論の言葉が見つからず、助けを求めて師を見上げれば、師はそつと目を伏せた。

ジルフォードがどんな出生を辿るうとも一番王位継承権に近いのは事実だった。

王妃であるサンディアの親族はジルフォードを恐れながらも王位につけたいと願い、他国から嫁いできたサンディアの親族にこれ以上力をつけさせてなるものかと、息巻く貴族たちはルーファを推した。幼い己の目には映っていなかったけれどジルフォード派とルーファ派の争いは確かにあったのだ。

「これからアリオスは成長期に入る。国を大きく、豊かにするため。内から崩れる必要は無い。強い王を戴くのら私は表に立つてはいけない」

今思えば十年後に下される王の苦渋の判断をジルフォードは知っていたのだろうか。

その時も、私は手を差し伸べそこねたのだ。

だから今度はけっして逃さぬように

そう思っていたのに予想外にことは運んでいく。

「何笑ってんだよ」

思考を切り裂いて聞きなれた声が落ちてくる。

「ノックぐらいして欲しいのだが」

「ノックもせずに此処に入ってくるのは俺ぐらいだ」

確かにそんな無礼者は目の前の男、ジョゼ・アイベリーだけだ。

「最近嬢ちゃんは書庫に入り浸りのようだな」

「そうらしい」

ルーファの元にもその情報はきていた。

「ケイトが教えたらしいからな。全部お前の思惑通りか？」

にやりと笑う男に首を振る。

思惑など当に超えてしまった。

「セイラ殿はジルフォードを夫だと気づいていないようだ」

「はあ？……あんなのが二人も三人もいるわけ無いだろうが……」

見事な白髪に色を変える瞳を持つ人物など他国を含めたところで二人としない。

「それでも気づいていないらしい」

気づいていないのは問題ない。

噂などに惑わされずにジルフォードを見てくれるのは、むしろ好ましいくらいだ。

予想外なのは……

「ジョゼ、最近街に下りたか？」

「ああ、裏街にはよく行くが。何だ？」

「サンジェリ力通りに行ってみるといい」

その言葉にジョゼは片眉を上げた。

サンジェリカ通りは表街の通りの一つだ。

おちゃ屋や子ども向けの店が軒を連ね、ジョゼがいれば浮くこと間違いないだ。

「いいから行ってみろ」

意味ありげな微笑にジョゼは今日の予定を組み立てた。

第22話：歌

表街にも勿論なじみの店があるのだが、ジョゼには裏街の猥雑さの方が身に馴染む。

今や己の庭のように自由に歩きまわれる。

けれどここはサンジェリカ通り。

通り自体のたくつてはいるけれど、怪しげな煙りのでる煙突もなければ、歌う骸骨もない。

代わりに鮮やかな色で塗られた店に子どもたちの笑い声が響く。

ジョゼは鎧もつけていないし派手な眼帯もつけていない。

それなのに立派な体躯のせい、眉間に皺を寄せているせい、人の目をひく。

ここで何をしろって？

見渡しても変わったところなどなく、子どもたちがわいわいきしゃやらと甲高い声ではしゃぎまわっているだけだ。

いつもの格好ではなくともジョゼは名の知れた人物だ。

幾人かは彼に気づき、目を見開いた。

將軍とおもちゃ屋！

そんな心情が読み取れるようだった。

明日辺りには將軍に隠し子説が広がるかもしれない。

しばらく歩いてみても収穫は無く、特に用も無いので帰ろうとしたときのことだ。

『お城には美しい人がいる。その髪はアリオスの初雪の色。冬の女神から祝福に、雪の色をもらったの』

可愛らしい声が弾むように歌う。

『その美しさに月は微笑んで瞳に千の色を与えたの』

もう一つ声が重なった。

『お城には美しい人がいる。満月の日には紫水晶の色。』

『三日月日には紅玉の色。』

『新月の日には黒曜石の色。』

次から次に子どもたちが歌に加わっていく。

初めて聞いた歌だ。けれど歌われているのは誰なのかすぐに分かる。

どうなってる……

少しばかり前に表街に来たとき誰もこんな歌など歌っていなかった。ジョゼは子どもの腕をとった。最後の言葉の口の形のまま子どもは何事かとジョゼを見上げた。

「その歌、どこで知った？」

「おじちゃんに教えてもらったの」

子どもたちに引き連れられてジョゼは広場までやってきた。

広場の隅には派手な男が一人椅子に座り、弦楽器を弾いていた。どうやらその男が子どもたちの言う「おじちゃん」らしい。

目の前が翳ったので男は顔を上げた。ジョゼと子どもたちの姿を認め、にこりと笑みを浮かべる。

「さあて今日は何の話がいいかい？」

「聞きたいことがあるんだが」

「はいさ。マルス將軍の話かい？」

「こいつらが歌ってた歌について」

子どもたちがまた歌いだす。随分と気に入っている様子だ。その歌を聴いて男は更に頬を緩めた。

「中々良い歌だろう？　ワシが作っただよ」

「あんたが？」

「と言いたいんだがね。ネタは別にあるんだよ」

男は弦を弾く。ポロロンと楽しげに楽器が歌う。

「この間さ、変なお嬢ちゃんが来て、いろんな話をしていたわけさ。それがあんまりキレイなもんだったからさ、歌にさせてもらったんだよ。ジニスの話もよかったけどね」

ジニスと聞いてジョゼの頭に一人の少女が浮んだ。

「アリオスに来て一番キレイな色は雪の色だってさ。それと同じ色の髪を見たってえらく嬉しそうに話すんだよ」

こっちまで嬉しくなるような笑顔だったよと男は続けた。

「そのお嬢ちゃんと一緒に十七、八に見える男は居なかったか？」

「ああ、居た居た。もう一人黒目のぱっちりしたお嬢ちゃんが居たよ」

間違いない。男の会ったお嬢ちゃんとジョゼの想像する少女は同一人物だ。

「王子様の話をするよりずっと受けが良いよ」

ジョゼは驚きを面に出した。

この男のような語り部たちは大概面白おかしく、また恐怖を煽るように「色なし」の言葉を使うのに。

「ははっ。お嬢ちゃんに言われちゃってね。失礼だって……何が恐ろしいんだってね」

ジョゼの驚いた理由が分かったのか男は頬を掻いた。

「そうそう！魔物はキレイで優しくて臆病なんだって。だから怖くないの」

「はっ！」

笑いがこみ上げてくる。

堪えきれずにジョゼは思わず噴出した。

あの小さな体のどこに力があるというのだろう。

十数年も凝り固まっていたものが、どうして簡単にほぐされてしまうのか。

「そいつは本当に良い歌だ。どんどん広めな」

街全体を包むほど。城を揺るがすほど響けばいい。

これは思惑通りではないだろうな。

ジヨゼは執務室で笑みを浮かべていた友を思い出す。あの笑みは苦笑に近かったのかもしれない。

最初は噂になど惑わされずにジルフォードと向き合う相手が必要だった。

それだけのはずだった。

なのに少女は予想外の動きをする。

あの笑みは驚きと感嘆と……少しばかり悔しさが紛れていたのだろう。

きっと同じような顔をしているのだろうとジヨゼは己の顔を一撫でした。

「そうするよ」

「広める」

男の声に子どもたちの笑い声が重なった。

第23話：歌2

『お城には美しい人がいる

髪の色はアリオスの初雪の色

冬の女神が祝福に雪の色を与えたの

その美しさに微笑んで月が瞳に千の色を与えたの

満月の日には紫水晶の色

その美しさに春雷ハナメリーが喜んで知恵を与えたの

上弦の月の日には金の色

その美しさに暁マルスが哄笑して力を与えたの

三日月の日には紅玉の色

その美しさに炎トゥーラが激励に厳しさを与えたの

新月の日には黒曜石の色

その美しさに夜シンが感嘆し優しさを与えたの

泣かないでくれ美しい人

その色を曇らさないで笑っておくれ

太陽よりも輝かしく

泣いておくれ美しい人

その暖かい慈雨を降り注いでおくれ

月よりも麗しく

零れ落ちる言葉は音に乗り、優しく人の間を渡っていく。
子どもたちが高らかに吟遊詩人が緩やかに。

母親は子守唄代わりに歌い父親は仕事の合間に鼻歌を。

『お城には美しい人がいる

他国の神々までもが称賛した美しい人が

お城には美しい人がいる

全てのものが色を無くすほど美しい人が

さあその美しさを讃えに行こう』

ついには街を包む壁を越え、街道を滑っていく。

その音を他国の商人が拾って口ずさみ、踊り子が歌にあわせて衣を
翻す。

絵描きも詩人のその姿を思い描こうと頭を働かす。

『行こう

行こうアリオスへ』

けれども

まだ誰も知らない。

その美しい人物の名前を。

『行こう

行こうタナトスへ』

第24話：名乗り

サンジェリカ通りから帰ってきたジヨゼは変な雪像に目を奪われた。

怪物？

それは街の子どもたちが作るような可愛らしい雪だるまではない。大きく開いた口には牙が備わり、目の部分には毒々しいほど赤い実がはめ込まれている。

それは赤い陽光に照らされて笑っているようにも見える。

城の中でこんなものを作るのは一人しかない。その雪像を辿っていくと予想外の姿があった。

あの青年が雪遊びをしている。

その表情は面白いと言いがたいが、ぺたりぺたりと大きな雪玉の表面を整えている。

その横で最近やってきた少女が更に大きな雪玉をせっせとつくっていた。

耳も頬を寒さに赤く染めながら随分と楽しそうだ。

不器用な手つきの青年と楽しげな少女を笑いを堪えながら暫く見つめていると、書庫の扉が開き老人の声がした。

「お茶の準備ができましたよ」と。

その言葉に元気に答えながら少女が青年の背を押す。

青年だけを書庫に押しやって、少女はもう一度雪に足跡をつける。

次に扉を開けたのは青年だった。

少女は青年に赤い実を見せている。

「これをつけたら行くから、先に中に入って」とでも伝えているのだろう。

渋々といった様にゆっくり扉が閉まっていく。

ジヨゼは思わず声を立てて笑った。

「あ……」

セイラは腹を抱える男を見つけた。
最初に会った時とも二度目に会った時とも違う格好をしているが
ひどく印象に残っている男だ。

「よう。嬢ちゃん」

「やあ。……君は？」

不敵でありながらどこか人懐っこい笑みは魅力的だ。
一度見たら脳裏に焼きつくような。
ホールで会ったときのことともよく覚えている。けれど名前は知らない。

「ああ、そう言えば名乗ってなかったか」

ジョゼは頬を掻いた。

最近では少女の話題が自身の周りに溢れ、とても近しい間柄のような気がしていたが実は名前さえ教えていなかった。
居住まいを正すとジョゼは静かに膝をついた。

「挨拶が遅れたことをお詫びします。我が名はジョゼ・アイベリー。
アリオス国の将に連なり月影を継ぐもの。大陸の華エスタニアの姫。
月の女神の名に連なる者。あなたに会えたことを光栄に思います。」

「君はエスタニアにいたことが？」

さきほどの長い名乗りはエスタニアで最上の意を示す。

「少し」

「そう」

ハナがこぼしていたように一応は礼儀作法を覚えている。次に何をしなければならぬかも分かっている。最上の礼をとられたのならこちらも返さなければならぬ。

「我が名はセイラ・リユーデリス・リーズ」エスタニア。エスタニアの八番目の娘。」

凜とした声が響く。それは普段の声とは性質の異なった声だ。小さな体が圧力を増す。

そこで少女は一度言葉を切った。この後は、王家を讃え、己の血の尊さを語るのが王家に連なるものの常識だ。

「鉦山が育みし異端児。漆黒の血脈に連なることを忘れた者。」

ジョゼはかすかに表情を動かした。

少女はエスタニアの王家から外れたものだと言っているのだ。

「アリオスの武を司る者よ。私もあなたに会えたことを光栄に思う」

少女の顔に浮んだのは己を貶めるものではなくて、誇りに満ちた笑みだ。

ジョゼは深く頭を下げた。

「ジョゼ。そんなに畏まらなくていいよ。嬢ちゃんがかまわないし」

がらりと印象を変えた少女に下を向いたまま苦笑する。
女神のような威厳を見せたかと思うと年相応の姿も見せる。

「エスタニアの王女であり、アリオスの王弟殿下のお妃になる方
?とんでもない」

そう言いながら現れたときのように気楽な雰囲気をかもし出してい
る。

「様とか付けられるのは好きじゃないんだ。」

「おえらい様がたは好きだけどな。そういうの」

「彼らが敬意を払っているのはお偉いさんたちの付属品にだよ。家
柄とか身分とか。中身の無い素振りなんて不快だよ。純粹に尊敬を
表しているしている人もいるけどな。敬称なんて無くても伝わると
思っただけどな」

「そっいうものかね?」

「私は君のこと嫌いじゃない。うん。好きだと思っよ。それを示す
のにジョゼ様と言わないと伝わらないかい?」

「よしてくれ。俺だって様なんて柄じゃないんでね」

「でしょ?」

心底嫌そうな顔をしたジョゼにセイラは笑い声を立てた。

「今日はあの眼帯つけてないんだね」

飾り気の無い黒の眼帯を指差して言うセイラに苦笑をもらす。

「目立つんでね」

「ふん。あれキレイだったから好きなんだけどな。ジンの瞳みたい」

どうしてこの少女は人の驚きと笑いを誘うのだろう。

未だかつて誰もあの飾りの意味になど気づいたものはいないのに。

「今度つけてこよう」

「うん」

「ほら、お茶が冷めないうちに行けよ」

「ジョゼも一緒にどうだ？」

指差された扉をちらりと見ながら告げる。

「今日は遠慮しておこう」

「そっか。じゃあまたね」

手を振りながら扉の向こうに消えていく少女に手を振り返す。

最初はどんな王女がくるのかと不安もあった。

名も知られていない王子の送られる生贄。

思ったとおり母親の身分の yüksek ない第8王女だと知らせが届いた。

少女の名はあつという間に広まったが、

それまでは聞いた事もない名だった。少女も対峙して蔑むのだろうか。

魔物だと。

それなのに一部では神に讃えられたのだと子どもたちが歌いだす。最初から破天荒な少女ではあったけれど、ここまでとは……

「まったくんでもない嬢ちゃんが来たもんだ」

けれど悪くない。

完全に頭を垂れる日が来るのも遠くないかもしれないとジョゼはそっと笑った。

第25話：賭けと真実

「あの様子だと最後まで気づかないかもしれないな」

街での出来事とセイラの様子を伝えたジョゼは行儀悪く椅子に座りながら呟いた。

「それでも構わないがな」

それにルーフアが続く。

政略結婚ともなれば結婚式に初めて顔を合わすということも珍しくない。

互いの正体を知らなくとも仲良くやっているのだから問題はないだろう。

「そうかしらね」

ジョゼの言葉に異を唱えたのは王妃であるダリアだった。

金に輝く柔らかな髪を結い上げて淡い色彩のドレスが更に優しい顔立ちを引き立てている。

「王妃様は気がつくと?」

にやりと笑うジョゼにお茶を差し出しながらダリアはふわりと笑った。

「そうね。あの子ならきつと見つけてくれるわ」

ダリアはもうすぐ義妹になる少女を思い出して笑みを深めた。

ころころと表情を変える少女は本当に可愛い。

最近は雪遊びに夢中であまり訪ねてきてくれないのが残念だけど。

ジルフォードを見つけたときどんな顔をするかしら

あまり変わらない気がした。

あらためてよろしくと言っている姿が容易に想像できる。

「けどな王妃様。おの嬢ちゃんかなり鈍いぞ。語り部の話を聞いても気づかないなんてな」

「誰があの子に正確な情報を与えたのかしら？」

その言葉にジョゼはどういうことだという顔をした。ルーファにも分からない。

ここにいる三人ともセイラにジルフォードの情報を与えてはいなかった。

ダリアも問われれば応えようと思っていたがセイラの口からは“ジルフォード”は出てこない。

「あの子が聞かされたのは悪意のある情報だけよ」

いくら注意していても口さがない噂話が城の中でも飛び交うのだ。自国で、アリオスまでの道中で、城で、街で誰か一人でも事実だけを伝えただろうか。

「あの子が見つけた事実とアリオスが作り上げた歪んだ事実はどこで交わるのかしら。求めるだけ求めて、こちらは何も与えずに鈍いなんて言ったら失礼よ」

閉口するジョゼにダリアはもう一度微笑んだ。

でも、きつと見つけるわ。だって“シルフォード”も“ジン”もあの子の好きな雪色だものね

「式までに必ず見つけるわ。賭けても良いわよ兄様」

ダリアの物言いにジョゼは渋い顔をした。

彼は彼女との賭けに勝ったことが無いのだ。

案の定、思っていたよりも早く、賭けの結果が伝えられる事となる。

書庫でのお茶会は定番になりつつあった。

書庫をぐるりと囲むように日々増えていく雪像がその証拠でもある。その気味の悪い雪像のせいでカナンに苦情が来たとか来ないとか…どちらにせよ数は減ることなく今にいたる。

見かねたハナが撤去しようかと提案したのだがカナンは「このままが良いですよ」とのほほんと笑うのだ。

そのカナンの優しさにつけこんで今日も新たな像が出来つつあった。

「カナン様……そのうち書庫が雪像に占拠されますよ」

ハナは茶葉をポットに入れているカナンに苦笑交じりに告げた。

ハナ自身は菓子を皿の上にきれいに並べていく。

いつものメンバーの半分は外で雪に埋もれている。

帰ってきたときのために暖炉の火は燃え上がり、タオルも毛布もたくさん用意されていた。

「それは楽しそうですね」

「楽しいですか？」

セイラの美的感覚は玉に囲まれて育ったせいか優れているといったも言い。

ダリアやジンの美しさを褒めるのはよく分かる。

けれどもあの雪像はいかなものか。

「可愛いだろう！」と満面の笑みで言われたときは流石のハナも声を失った。

可愛くはないと思う。侍女仲間も不気味そうに見ていたし。

「ジン様が雪遊びをされるなんて初めてですから嬉しいのです」

「……そうなのですか？」

これほど雪が降る国だというのに一度も雪遊びの経験が無いと言うのだろうか。

「ええ」

それどころか他人と遊ぶのも初めてだろう。それほどまでに彼は孤独だった。

「カナン様」

「何でしょう？」

「この間、街に下りましたの。そこでシルフォード殿下の話を聞きました。色なしだと。呪われた子だと」

カナンは目を伏した。

瞳の奥でゆらりと哀しみが漂っている。

噂話だけで嫌なイメージを持って欲しくなかったが口さがない誰かから聞いてしまったのだ。

出来るなら、そのままの彼を見て欲しいと思っていた。

「セイラ様は……何が恐ろしいのかと、どこが呪われているのかと言ったましたわ」

その言葉にはつとカナンは顔を上げた。

「私もそう思いますわ。話を聞く限りちつとも怖くありませんもの。エスタニアで、この髪の色は可笑しいなんて言ったら暴動が起こりますわよ」

大陸一大きな国であるエスタニアには様々人が生活している。

その中で一つの色を嫌悪するなんてありえなかった。

しかも髪や染めるなどの方法で日々髪色を変えて楽しんでいる人も多い。

本当に魔物のような恐ろしい人物だと言うならば絶対にセイラを嫁になんてやりたくないと思っていたのに、その話を聞いて拍子抜けしてしまった。

軽く息を吐くハナに彼女たちは他国から来たのだとカナンは改めて感じた。

カナンの視線の先でハナは「それは良いのです」ときりりと表情を引き締めた。

「アリオスの事情を理解しようと努めています。ジルフォード殿下の立場が不安定な事も……けれど私、許せないことがあります」

聞いてくださいますと机を叩くとカップが悲鳴を上げた。

ハナは眉を吊り上げ口を開いた。

式も差し迫ったこの時期、式には他国の使者も多数訪れる事もあり、国の威厳を見せるためには失敗は出来ないとなんとか打ち合わせが行われたのだ。

そこにジルフォードは現れず、セイラはたった一人壇上に立った。

そのことを語るとカナンは深く頭を垂れた。

それにはカナンの責任もある。

そのことを知っていながらジルフォードを送り出さなかったのだ。ジルフォードにとって辛い場所である事は分かりきっていたから。

「それに、謝罪の手紙どころか、挨拶状すらもらっていませんの」

ハナの怒りにあわせるように湯が沸き、シュンシュンと音を立てる。慌ててやかんを火から遠ざけながらカナンは今の言葉を反芻した。

挨拶状ですか……

確かに毎日のように顔を合わせているが正式な挨拶状など交わしてはいないのだろう。

エスタニアでは交わすのが常識なのだろうか。

その思考を打ち破るようにハナの声が届いた。

「それにしても、どんな方でしょう……外見はなんだがジン様に似ていますけど」

その言葉に彼女たちの事実を知り、カナンが珍しく声を立てて笑うのは数秒後のこと。

ここは書庫の石壁を隔てた外の世界。

吹きすさぶ風も雪像の林が盾となり直接当たらない。

雪像の数は二十を超えた。

像を作るのに飽きたのかセイラは雪山に身を横たえた。

頭上にはこの時期には珍しく青い空が広がっていた。吸い込まれそうな青い空。

視線を横にすると雪の色が広がる。その色をとどつていくと藍色にぶつかった。

空を見上げている青年のマントの色だ。背中に垂れた白い髪がマントの色によって余計に強調されている。

雪色……白……

『お城には魔物がいるよ』

『魔物はとても美しい生き物なんだよ。そして優しくて臆病だ。』

『赤子は白かった』

『雪の色』

今までグチャグチャだった情報が己の場所を知っているかのように
ぱちりと一箇所に納まっていく。

青年と視線が交わったとき、それは継ぎ目無く一つになった。

「ねえ」

夜の神と姿の無い魔物

「ジンがジルフォード？」

青年は静かに頷いた。

「そっか」

式には会えると言いつつ、とっくに対面を果たしていたのだ。
しかも絶対に記憶から薄れない美しい世界で。セイラは立ち上がり
雪をはらい、青年の正面に立った。

「私はセイラ。セイラ・リユーデリスク・リーズ＝エスタニア」

陽光に亜麻色の髪が煌いて青年の脳裏に月の女神の像が浮んだ。
そして、かつて青年を月の子と呼んだ一人の女性の姿が。

「これからよろしく。ジルフォード」

笑顔と共に差し出された手を青年は初めて己の意思でとった。
手袋もなしで遊んだ手のひらはどちらも同じほど冷えている。

書庫に入ろうかと提案しかけたその時、書庫から飛び出てきたハナがカナンの笑いの原因を伝えたが、セイラはにっこり笑って繋いだ手を掲げて見せた。

「今、挨拶終えたんだ」

「……そうですね。冷えてしまいましたでしょう？ お茶にしましょう」

ハナはその姿に苦笑して、二人の背を押した。

第26話：剣

「お前、嬢ちゃんに書庫の事教えたらしいな」

書庫に向かう廊下でケイトは上司であるジョゼに捕まった。

こんなところでふらふらと何をしているのか。

またサボっているのだなとため息をついた。そのうち部下たちにしわ寄せがやってくるだろう。

「書庫があるということを教えてはいけないと命令されませんでしたからね」

「やつと反抗期か？」

「誰が反抗期ですか。それより今度はどんな問題を持ち出す気ですか？」

訓練以外の仕事はよくサボるので気にしていなかったのだが、やたらと機嫌がよい上司に嫌な予感がする。

「今から訓練場に連れて行こうかと思ってな」

「……訓練所ですか」

「あそこの連中に認められないようならば、やってはいけないだろう」

「そうですね……何か起きそうな気がしますね」

「だろう？ アレだけ馬を操れるんだ。この際、鬼神の如くだといいな」

「面白がらないで下さいよ」

笑みを浮かべる上司にケイトは深い深いため息をついた。

「だからハナ嬢は任せた」

「は？」

目を丸くするケイトを置き去りにジョゼはさっさと書庫に足向けた。

ジョゼは追いついたケイトに「何をするつもりですか」と憤然と言い募るハナを押し付けてセイラを捕まえた。
その様子を部屋の隅で見ている青年に一言。

「ジルフォード。嬢ちゃんを借りるぞ」

「ん？ 二人は仲良しか？」

その言葉にジョゼの乱入に驚いていたカナンが眉を下げる。

「まあな」

ジョゼはふつと口の端を上げた。仲良しとは違つかもしれないが。

「嬢ちゃん、やっとアイツがジルフォードだって気づいたんだってな」

賭けに負けたジョゼは代償にダリアの菓子作りを手伝わされたのだ。

「うん」

「じゃあ行くぞ」

「何処へ？」

訓練場に入ったセイラは歓声を上げた。

それに何事かと女性たちが目を向ける。

そう訓練しているのは皆女性だった。髪を高く結び、勇ましく剣を振るう。中には槍や棍を扱うものもいる。

「何事ですか？」

その中でも代表格なのであろう、一番前に立って指示をしていた女性がセイラたちのほうへやってきた。

腰に差しているのは細い剣だ。

「いや、女たちの勇ましい姿をお姫様に見せてやろうかと思ってな」

「お姫様？」

女性はちろりとセイラに視線を向けた。

「エスタニアから来たセイラ殿だ」

「……そう」

新入りの侍女かと思った。まさか隣国の王女だとは。

「私、ダリア様付のマキナと申します」

慇懃に頭を下げながらも彼女の声からは親しみが感じられない。

「セイラだ。よろしくね」

「こいつら皆、侍女だぞ」

アリオスでは侍女ですら武器を扱える。

特に誰か付きの侍女にもあると腕前はかなりのものだ。

「へえー！すごいな」

「エスタニアのお姫様には受け入れがたいかもしれませんが、アリオスではこれが普通です。退屈でしょうけど、見学ならいくらでも」

「ジニスでは女の人は武器もってないもんさ」

平和ボケしたお姫様には分かるまい。

そつ頭の中で吐き捨てようとしたのに次の言葉に思考が止まる。

「奥さんたちフライパンで戦うもん。これが強いんだよね」レンガは飛んでくるし、煮えたぎった油ぶちまけられたら盗賊だって逃げよね」あはは。背中に赤ちゃん背負ってるから強い強い」

「……………」

何この子。マキナのそんな視線を受けてジョゼは笑った。

「嬢ちゃんは何か扱えるのか？」

「んゝ剣なら」

予想していた通りジニスのお姫様はとことんお転婆らしい。
エスタニアで剣を振り回せる女はジョゼの経験上多くない。

「その割には嬢ちゃん武器持っていないのな」

「邪魔なもの」

この言葉にマキナは盛大に顔を歪めた。

「マキナと手合わせしてみたらそうだ？ここで一番強いぞ」

その言葉に周りから不満の声上がる。

いつも一緒に訓練している彼女たちでさえマキナから直接指導してもらえるなど夢のような事なのだ。

「ジョゼはダメなのか？君のほうが強そうだ」

その言葉にマキナは眉を吊り上げた。

侍女頭と將軍の腕を比べられては勝てるわけがない。

「別にダメではないが……」

他の侍女たちはしんと静まり返っている。
將軍と手合わせ？

歡喜よりも恐怖のほうが勝る。

「じゃあ、やろう」

軍人たちが言いたくて言いたくても言えない言葉をセイラはさらにと言った。

「いいだろう」

ジヨゼは苦笑して邪魔な上着を取り払う。

「誰か嬢ちゃんに剣をかしてやってくれ」

セイラはおずおずと出された細身の剣を手首を使って回す。
鋭い風を切る音がする。

それが強くなるほどセイラの顔は真剣味を増し瞳の色が強くなる。

「大丈夫か？」

その様子を見ながらジヨゼはにやりと笑う。

「うん」

借り物の剣はすでにセイラの手に馴染んだ。
自然に開いた訓練場の中央に二人が進んでいく。

「マキナ合図を頼む」

向かい合った二人の横にマキナが立ち、氣遣わしげにセイラを見た。こんなに小さな少女に何が出来る。

最初の一撃でその身は吹き飛んでしまいそうだ。

向かい合った二人は互いに礼をした。

セイラの礼はこれから剣を振るうとは思えないほど優雅なもので、マキナは目をむいた。

立ち姿もまるでこれから挨拶を受ける高貴な娘のようだった。剣は腰に差したままだ。

この子分かっているの？

ジョゼの視線を受けてマキナは思考を切り返した。

ジョゼがセイラを傷つけるとは思わないが、何かあれば対処できるようにしておかなければ。

マキナはすつと右手を上げた。

「始め！」

合図があつたのに二人とも動こうとしない。

「君から来てよ」

「嬢ちゃんからどうぞ？」

ジョゼはおどけたように両手を挙げて見せた。

緊張感のカケラもない。

仕方ないとセイラが剣を抜くとジョゼも剣を抜いた。銀の刃と漆黒の刃が相手を見据えた。

漆黒……

マキナも実際にその刃を目にしたのは初めてだ。
月影と名づけられた刃は右軍の象徴であり、そのものだ。
全ての色を吸収するように暗く重い色。

そこまで考えてはつとした。

敵うわけがない。あの男は、あんな華奢な少女に魔剣を向けるのか

「待つて……」

言い終わる前にキインと軽い音が木霊した。

いつの間にかセイラが走りより刃を合わせていたのだ。

セイラの体格だと大したダメージを与えられない。

案の定、ジョゼの一押しにその身は弾かれ、宙を飛ぶ。

片足を軸に舞うように回転し、もう一撃。

刃が合わさる寸前、セイラの剣は軌道を変えて首もとへ。

けれど笑みを浮かべたジョゼは切っ先がかするより早く身を引いた。

おいしい

いつの間にかマキナも他の侍女たちも固唾を飲んで二人を見守っていた。

まるで剣舞を見ているようだった。

マキナの主であるダリアの剣筋も優雅だが、それとはまったく違う。

パキイン

もう一度刃を合わすとセイラの剣はか細い悲鳴を上げて碎けた。

魔剣に普通の剣が敵うはずがない。最初の一撃で壊れなかったのは絶妙な力加減のおかげか。

「あ……」

至る所から声が上がる。

残念がるような詰めていた息をやっと吐き出せたような。

「あゝごめん……壊れちゃった」

柄だけになった剣の残骸を見せながらセイラは申し訳なさそうに頭を掻いた。

「いえ……」

マキナは呆然とそれしか言えなかった。

この数分の間にセイラの評価ががらりと変わったのを認めざるを得ない。

「本当に惜しいな。男なら本気で軍に誘うぞ。ケイトより上にしてやるのにな」

ジョゼは剣をおさめ、セイラの頭をぐしゃりと撫でた。

「む」

「だが一撃が弱いな。スピードはあるが」

ざわめきに己を取り戻したマキナは言い募るジョゼに視線を向けた。

「將軍、あまり望むのは贅沢です。セイラ殿、今度私とも手合わせ

をお願いいたします。」

「うん。しよう」

満面の笑みにマキナは微笑んだ。

「それでは」とマキナは侍女たちをまとめて去っていった。

「嬢ちゃんの型はシルフォードと同じだな」

一見、舞うように軽やかにけれど急所を的確に突くように繰り出される刃をジョゼは知っている。

「ジンと？」

「ああ、見ない型だったから師を聞いたんだが話さなかったな」

「私は流れの旅人に教わったんだけどな。」

風のように現れたカエデと名乗った男は、しばらくジニスの街に居座った。

いつの間にか街に溶け込んだ彼に剣を教えてもらうようになったのはすぐだった。

舞のような美しい型に惚れ込んで弟子にしてくれと毎日後ろをついて回った。

最初は拒んでいた彼もついに根負けしたのかある条件を持ち出した。その条件を思い出してセイラは空笑いを浮かべた。

「礼儀作法を完璧に身につけること」

諦めさせるための方便だろうと必死になってハナを巻き込んで礼儀作法を学んだのだ。ハナの方がずっと覚えがよかった。

けれどそれは方便ではなく、カエデが言うにはどんな時にも自然に最初の一撃を出したために必要なのだと。どうにか合格点が出た後、カエデは剣の持ち方から教えてくれたのだ。

そして来た時と同じように唐突に彼は去っていった。もしかしたら彼は、ここにもふらりと現れていたのだろうか。

「ジンは剣術が出来るんだな」

それは意外だった。握った手のひらは剣を持つ人間の手ではなかったためだ。

「ああ。俺も意外だったよ。」

最初にまだ幼かったジルフォードを見に行ったのは興味本位。珍しい外見だったけどこが恐ろしい？

最初の感想はそんなものだ。

ジョゼは誰にも関わらず孤独な少年は血なまぐさい事とは無縁なのだと思っていた。

ジルフォードが剣を握る姿を見るまで。

そんははずは無かったのに。

己の身は己で守る以外、あの少年には術はなかったのに。

傷つけられた痛みより傷つけてしまった痛みに耐えかねて、それでも涙を流すことを知らない少年は全身で泣いていた。

己もその痛みを知っていた。

けれど自分は一人で味わったのではない。

そばに近づいても少年は関心を示さなかった。

アレだけひどい目にあいながらも剣を帯びている人間が近づいても警戒ひとつしない。

怖くないのかと問えば何故かと逆に返された。

「ジンは強いのか？」

何度となく話しかけ、距離が縮まったと思う頃には二人で剣を交える事もあった。

当時自分は軍にいて、今ほどではないが剣に自信はあった。ジルフォードとの間には年の差も体格の差もあった。

それなのに

時に背筋が冷えるほど

「ああ」

もしもジルフォードが普通の王子として育ったのなら……
ルーファすらも凌ぐ将となり、同じ戦場を駆けていただろう。

「ふうん。今度一緒に手合わせしてくれるかな」

「どうだろうな」

頭をかき回されながら力エデの事を聞いてみようとセイラは思った。

第27話：涙の理由

最近セイラを見る侍女仲間たちの視線が変な事に気がついた。
前々から良い印象をもつ者が多かったのは知っていたが、最近ではそれがちよつと違うのだ。

セイラを見る目には尊敬の念が混じっている。

「セイラ様何かやりましたか？」

まさかあの雪像のすばらしさに目覚めたなんてことはないだろう。
そんな失礼なことを思いつつハナは出かけようとする主に上着を渡しながら尋ねた。

「何を？」

それを聞きたいのはハナの方だ。

「まあよろしいですね。夕飯までには帰ってきてくださいな」

カナンがいるから安心だが、一応忠告をして送り出す。

「うん。行ってきます」

元氣にかけていく姿を廊下を行き交う他の侍女たちも微笑みながら送り出した。

本当に何をなさったのかしら？……あの人がらみかしらね

あの人とはジョゼのことだ。侍女たちに変化が現れたのはジョゼが

書庫に乱入してセイラを連れ去った日からだった。悪い事ではなさそうなので、ハナは軽く息を吐くと今日の仕事に取り掛かった。

書庫の石造りの賢人の衣に隠れるように小さな扉がある。今まで気づかなかった秘密の入り口。

誘われるままにドアノブに手をかけると鍵がかかっている。カナンに話すと小さな鈍色の鍵を手渡してくれた。光りが差し込むと横を向いた女性が居る。それは円形の小さな部屋にかかる肖像画だった。

燦った色の中で一人の女性が口を引く結び前方を見据え、その挑むような視線はりんとした美しさがある。

けれどふわりとしたドレスや髪飾りに反してどこか頑な印象を与えていた。

額縁に彫られた名前はサンディア。前王妃でありジルフォードの母親。

「きれいな人だね」

「ええ。サンディア様は美しくて聡明な方でした」

後ろに居たカナンが懐かしむように目を細め賛同した。

「でも、悲しそうだね」

絵の中のサンディアはどこか泣くのを懸命に堪えている少女のようにセイラには見えた。

「サンディア様は他国から嫁いでこられたのです。……あの方にはアリオスの国風が合わなかったのかもしれませんが」

サンディアが嫁いできた時には今より軍事国家の色合いが強かった。雪に閉ざされ自国との連絡もままならず、剣を手にとることなど無い生活をしていた彼女にとってアリオスの生活は苦痛だったのかもしれない。

その上、王妃という重荷が押しかかり、いつも気を張っていたのだろう。セイラが悲しそうだと言った表情が常だった。

そして側室が出来、最初に子どもを身ごもったのも側室のほうだった。

「彼女はいつ嫁いできたのかな？」

肖像画の中の彼女はダリアよりも年下に見える。

ダリアと同じくらいでシルフォードを産んだとして、四十歳にも満たない彼女はたった一人で離宮にいますという。

城に残っている彼女の肖像はこの一枚だけだという。

「寂しいね」

「……そうですね」

「お母さんもジンも」

「……はい」

この人に会いに行こうと密かに決めながら鍵を力ナンに返し、階段を駆け上る。

三階に着くとジンの部屋によじ登り、いつものクッションを手にする。

最近は机と小さな本棚の間に入り込むのが好きだ。丁度ぴったりと入り込める広さで正面にジルフォードがいる。

「ねえジンはカエデっていう人知ってる？」

ジルフォードは手元の本から顔を上げた。

「ジョゼがね、私とジンの剣の型が同じだって」

もう一度、尋ねるとジルフォードは頷いた。

「軽くって、お酒大好きで、うへへって笑う？」

セイラの言葉に戸惑いながらも心当たりがあるのだろっ、ジルフォードは再び頷いた。

カエデという響きはここら辺ではあまり馴染みがない。その上、笑い方まで一緒ならほぼ同じ人物だろう。

「髪の毛もつさりしてて、自分勝手に、急に現れて同じくらい急になくなっちゃっ……でも強くて、優しい？」

頷きが返される。

「口癖は」

「「なるようになるさ」」

重なった言葉にセイラは笑い出した。

ジルフォードとセイラの師は一緒だ。あんな人二人もいるはずがない。見た目は不審者なのに、子どもにも動物にも好かれる人だった。

「じゃあジンは兄弟子になるのかなあ」

隙間から抜け出してジルフォードに近づいて手を差し出す。

その行動の意味が分からずジルフォードは僅かに首を傾げた。

「手見せて」

セイラの手のひらに白い手が重ねられる。

細く長い指先。傷一つなく豆もない。どこのお姫様だって泣いて悔しがりそうだ。

ジョゼじゃなくとも争いごととは無縁だと思ってしまいそう。

どんな思いでカエデに剣を請うたのか。セイラのように美しさに惹かれたわけではないのだろう。

「カエデは何処に行ったのかな」

帰る場所^くは無いのだと言った。

ジニスにも留まる気はないと言った。
きつとアリオスにも彼はいない。

「……何処にでも」

ジルフォードの言葉に笑みが浮ぶ。

「そつか。何処にでもか。またふらふと現れるかもね」

頷きながら白い手を突きまわした。

抵抗されないものだから指を引つ張り、曲げたりして遊んでみる。

「今度一緒に手合わせをしない？」

ジルフォードの首は静かに横に振られた。

「ジョゼも一緒だよ？」

ジョゼとのこの間の手合わせも力量には雲泥の差があることも知っていた。

確実に遊ばれていた事も。

ジョゼが強いというくらいだからきつとジルフォードには歯も立たないだろう。

だからジョゼもいれば力的にも大丈夫だろうと判断したのにジルフォードは頑なに首を横に振る。

仲良しだったんじゃないのか？

セイラの知っている数少ないジルフォードの仲良しさんということですぐに承諾してくれるものだと思っていた。

ジョゼの一方的仲良しさん？

なんとなくなりえそうな話だ。

「嫌なら仕方ないか……」

セイラはジルフォードの手を解放してやり、しゅんと下を向いた。カエデ以外がああ動きをするとどうなるのか非常に興味をそそられるのだが無理強いはいできない。

「武器を握るのは好きじゃない」

「そっか」

静かに落ちてくる言葉にセイラは頷いた。

「そっか……」

武器を握ることを厭うても身を守る術がいる。

けれどジルフォードが守っているのは自身ではない。

彼が死んでしまえばサンディアは本当に一人になってしまう。

「君は」

そして懸念を招くほど強さを出してはいけない。

立場のある友人を巻き込まないために必要以上に近づいてはいけない。

「とても辛い戦い方をするんだね」

どうして自ら辛い道を歩むのか。

ジョゼなど全体重をかけて寄りかかってもびくともしなさそうなのに。

「きっと、すっごく考えたんだね。一人きりで守れる方法」

削れるのは己だけ。

カエデに教えを請うたのは去っていく人だと知っていたからだ。
アリオスの思惑でカエデを縛ることは出来ないからだ。

「よし！ 今日からは私も一緒に戦うよ」

セイラは微笑んだ。

「ジンと私と半分ずつ。戦う労力が半分ですんだら、ちょっと余裕が出るよね。その余裕でもっと楽な方法考えようよ」

それが良いと手を打ちながら頷いた。

もちろんその楽な方法の中にジョゼやケイトを巻き込むのは決まっている。

「カナンとハナは食料係で……！」

セイラの口は開いたまま止まり、目は大きく見開かれた。

「……ジン」

紫の瞳からぽつりと雫が落ちた。

全ての機能を停止しているセイラの前でジルフォードは己の瞳から溢れた液体を拭い不思議そうに濡れた指先を見つめた。

「なっなんで泣くんだった！ お腹痛いの？ あっえっ？ これ私のせいか？」

泣かすようなこと言った？ やっぱりお医者さん？

わたたと無意味に動くセイラの前でジルフォードの瞳からは更に二つぶ雫が落ちた。

「カナーンお医者……」

「お腹は痛くない」

入り口に向かって叫ぶセイラの背に静かな声がぶつかった。振り返るとジルフォードは袖口で目元を拭っている。けれど雫は止まる事を知らないらしい。

「じゃあどこが痛いんだ？」

「……………分からない」

セイラが見上げた先で暫くの沈黙の後、ジルフォードは分からないと言った。

何故涙が出てくるのか分からないと。

「痛くは無いんだな？」

初めて感じる形容しがたいものはセイラの言っている痛みとは違う気がし、ジルフォードは頷いた。

「それなら好きなだけ泣くといいよ」

セイラはほつと力を抜き、ジルフォードの頭に手を伸ばすとそっと撫でた。

柔らかな髪は手触りがよく、まるで盛り上がる涙は瞳と同じほどキ

レイだと思った。

「擦っちゃダメだよ。赤くなるから」

そう言う目元を擦っていた手を下ろし、顔を背ける事もしないで零れるに任せていた。

こんなに静かな泣き方は初めて見た。

セイラにも頭を撫でてやる以外どうしたら良いのか分からず、頭に浮んだのは優しいカナンの顔だった。

「カナンにお茶を淹れてもらおうか」

立ち上がりかけたセイラの袖を白い手が引いた。

視線をやる頃にはすでに手は無かったけれど確実に引かれた感触があった。

浮き上がっていた腰をもう一度下ろして、ずりりとジルフォードの横に移動して寄りかかる。

沈黙が二人を包み触れ合った場所から、ぬくもりを交換し合う。決して嫌ではない静けさに身を預けてどれほど時間が経過したのか、ジルフォードの頬を濡らしていた雫はいつの間にか乾いていた。

「今度ね、サンディア殿に会いに行こうと思うんだ」

哀しげな絵の主に。サンディアの名を聞いて僅かばかり力の入ったジルフォードの身を軽く打つ。

「一人きりはもうお終い。サンディア殿は私のお母さんにもなるんだよ」

己の言葉に母の姿が浮んできた。

「……恋しいね」

会えないと思うとなお更想いは募るらしい。

カエデの話をしたせいか、サンディアの話をしたせいか、たくさんの人の顔が脳裏を過ぎていく。

母にカエデにジニスの人々。

ジルフォードは恋しいが哀しいに変わるほど、緩む頬が強張るほど長い年月を一人で抱えてきたのだろうか。
セイラの瞳にもじわりと涙が浮んだ。

……本当だ。何で泣いてるのか分からないね

会えないのが寂しいからじゃない。

ジルフォードに同情してるわけでもない。

けれど、鼻の奥が痛くなって鼻水が垂れてくる。

グスリと音を立てながら、どうしてきれいに泣けるのか不思議に思い、隣を見上げた。

ジン困ってる……

先ほどの自分のようだ。

表情に変化はないもののどうして良いのか分からないと伝わってくる。

大丈夫だと言いかけたセイラの頭に白い手が乗せられ、撫でるといふにはあまりにもたどたどしく、手のひらが動く。

それが心地よくされるがまま、涙は流れるままにしていると、窓から差し込む光りは赤みを帯び、徐々に弱くなっていく。

涙が枯れるとともに喉の渴きを覚える頃になると丁度よくカナンから呼びがかかった。

「行こうか」

手をつないで現れた二人にカナンが頬を緩めるのもつかの間、目元の赤いセイラに驚きをあらわにした。

「どうなされました？」

同じほど泣いたはずなのにジルフォードには変化がない。要領を得ない説明にカナンは困惑したのも無理はない。

「分かんない」

もつとも己の心情を表す言葉をセイラは笑顔で伝えた。

第28話：お願い

乾いた身のうちを暖かいお茶で満たし、ほくほくとしながら軽やかに廊下を歩いていると後ろから声がかかった。

「セイラ殿」

声の主はルーファだった。

一国の主とは思えぬほど質素な服装だ。けれど銀と緑の煌きは彼に華やぎを与えている。

「ルーファ殿。どうしたんだ？　こんなところで」

供もつけずに歩いていて良いのだろうか。

「ちょっと下にね」

どうやら王様はお忍びで街に行ってきたらしい。

彼がふらりと出かけていくことはダリアに聞いたことがある。

連れて行ってくれないとぷりぷりと怒っていたが、二人で行けば目立つ事間違いない。

「セイラ殿。どうした？」

いつも元気な少女の目元が赤く腫れている。

「ん？　ああ」

何のことか分からなかったが目元に伸びてくる指先に納得した。

カナンに濡らした布を貸してもらい随分冷やしたはずなのに、まだ目元が赤いらしい。

「泣いたから？」

説明するのは二回目だ。

ルーファに分かるくらいだからハナにも問い詰められる事になりそうだ。

首をかしげる少女にルーファは肩眉を器用に上げた。

瞬時に泣く原因を探ったが思いつかない。城の人々とはうまくやっていたはずだ。

「ジンと一緒に泣いたの。苦しかったわけでも悲しかったわけでもないよ」

理由はよく分からないが、懸念していたような事態ではないらしい。

「……ジルフォードと？」

泣いている姿など想像ができなかった。

笑った姿すら見たところがないかもしれない。

「すごく静かに泣くの。あれじゃ目の前に居なきゃ気づけないだろうな」

「そうか。ジルフォードとは……」

「仲良しになりたいなとは思ってるよ」

それなりに仲良く慣れているとは思っているけれど、まだ手探り状

態だ。

弟が気持ちを外に現さないことを知っているルーファは苦笑した。

「ジルフォードを許してやって欲しい。あいつがああなってしまう責任は私にある」

もつと早くに動いていたならば、無理やりにも彼の世界に入っていたのならば。

どれだけの民に治世を褒められようと、たった一人の弟の心を溶かす事もかなわない。

自嘲じみた笑みに明るい笑みが重なった。

「ジンに、ルーファ殿にそれぞれ守りたいものがあって、それぞれのやり方があったと思うんだ。結局同じものを大切に思っていただけなのかもしれないけれど」

「セイラ殿？」

「遅すぎるなんてことはないと思うよ」

セイラは二人の距離を一步詰めた。

「一つ、協力して欲しい事があるんだ」

第29話：母

王都から遠く離れた西の離宮は落葉した森に囲まれひっそりと立っていた。

もともと夏の避暑のために使われる宮殿は冬の景色の中寂しげである。

宮殿の前に広がる湖は凍てつき、人の訪問を避けるようだ。

こんな場所に前王妃サンディアは20年近く、静養と銘打って幽閉されていたのだ。

式も間近に迫ったある日のこと、セイラはジルフォードの母親に会いに行くと言ったのだ。

今までサンディアの話など気にしていないような素振りだったセイラの言葉にハナが目を丸くしている間にたちまちに準備は整い、セイラはあれほど嫌っていた馬車に飛び乗った。

混乱しながらもハナも飛び乗った事は言うまでもない。

セイラがルーフアに頼んだのはジルフォードの母に会わせてほしいというものだった。

こんなにも早く準備が進んだのは裏でルーフアが口を利いてくれたためだ。

小さな馬車は裏門からそろりと出て行き、誰にも見咎められる事はなかった。

「寂しいところだな」

雪ばかりが目につく、雪の白と建物とどんよりした空の灰色ばかりの色彩感の乏しい世界だ。

音さえも雪が吸収してしまう。

いくら雪が好きなセイラでも視覚も聴覚も触覚も麻痺した世界を好きになれそうにない。

「本当ですわね」

呟いた言葉さえも凍てついてしまいそうだった。
体中を毛皮で覆っても冷気はするりと入り込んでくる。

「さあ早く中に入りましょう。」

促されて老人の後に続く。

眼前にはこれまた人を阻むように頑丈な鉄の扉がそびえている。
老人が押すとギィと錆付いた悲鳴をあげ、内側に開いた。

室内に入ってもさほど温度は変わらない。
風がない分ましといった程度であろう。

明かりもまばらにしか灯っておらず侘しさをかきたてるようだ。

「驚かれたでしょう。使用人もあまりいませんので、端々に手が回らないのです。」

老人は申し訳なさそうに頭を下げた。

少女たちにとってさほど驚く光景でもなかった。

故郷のジニスでは廊下に明かりなど灯っていなかった。

節約ということで、廊下を利用するものがめいめいに蠟燭を持つのだ。

だからいつも明るい廊下、どこでも暖かい室内そんなものはこちらに来てからだった。

けれども前王妃の立場にいる人の仕打ちとしてはどうであろう。

冷たい石の階段を上る。

螺旋の階段はぐるぐると終わりを見せず、反響する足音がさらに気を遠くさせそうである。

上りきった所で、人一人がやっと通り抜けるほどの小さな赤い扉

が目についた。

サンディアの部屋だった。

彼女は国の端の落ちぶれた宮殿の、さらに端の塔の最上階に部屋を構えていた。

「失礼いたします。サンディア様、セイラ様がお見えになりました。

」

老人が開けた扉の先に椅子に座った女性が見えた。

顔は窓の外に向けられ、こちらからは表情を窺う事ができない。

結われていない髪は、無造作に背中に流されていた。

「お義母さま」

その言葉に女性は初めて振り返った。

書庫の片隅に置き忘れられたように、たった一枚残っていた肖像画のままの美しさ。

だからこそ虚空に向けるような目線が恐ろしい。

「セイラです。はじめまして」

「おかあさま……」

少女のようなあどけなさでサンディアは首をかしげた。

「ジルフォードの妻になります」

「ジル……」

サンディアは遠い沈めてしまった記憶を呼び覚ますように視線をめ

ぐらせた。

彼女が息子に会ったのは15年も前の事だ。

「ああ、もうそんな年なのね」

彼女の中の息子は4歳の姿を保ったままなのだ。

いつまで経っても成長する事はない。

4歳の息子と彼女は凍てついた宮殿で暮らしている。

「あなたが……」

ようやく二人の視線はかち合った。

「可哀相ね。あの化け物の妻になるなんて」

彼女は淡々と自分の息子を化け物と呼んだ。

同行したハナは眉をしかめた。

「ふふふっ綺麗でしょう？ 白く色を持たない私の魔物」

狂人めいた色の浮ぶ瞳をセイラの黒い瞳は正面から受け止めた。

彼女は自分だけの魔物を心から愛している。

けれど少女の中で青年はけっして魔物ではなかった。

人一倍思慮深く、それゆえに何もかも抱え込んで苦悩している

それを表現する術を知らず崩れ落ちそうな体で踏みこたえている。

それを魔物と呼ぶのなら人間なんてなんとつまらない生き物なんだろう。

「ええ。とても素敵な色です」

それが紛れもない本心だった。

笑顔で答えた瞬間、サンディアの瞳がカッと開いた。

穏やかな様子を一瞬で変え、考え付かなかったほど俊敏な動作で少女に掴みかかった。

あまりの出来事に老執事もハナも咄嗟に動く事ができなかった。

「私の子よ」

結われていない髪が彼女の激情を表すかのようにユラユラと揺らめき立つ。

鋭い爪が少女の喉に食い込んで痛みを生じさせた。

「私だけの魔物」

細い体のどこに力があるのか。

押し掛かるように締め上げられ、振り払う事もできない。

ハナも取りすがって指を引き剥がそうとしたが、更に力が込められる。

「セイラ様！」

「サンディア様！」

悲鳴が彼女の行為を止める抑止力にはならなかった。

「また奪うのね。この泥棒猫め！」

「ジンはジンのものです」

「私のものよ」

セイラの首には赤い筋が浮ぶ。
そろそろ息が苦しい。

「あなたも私もあの人の苦しみを分かってあげる事なんてできないでしょう」

「愛しい愛しい私の子ども。私だけが分かってあげられる」

必死に抑える老執事を跳ね除けてサンディアは叫んだ。

「全てを憎むために生まれたのよ」

「……そんなこと！」

解放され咳き込むセイラの背を擦りながらハナは涙を流しながら、
怒り狂う女を睨んだ。

くつきりと残った爪あとからは血が滲んでいた。

「ジンはあなたのことを愛していますよ」

「……」

セイラのその言葉にサンディアは動きを止めた。
ひどく意外な事を言われ、理解できないように。
白い頬に指からセイラの赤が移る。

「ちゃんと愛する事も慈しむ事も悲しむ事も知っています」

「……そんなこと」

よろりと傾きかけた体を老執事は椅子まで導き座らせた。

「そんなことないわ。あの子は私を怨んでいるもの。憎んでいるわ。誰よりも」

顔を覆った指の間から漏れた小さな声は懇願さえ含まれているようだった。

そうであって欲しいと

そうあるべきだと

「一度だつて母と呼んでくれた事なんて……ここに尋ねてきたこともないじゃない」

それは無用な疑念を生まないためだった。

「ジンが一番好きな食べ物を知っていますか？」

「……」

「マナです」

カナンがそつと教えてくれた。

料理をしたことのなかった彼の母が唯一作れた菓子なのだと。

「ジンが一番好きな本を知っていますか？」

「……」

ジルフォードの部屋で見つけた一番ぼろぼろになるまで読み込まれた絵本の名を告げた。

何度も修復されたそれは眠る前に彼の母が読んでくれたものだ。

ひび割れた瞳から涙が溢れる

とうに枯れたと思っていたのに

「うそよ」

サンディアは弱々しく首を振った。

「私、ひどいことを……」

一度として名前を呼んだことは無かった

「私だって愛して……」

二人だけの生活は穏やかで

いつのまにか愛しさが育ち、激情など忘れて暮らしていた。

けれど生まれながらに不幸な道を歩かせる罪悪感に苛まれるのが嫌で、息子が連れて行かれる、その瞬間でさえ名前を呼んでやらなかった。

自分しかいなかったのに。

「愛しい」と「生まれてきてくれてありがとう」と伝える事ができたのは。

「ジンを生んでくれてありがとう」

視線の先で少女が穏やかに微笑んでいる。

どうして、たった今その首を締め上げた相手にそんな表情が出来るのか。

「ジンに逢わせてくれてありがとう」

零れ落ちる感情の名前など、もはや判断できなかった。

誰一人くれなかった言葉を十九年後に貰うなど

嗚咽を洩らすサンディアの横でセイラは封筒を取り出した。

「これ結婚式の招待状。良かったらきて下さい。国王の許可はとりました。」

付き添っていた老人は驚きに目を見開いた。

サンディアがこの離宮を出てもいいという許可は今まで一度も出なかったのだ。

置かれた封筒には正式な国王の印が押されている。

「来てくれたら、とても嬉しいです。私もジンも。」

机の上にそつと置いて、部屋を後にした

第30話：黒い想い

「今日はこの辺で終わりにいたしましょう」

マキナは相手の手から剣が滑り落ち、床とぶつかり甲高い音がした後そう告げた。

己も相手も全く息の上がつていない状態で切り上げることなど無いのだが、珍しく相手に覇気が無い。

「何か気にかかることでもありますか？」

向かい合う相手はマキナの一番の教え子といっても過言ではない。いつもは嬉々として向かってくるのに今日は思いつめた顔でやってきて、刃を合わせるたびにその色は深くなっていった。

落ちた剣拾おうともしない姿に本格的におかしいと思いつづき、碧色の瞳が伏され、唇が何事かを紡ぐようとして二三度失敗するのをマキナは見守った。

目の前に居るのはテラーナだ。

銀の髪は一本に結われ、いつものドレス姿はない。

「マキナは……手合わせをしたのでしょうか？ その……あの人、エスタニアの」

「ああ、セイラ様ですか」

ジョゼが連れてきた後も、セイラはたまに現れては何度か手合わせをしたことがある。

テラーナとセイラが鉢合わせた事はないので侍女の誰かから聞いた

のだろう。

「……どうでした？」

そう聞いた後、テラーナは唇を噛み締めた。

「不思議な方ですね。傍から見れば美しい動きなのに、あの動きは確実に人を殺すためのものです」

同じく剣を嗜むもの同士気にかかるのだろうとマキナは告げた。

「ですがセイラ様の剣はひやりとはしますが怖くはありませんね」

急所を捉える瞬間に動きが鈍るのだ。

その間に此方は新たな攻撃を繰り出せる。

「手加減をされていると？」

「いえ、手加減ではないでしょう。おそらくセイラ様は相手を殺すために刃を振るった事がないのだと思います。」

だから躊躇いがでるのだ。

ジョゼとの攻防が恐ろしく冴えて見えたのは、どんな攻撃をしても相手が軽くないなせる事を無意識に感じ取っていたからだ。

平和ボケしていると思っていたが、誰かを傷つけなくとも良い生活は幸せなのだろうとマキナは微笑んだ。

マキナは大切なものを守るために戦うのも相手を傷つけるのも厭わないけれど、しなくていいならそれに越した事はないのだ。

「……」

「気になるのなら手合わせを願い出てみてはいかがですか？きっと快く承諾していただけますよ」

「……ええ、今日はこれで失礼します。ありがとうございました。」

一度も暗い表情を変えない教え子を心配げに見つめたが、テラーナは振り返ることなく訓練所を後にした。

自室に着くなりテラーナはきつく結んでいた髪を解き、乱暴に愛剣をベッドに投げつけた。

己も同じように沈み込み、天蓋を睨み付ける。

どうして誰もが隣国からやってきた小娘のことをよく言うのだろう。兄も義姉も師までもが彼女を称え、やってきて一月と経たないのに末端の侍女までがその名を呼びお優しい方だと言う。

自分は「国王の妹君」だというのに。

どこに行ってもそれは付いてくる。

名で呼ばれることよりも妹君と呼ばれるほうが多いかもしれない。

兄妹だというのに容姿でも兄に劣ってしまう。

侍女たちに美しい銀の髪と言われようと兄の横に並べくすんだ色だ。

華やかな金色が隣に居ればなお更、己の髪は色を失っていく。

兄のものより濃い碧の瞳も裏で「暗い」と何度言われたか。

兄も義姉も大好きだ。

けれど時に二人の存在は劣等感をかきたてる。

だから剣の腕を磨いたのだ。師の賞賛は己のものだった。

それなのにあつという間に奪い去られた。

「あんな人大嫌いよ」

口に出してみれば、ぞろりと己の中に渦巻く黒いものが動き出す。

「いつもあんな格好」

髪も結わずに自由奔放に歩き回る。

それは幼い自分の姿だった。

王の妹君なのだからを窘められ重いドレスを義務付けられる前の。

「アイツも嫌い」

誰もその名を呼ばないのに名前を知らないものなど居ない。

色を持たないくせに、とても強く存在を主張する。

父も母も「兄を見習いなさい」の後は「あの子はどうしているか」なのだ。

母の最期の言葉は「あの子と仲良くしてあげて」だった。

父の最期の言葉は兄に「国を頼む」と「あの子には悪い事をした」だった。

テラーナの名前はどこにもない。

身に潜む黒い思いに引きずられまいと記憶を深く深く沈めようとしているとおずおずと声がかかった。

「何用です」

当分の間誰も近づくなと言ってあったのに。

少々語気の荒いテラーナに申し訳なさそうに侍女が来訪者を告げた。

第31話：痕

「こちらにセイラ様はいらしていませんか？」

軍人であるケイトにとって書庫は頻繁に訪れる場所ではないのだが、最近ではよく顔を出すようになった。

カナンの名前を知ったのはつい最近のことだ。

「いいえ、今日は来られておりませんよ」

一日に一度は何処かしかで出会って挨拶をするのだが、今日はまだ一度も顔を見ていない。

日も暮れかかる頃合なのに珍しい事だ。

届け物があつたので部屋を訪ねてもハナすら姿が無い。書庫にすら居ないとなるとどこに行ったのか。

「そうですか」

「もうお勤めの時間も終わりでしょう。お茶を淹れますからどうぞ」

優しげに微笑んでカナンは中へと促した。

「あ、いえ、そんなご迷惑でしょう」

「いいえ、新しくブレンドしたお茶の味見をしてもらいたかったのです。そのうちセイラ様もくるかもしれせんし」

うまく誘導されながらケイトは室内に入ることになった。はつきり言ってカナンのお茶はとてもおいしいのだ。

茶葉の種類も良さも判断できないケイトだが彼の淹れたお茶は好きだ。

数回しか飲んではいないのだが、いつも丁度よい温度、濃さで出てくる。

部屋に通されるとジルフォードの姿があり、慌てて居住まいを正しと頭を下げる。

「おつお邪魔します。ジルフォード殿」

頷かれグクシャクとしながら席につく。

考えてみれば三人だけで会ったことがない。今までは必ず、セイラかハナが間に居たのだ。

どっとうすればいいんだろう

カナンはお茶を淹れる事に専念し、室内には薪の爆ぜる音ばかりがする。

上司のように軽く話しを振ることも出来ず、セイラのように明るく笑みを向けることも出来ないケイトは自分の心臓の音に急き立てられ混乱し始めていた。

ジルフォードが怖いわけでも嫌いなわけでもないのだが、あまりにも感情も行動も示さないからどうしていいのか分からないのだ。

同僚たちは感情表現が豊かなのだ。

怒れば喚くし、時に殺気まで滲み出す。

嬉しい時は大声で笑い聞けと無理やり話を始める。

そうされれば此方の身の振り方も考えれるのだが、ジルフォードにはそれも無い。

もちろん同僚には無口な者もいるが、そこは長年いっしょにいれば多少は分かるし、仕事という共通の話題がある。

ジルフォード殿に調練の話をしてナア……

話しかければ聞いてくれそうだが、特に興味もなさそうだ。

ああ、セイラ様来るなら早く来てください……

ケイトの祈りが通じたのか、書庫の扉が開けられた音がし、二人の少女の声が聞こえてくる。

「もう、ハナは大げさなんだよ」

「セイラ様はもっと気にしてくださいませ！」

「いくらなんでも目立つもの」

「それだって十分人の目を引きましてよ」

呆れを含んだ声と怒りを含んだ声。

救世主の声が近づいて来て、扉の向こうに明るいい色がのぞいた。

「あ、ケイト」

「あら、本当ですわね」

眼を大きくする二人に感謝の視線を送り、挨拶を交わす。

「いらっしやいませ。どうぞ」

早速、カナンが進み出て部屋に招きいれたのだが不自然に行動が止まった。

ケイトからはカナンの背中しか見えないが、彼が息を呑んだのが分かった。

何事かと近づくとケイトの目にもしっかりとそれは映った。

「どうしたんですか！」

細い首には引掻いたような傷と赤い痕が付いている。

「うつ……うん。ちょっとね」

ほらごらんなさいというハナの視線と原因を問いただそうとする二人の視線をかわしながらセイラは曖昧に笑った。
サンディアに絞められたなど言えない。

「ちょっとじゃありませんよ。どうやってこんな痕が付くんです」

明らかに人の手で付けられた痕にケイトは眉を怒らせた。

セイラが両手と髪を使って覆い隠してみるも、もう無駄だった。

「いろいろなあったんだ。でも、もう大丈夫だし」

じりりと逃げ場を確保しようとする後ろに下がっていったのだが、いつのまにかカナンの部屋と書庫を仕切る扉が閉まっている。

カ……カナン

ちょっと喉を潤しに來ただけなのにどうしてこんな目にあうのだろう。

ハナの言うとおり包帯でも巻いてこればよかったのか。
扉の前にいるカナンは珍しく笑っていない。

包帯を巻いていても結果は同じ気がする。

前にケイト、後ろにカナン、横にはハナ……

「大丈夫だもん。ケイトもカナンも心配しなくていいよ」

セイラは隙を突いて逃げ出し、ジルフオードの影に隠れるように座り込んだ。

周りを囲まれたらそれこそ逃げようが無いのだが、二人は追ってこず標的をハナに変えたようだ。

「どうなされたんです？」

「ハナ殿！」

カナンが優しく問いかけ、ケイトが厳しい目を向ける。けれどハナはあくまでセイラの味方だった。

「秘密でしてよ。心配なさらずとも解決しましたの。それよりセイラ様に包帯を巻くように言ってくださいまし」

ハナとてサンディアがセイラの首を締め上げたと言って話を大きくするつもりは無い。

しかも今回の訪問はルーフア以外には内緒なのだ。

「ですが……」

「せっかくのお茶が冷えてしまいますわ」

言い募るケイトを無視して、ハナは茶器を取り出し始めた。

痛い視線を注がれつつも何も言わなくなった二人にほっとしている

と、首を押さえていた手をゆるりと外された。

「ん？」

「あら」

珍しいジルフォードの行動にハナも声を漏らした。

首を覆っていた髪も白い手にはらわれてしまい、問題の痕が露になった。

それを見下ろすのは緑色に暖炉の火がうつり金が混じる色。

その色に暫く呆けていたけれど、首もとにはしる微かな痛み到我を取り戻す。

次はジンか

手を持たれたままだと逃げ出すことも出来ない。

しかもその瞳の色から目を離す事もできなくてダラリと冷や汗が垂れてくる。

けれど青年の口から出てきたのは予想外の言葉だった。

「消毒はした？」

ジルフォードの行動を見守っていた三人は目を丸くした。

言われた本人もぼかんとしていたのだが、鼻にツンとくる匂いを嫌でも思い出した。

「消毒？　したよ。ハナがすつごく痛い消毒液を塗りたくってくれたよ」

恨みがましい視線をハナに向けるとにこりと微笑まれ、慌てて視線

をジルフォードに戻した。

「そう」

痕を一撫ですると納得したのか手を離し、元の位置に戻るジルフォードに声をかけたのはケイトだった。

「ジルフォード殿！ 先に何があったか聞きませんか？」

少しばかり前の混乱をきれいに忘れて、ケイトは詰め寄った。

「セイは教えたくないようだし、ハナ殿が心配ないと言うなら大丈夫」

「そつ……」

「信用していただけて嬉しいですわ。あなたにも信用してもらいたいですわね」

ハナの視線を受けてケイトは口ごもった。

ジルフォードの言葉にカナンもこれ以上聞かないことにし、ハナに任せきりになっていたお茶の準備に戻ることにした。

それにハナからの目配せで、聞くのなら困り顔の青年が居ない時のほうが良い気がしたのだ。

セイラの首に残る痕は細い。

あの痕を付けたのが誰なのか大方の予想が出来ていた。

「さあどうぞ」

人数分のカップが机の上に並び、一人だけ納得していないようだったがさやかなお茶会が始まった。

ケイトがセイラへの届け物があったことを思い出したのはお茶を飲み干して、セイラを部屋まで送り届けた後だった。

第32話：姉

ケイトが渡したのは一通の手紙だった。

宛名の文字には嫌になるほど見覚えがある。

その性格を現すようにはつきりとまるでお手本のように美しく見やすい文字だ。

手紙の送り主は姉だった。姉といっても半分しか血は繋がっていない。

「まさかユリザねえさまが来るとは……」

セイラは手紙を片手に持ったままだりと長椅子の端から垂らした。式には国王の代理で王女の一人が来る事は伝えられていた。

その王女に第二王女のユリザが選ばれるとは……

いや、よく考えれば彼女ほどその役に相応しい王女は居ないのだが無意識にその可能性を排除したかったのだろう。

セイラはぐうと唸り声を上げた。

脳裏には黒髪も艶やかな女性の姿が浮んだ。

彼女の正式な名はユリザ・リューデリスク・トゥーラ＝エスタニア。エスタニア国の第二王女だ。

セイラと王家は疎遠なため上の七人の王女たちとも親交があるわけではなかったが、何人かとは面識があった。

その中でもユリザはジニスまで押しかけてきた強者だ。

彼女が居なければセイラはきっと自分がエスタニアの王家に連なるものだとは思わなかっただろう。

「間抜け面はおよしなさい」

はじめて見る豪華な馬車にぼかんとしていれば、そう言って彼女は

整備されていない道を踵の高い靴で闊歩した。

彼女はまったくと言って良いほどジニスの街に馴染んでいなかった。土くれにまみれる人々の中で浮かび上がる彼女は御伽噺の中から間違っ出てきてしまったお姫様のようだ。

その様子を思い浮かべてセイラは苦笑した。

彼女のことが嫌いというわけではなく少し苦手なだけだ。

ジニスの人々も彼女に好意的だった。

どんな相手にもびしやりと言い放ち、居丈高だけれど街の人々が知っているどの貴族よりも正しいことを言う。

王家でさえ糾弾し孤児にはその身を誇れと。

彼女は誰にでも公平に厳しい。

もちろん己にも。

どんな時にでも王女らしく、乱れた姿など一度としてみたことが無い。

少年のような格好をして泥だらけで駆け回っている姿を見つかつて散々に怒られた記憶はどうやっても消えてはくれない。

「貴女がどう思っているかが母親の身分がどうなどとは関係ないのよ。その身体を構成する血肉の一片はエスタニアに連なるものなのだから自覚を持ちなさい」

言い放たれた言葉に言い返そう者ならば十にも百のもなって返ってくる。

母もハナも一緒になって目を丸くしていたのをよく覚えている。

「うゝ怒られないといいけど」

手紙の出だしは「エスタニアの王女として相応しくない行動を取っていないでしょうね」だ。

「馬で駆けたり、雪まみれになったり……」と続く。

これはもう全部筒抜けになっているに違いない。

報告したであろう使者を怨みながらクッションに頭を沈めた。

けれど一つだけ来るのが彼女であるのが嬉しい事がある。

彼女は上辺だけみて物事を判断しない。

ジルフォードについて色なしや魔物と呼ばれていたことも含めてすべてを調べてくるだろう。

その上で自分の目で彼を見てくれる。

彼女が何を思うのか楽しみでもあった。

彼女がくるまでに少しぐらい王女らしく振舞おうかとも考えたが、それはすぐに霧散して明日は訓練場に行こうに変わってしまった。

第33話：手合せ

吊り上げた眉にしつかりと結んだ唇。

彼女からは戦う前の緊張というよりも復讐を果たす前のような思いつめた気配が感じられた。

手合わせをお願いしたいとの言葉にへろりと笑い了解した自分を責められているようだった。

剣を握った手には必要以上に力が入っている。

彼女は誰にどんな話を聞いたのだろう。

自分はそんなに気負って向かう相手では無いのだけれど。

これが彼女の常ではないのだろう。マキナも気遣わしげに彼女を見ていた。

「テラーナ殿……そんなに怖い顔しないでよ」

「これが普通の顔ですからお気になさらないで」

「……そう」

こちらが体をほぐしている間中テラーナは同じ体勢を保ったままだった。

体が温まる頃には舞台が出来上がっており、幾人かの見物人も居た。今回もセイラは稽古用の剣を借りたのだがテラーナの剣は特別なのだろう。

細く幾分長く見え、鞘には瞳と同じような深い緑の玉が嵌っていた。始めの合図と同時にテラーナは地を蹴り、眼前に迫る。

身が軽いのか随分動きが早く、セイラが身を捻るころには、その姿は背後にあった。

ジョゼとやりあった時ほど響く衝撃はないもののこれほど素早く攻

撃されては反撃が中々出来ない。

繰り出した攻撃も剣先が届く前に逃げられてしまう。

時にセイラの流れるような動きに翻弄されてもすぐに体勢を立て直し、間合いを取る慎重ぶりだ。

今までに無い好敵手のはずだった。

それなのにセイラは心から楽しむことが出来ない。

どうしてそんなに苦しげに顔を歪めるのだろう。

テラーナのほうが有利なはずなのに、彼女の顔には高揚も見られず逆に青白くなっていくようだ。

剣を振るうのが苦痛だと言わんばかりに。

刃をかち合わせて顔が近づいたときにセイラは思い切って尋ねようとした。

「テラーナ、君はどうして……」

ヒュン

言い切るより先に耳元を風が奔った。

矢ッ！

何故？

そんなことが頭に浮ぶよりも早く腕がテラーナを引く。

バランスを崩したテラーナは前によるめくと、銀が宙を舞う。

矢が掠めたのか髪紐が切れ、テラーナの髪が視界を埋め、もう一矢の姿が消えてしまう。

「セイラ様！」

気づいたときには右手に熱が奔っていた。

駆けつけたマキナが素早く周りに指示を出しながら、セイラの腕に布を巻きつける。

「……なぜ」

腰を落としたテラーナの頬には血しぶきが飛んでいた。

呆然とみやった先には誰もいない。

髪を下ろした彼女は随分と幼い印象に変わる。

「分かりません。ですが故意でしょう」

この場所には弓の練習をするものはおらず、誤って飛んできたにしては正確に二人の姿を捉えていた。

「今探らせていますからセイラ様は医務室へ」

巻きつけた布にはじわりと赤が滲む。

「うん」

「何故です！ 何故かばったりしたのです！」

マキナに手を貸され立ち上がったセイラにテラーナが叫んだ。
その顔は今にも泣きそうだ。

「だって矢がきたんだもん」

当たり前だと言いたげなセイラに何もいえずテラーナは虚しく口を開閉した。

自分でも何を言いたいのか分からない。

けれど何かを叫びたかった。

「あ、あなたは！」

「今度は楽しくやろうね。苦しい悲しいで剣を振るうともっと悲しくなるから」

伸ばされた手が頬についた血を拭うためだったと気づいたのはセイラの袖口がその色に染まったからだ。

凝視するテラーナに笑みを向けながら無事なほうの手を振った。

「またね」

そう言っで連れて行かれるセイラを見つめるテラーナに侍女が声をかけると、彼女はよろりと立ち上がった。

「お部屋まで一緒にいたします」

「いいえ、一人で帰れます」

不安定に体を動かすテラーナに伸ばされた手は沈みそうな言葉とともに拒絶された。

第34話：狙われる者

窓の外に広がる空はどんよりとした灰色で楽しみの雪も降らしてくれない。

部屋に閉じ込められた上、そんな意地悪な空が続くと気分が滅入って来そうだ。

何かしようものならハナが眉を怒らせ、部屋をこっそり行け出そうにもドアの向こうには寒いのにケイトが張り付いている。

大げさに巻かれた包帯もうつとおしいばかりだ。

そもそも縫うほどの傷でもないのにこんなに嚴重な処置は必要なのだろうか。

「はぁ……」

何度目か分からないため息を付いてセイラはベッドに転がった。

医務室に連れて行ってもらいさつさと消毒液でも塗ってくれば良かったのに、顔面蒼白になったハナが現れ、慌てて現れたケイトは扉を壊さんばかりの勢いで入ってくるし、ついでにジョゼまで……腕の怪我なのに、何故か寝かされているセイラに死ぬ死なないの大騒ぎになったのだ。

主治医が何も告げずに外に皆を追いつ出すものだから（煩いという理由で）ハナはついに泣き出した。

けろりとした顔で医務室から出てきて怒られたのはセイラだ。

痛い上に怒られ、泣きつかれ踏んだり蹴ったりだ。

矢を射ったのが誰か分からぬうちは部屋から出るなと二日間も外に出してもらえない。

「うつゝん。暇！」

お見舞いに来てくれたダリアも傷に障ると早々に帰ってしまったし、ほぼ日課だった書庫にもいけない。

行ったら行ったで二人に心配をかける羽目になるのは分かりきっているけれど自室はどうにも暇なのだ。

その上、一番厄介なのはハナだった。

ここ数日、生傷が絶えないものだから傍目から分かるほどぴりぴりしている。

お菓子攻撃も効かないとなると手のうちようがない。

足をばたつかせてみても暇を潰せるわけもなく再びため息を付こうとしたところに扉の開く音がした。

ハナが止めるのもものともせず、その人物は寝室に続く扉を開けた。

「まったく妙齡の女性の部屋に断りも無しにズカズカと入るなんて無神経ですわ！」

だらしなく転がるセイラに一瞥をくれジョゼは鼻で笑った。

確かに髪を振り乱し足をばたつかせる姿は妙齡の女性には見えない。

「やあジョゼ」

「よう元気か」

にかりと笑う顔に陰鬱なため息を吐く。

「退屈で退屈で死にそう」

その言葉にぎょろりと恐ろしい目をハナが向けたが本気で退屈なのだ。

うつ伏せになっていた体を起こし、向かい合って首を傾ける。

「お見舞いじゃなさそうだけど？」

「侍女が一人死んだ」

鋭い声に訓練場での一件と関わりがあることを見抜いたセイラは隣の部屋で話を聞くことを提案した。

ケイトも聞きたいだろうと思つてのことだ。

さすがにジョゼより常識を身につけている彼は寢室にまでは入ってこなかった。

皆が席に着いてハナがカップをお茶で満たすとジョゼが話を再開させた。

「死んだ侍女は弓の名手だった。生まれも育ちもアリオスだ。嬢ちゃんアリオスの人間に狙われる理由はあるか？」

「ん……思いつかないけど」

アリオスの人間に狙われる理由は分からない。

「命を狙われるほど拙いことやった覚えはないんだけどな。狙われたのはテラーナじゃないの？」

あそこに居たのはセイラばかりではない。

あの時、手を引かなければ危なかったのはテラーナの方かもしれない。

「可能性が無いわけじゃないけどな。この時期に狙うなら嬢ちゃんのほうが確率が高い」

式までは一月をきった。

今この国で何かしかの問題を抱える可能性はセイラが一番高い。

「それに妹君を狙って何になる？」

「……恨みがあつたのでは？」

ハナの言葉にジヨゼは首を振った。

「軍の中でも評判になるほどの腕前だ。城で働いていたという箔があれば働く場所に困る事もないだろう。嫌ならどこへでも行くと良い。私心で動く娘にも思えんし、侍女が一人で考える事じゃないだろう。死因もまだ分からん」

「まだ仲間が居ると？」

「おそらく」と頷いたジヨゼを見てハナは顔色を悪くした。唇をかねて俯き、握り締めた拳はひざの上で微かに震えている。ケイトの気遣いの言葉は聞こえていないだろう。

「じゃあ、逆に私を狙う意味は？」

「嬢ちゃんはと思う？」

「んー私が気にいらない？」

自分で言っておいてセイラは首を振った。

確かに第八王女なんて知名度も低ければ、エスタニアから見た重要性も低いかもしれない。

けれどそれだけで事を起こすにはリスクが大きすぎる。

「私とジンが結婚するのがダメ？アリオスとエスタニアが仲良くなるのがダメ？」

誰もセイラの言葉に頷いてはくれない。

セイラ自身も納得できる理由ではない。

お茶はとつくに冷え始めていた。

結びついくとダメなのは……

「ジンと……」

「もう嫌ですわ！どうしてセイラ様ばかりこんな目に合うんです。アリオスに来てまだ一月も経たないのに二度も……」

セイラの声を遮って零れたハナの涙声をジョゼはしっかりと聞いていた。

「おい。ハナ嬢。今二度と言ったな」

少女たちははつと息を呑み、ケイトはつい数日前の痛々しい傷を思い出した。

懸命に話すなと視線を送ったのにケイトには全く通じない。

「そうですよ。セイラ様この間の傷のこと、ちゃんと話してください」

「あれは今回の件とは関係ない」

逃げようとした体はがっちりと捕まえられて動けない。

ケイト一人なら逃げる事が出来たかもしれないが今回はハナでも

敵わない強敵が居る。

「関係ないかどうかはこっちが判断するから話な」

ゆつくりと近づいてくる獣じみた笑みにセイラは心の中で悲鳴を上げた。

洗いざらい話す羽目になったセイラはぐったりと椅子に座り込み冷え切ったお茶をちびりと飲んだ。

「元王妃様ね」

ジヨゼはセイラの様子を見ながらある人物を心の中で口汚く罵った。その情報を自分のところに下りてきていない。

「彼女は関係ないよ」

睨み付けるようにして言うセイラに問い返す。

「何故だ。息子をどこぞの小娘に取られたくない。立派な理由じゃないか」

「違っつてば」

彼はサンディアが置かれた状態を知らないからそう言うのだ。

確かに首を絞められたときはそうだったかもしれないけれどセイラは彼女の変化を目の前で見た。

彼女は無力な少女のように身を震わせて泣いていた。

「私も今回の件とサンディア様は関係ないと……」

「何を根拠に？」

確たる証拠など無いハナは口を閉じるしかない。

ジョゼの顔には疑いが濃く、ケイトも渋い顔をしている。

サンディアがあくまで離宮に移されるまでだが息子を偏愛していたことは事実だ。

サンディアが離宮に移されるとき本当は彼女一人のはずだった。

けれどそれを知った彼女は息子を返せと返さぬなら殺してやると王に向かって暴言を吐いたことはよく知られている。

「違う！ そんなに疑うんだったら私がその仲間とやらをひっ捕まえて彼女の無実を証明してみせるから！」

「ダメだ」

きつぱりとした拒絶に威圧する瞳を跳ね返すべくセイラは口を引き結んで睨み返した。

ケイトでも背筋に震える視線を受け止めるセイラにおろおろと視線を向けるもののケイトの思いも同じだ。

そんな危ないことをやらせるわけにはいかない。

ちりりと音のしそうな視線の攻防を先に止めたのはジョゼだった。

「ケイト。嬢ちゃんに四六時中張り付いてる。部屋からも出すな」

「はい」

上司命令に姿勢を正すケイトに目もくれずジヨゼは席を立つ。

「ジヨゼ！」

去り行く背中に叫んでみても、いつもの飄々とした態度は見えず、その背中も次第に扉の向こうへと消えていった。

第35話：逃亡

完全にふて腐れてしまったセイラは寝室から一步も出てこなくなつた。

ジョゼの言いつけどおりケイトは今まで以上に嚴重に扉に張り付き、ハナ以外の侍女ですら近づけない。

城全体にも暗雲が立ち込め、どこか冷たい空気が包んでいる。

お茶を用意してもお菓子で釣つても出てこないセイラにハナはすっかりしよげてしまった。

寝室への扉に鍵なんてかかつていないことは知っているが、それでも入ってくるなという気配を感じてどうする事も出ない。

セイラのほうはハナに悪いとは思いつつ寝室でこっそり準備を始めていた。

裾の短い服に着替え、髪を一つに束ね音を立てないように慎重に窓を開ける。

頬を切りつけるような冷たい風が襲うがかまってなどいられない。

ジョゼもケイトもハナでさえあまりの事態に彼女がとんでもなくお転婆で規定外のお姫様だと失念していたのだ。

ジニスの女をなめないでほしいな

そこが二階であろつが三階であろつが体重を支えることができる紐があれば地面に辿り着ける自信はある。

その上に地面にはふかふかの雪もたくさんあるし見張りもない。取り合えず書庫に行こう。

カナンはきつとセイラの行動に賛成はしてくれないけれど欲しい情報とは与えてくれる気がしたからだ。

降りた後のこともしっかりと考えている。

ここ数週間の探検は大きな成果をもたらしてくれ、誰にも見つから

ないまま書庫まで辿り着けるルートはしっかり頭に入っている。
ベッドの上には置手紙を一つ。

『書庫に行くから協力してくれるなら来て』

セイラは自分の意地悪さに苦笑した。

今この場で告げなくせに、必ずハナが自分が抜け出したことを誰にも話さずに来てくれることは分かっているのだ。

「ごめんね」

小さく呟いてセイラは窓の外に身を投げ出した。
至る所に見張りの兵士たちが居たがセイラの進行を妨げる役目にはならなかった。

自分が作った雪像が今、身を隠すのに役立つとは思ってもよらなかった。

幸いな事に一つきりしかない書庫の扉の前には誰も居ない。

「カナン。カナン」

中に入り呼びかけると驚いたようにカナンが現れた。

「セイラ様……大丈夫ですか」

どうやらここまで情報は伝わってきているらしい。
優しく自室に押しやってカナンは扉を閉めた。

「大丈夫だよ。怪我っていつでもこんなもんだ」

包帯をむしり取ってみせると、細い腕に一筋の赤が走っていた。

痛々しいには違いないが想像していたよりもずっと軽い傷に安堵してカナンはため息を付いた。

「そうですか」

カナンはセイラを椅子に座らせると新たな包帯を巻き始めた。いらないと駄々をこねてみてもやんわりと叱られ、痛々しい傷を見てはいられませんか眉を下がられると大人しくするしかなかった。

「今、部屋から出てはいけけないのではありませんか？」

「窓から抜け出してきた」

包帯を巻き終えたカナンにありのままを告げると仕方ない人ですねと苦笑された。

「危険な事は重々承知していますね？ 貴女の身が傷つくのがどういう意味を持つのかも」

いつもは優く難いだ瞳がこんなに厳しさを湛えるのを初めて見た。

今はもうジニスに居た時のように唯のセイラでいることはできない。

セイラ・リユーデリス・リース「エスタニア」。

名の通りエスタニアを背負っているのだ。

頷きその瞳を見つめかえすとカナンの瞳の色がふっと和らいだ。

「とても心配しているのですよ。私もジン様も」

扉の前にはジルフォードが立っていた。

「心配かけてごめんね」

近寄ってきたジルフォードはセイラの頭を撫でた。

「大丈夫だよ」

手を伸ばし背中を叩くとジルフォードは撫でるのを止めた。

「何故ここまで来たのです？」

もちろん暇を持て余して本を借りに来たわけではない。

カナンもセイラがそこまで軽挙な行動に出るとは思っていない。

セイラは服の首もとを開いて見せた。

そこには微かにかさぶたが残っているだけだったが、数日前を思い出すには十分だった。

「この傷が出来たのはサンディア殿のところに行ったときなんだ」

驚くカナンにももちろん国王の許しを貰っていったことを告げ、あらましも簡単に教えた。

僅かばかり強張るジルフォードの背をもう一度叩き大丈夫だと繰り返し返す。

今話したいのはそれじゃない。

「そのことをジョゼに知られちゃって、彼女が今回の事も関係あるんじゃないかと疑われてるんだ」

「……それは」

「彼女じゃない」

きつぱりと強い口調で言ったセイラに驚きの目を向けた。
今しがた首を絞められたと言ったばかりだというのに。

「どうしてそう思うんです？」

「勘！」

「……勘ですか？」

もつともあやふやで確証の無いものに命を委ねようとするのか。

「うん。なんて言ったら良いのか分かんないけど、絶対彼女じゃないよ。私はそれを証明したいの」

カナンは闘志を燃やすセイラに一概に賛成だとは言えなかった。

「昔話こうだった、噂話はこうだからなんてもう止めにしよう。アリオスはいつまであの冷たい牢獄に彼女を閉じ込めれば気が済むんだ。それに本当の首謀者を逃がしちゃうほうが大変だと思うよ」

ジヨゼもサンディアばかりを疑って動いているわけではないと理解しているけれど、何もせずになどいられないのだ。

「セイラ様の勘は良く当たりますわ」

「ハナ！」

飛びつくセイラににこりと笑みを見せた。

「ケイト殿を納得させるのに時間がかかりましたわ」

ハナがセイラが抜け出したことに気づいたのは二十分ほどしてからのことだった。

叱責を覚悟して向かった寝室は微かに開いた窓から入り込んだ冷気で凍えるような寒さで主の姿は無かった。

急いで見つけた置手紙をポケットに納め、平常心を保とうと深呼吸を繰り返した。

廊下に出れば案の定、何事かとケイトが尋ねてきたので「セイラ様を慰めるために本を借りてきます」と言うたダメだと首を振られたのだ。

「それが私の仕事ですの。あなたに口出しされることはありませんわ」

それでは護衛をと言うケイトに眉を吊り上げた。

「狙われているのはセイラ様なのですよ！私に割く人員がいるのならさっさと大元を捕まえてくださいませ」

悪いとは思いつつも怒鳴り返すとケイトは口を閉じ、小さな声で謝ってきた。

良心が痛んだがそのまま逃げるように書庫へとやってきたのだ。

「さすがハナだね」

二人の少女に呆れと感嘆を混ぜたため息を付き、カナンは頷いた。

「分かりました。微力ながらお手伝いいたしますよう」

それは少女たちのためばかりでなく、俯いて表情が窺えない青年のためでもあった。

第36話：元帥

城の中に設けられた一室には机と椅子があるだけで他には何も無かった。

円形に配された五つの席のうち埋まっているのは三つだけだ。

全ての席が埋まったことは一度としてない。

五元帥の任命された内の一人は早々に政から身を引き、もう一人はふらりと出て行ったきり何処に居るのかも分からない。

実質元帥は三人しかいなかった。

そのうち一人は黒衣で全身をまとめた影のような人物で面倒だと言わんばかりに机に足を乗せ、呟いた。

「この時期になって問題が起ころうとはな」

重い声に赤い色彩がびくりと震えた。

細い体にサイズの合わない大きな司祭服を着込んでいる男は彷徨わせた瞳を声の主には合わせずに水を含んだような声でぼそりと言った。

「エスタニアの連中がやったのでは」

「ハッ！何のために？」

馬鹿にしきった声に唸り声が重なった。

「王女を害したと戦争でもふっかけるか？腹に病巣を抱える今、外側から突かれたくないはずだ。見せ掛けだけでも友好状態は保ちたいだろうよ」

そのためにアリオスを成り上がりものだとは下げず見ながら、国王の代理として来るのは第二王女だ。

遣わされるもので、その国の重要度を計るのなら彼女はかなり上位を表すに違いない。

確かにアリオスの治世もよくなり唯の軍事国家ではないという見識が広まっではいるがまだまだ甘い。

本当ならば彼女のような手腕を持つ王女が喉から手が出るほどほしいのだが、今更そんなことを考えても仕方のないことだ。

「では、誰が王女を狙った？……もしや……サンディア殿の……」

「そんなこと知るか」

吐き捨てながら、男は今まで一言も声を発さなかった人物に視線をやった。

その人物は組んだ指先を額に当て瞑目するように座っていた。

「おい、ハマナ。あんたの意見はどうなんだ」

上げられた瞳は静かで深い海の色。

しかし其処から意思を読み取ろうとする前に眼鏡が光を反射させその色を隠してしまう。

「今の状況では、どうということもできないでしょう。……暫くは静観を」

「そうですね」

痩せこけた男は安堵の息を吐き、いそいそと席を立った。
逃げるように去っていく男の背を睨み付ける男にそつとため息を付

いた。

「そう睨んでやるものじゃない。彼は今とても忙しい」

言い聞かせるように言ったのはハマナ・ローランド。

五元帥のうちで最も高齢であり、アリオスの知恵とも呼ばれる人物である。

彼に忙しいと言われた痩せこけた男はモーズ・シェリン。

祭事を司る彼は王族の結婚式を間近に控えた今、きつと誰よりも忙しいに違いない。

ハマナの言葉に鼻を鳴らしたのはエンと呼ばれる男だ。

それ以外に彼の情報はあまり出回っていなかった。

「俺だつて忙しいんだよ。五元帥が半分も居ないんじゃないからお飾りでいてやつてるだけだ。さつさと引退してこんな事に煩わされずに楽に暮らしたいんだがね」

「そう言わないでくれ。君が居てくれて私はとても助かっているのだから」

笑みを向けられてもう一度鼻を鳴らす。

「そんなに助けが欲しいならアイツを引きずってくればいいものを」

その言葉にハマナは静に首を振った。

「……アレにはアレの考えがあるのだよ」

エンは苦りきった顔を扉のほうへ向け、歩き始めた。

「アリオスに巣くう病魔も根深いかもしれんな」

手を振りながら闇に解けていくエンを見送りながらハマナも同意するよつに深いため息をついた。

第37話：古き友

モーズ・シェリンは自分の靴音にすら急かされるように歩いていた。会場の設定に主役たちの服装も決めてもらわなければならない。

現国王のルーファとダリアの式はそれは盛大で自分でも最高の出来だと思えるほど美しかった。

各国の使者たちも感嘆の息を吐いたくらいだ。今回も華やきに満ちたものにしなければならない。

そしてふと気づいた。

前は薄気味悪いと思っていた王子のことを今では毎日のように思っている。

あの髪の色に合う服装は？

絨毯の色は？

一番映える舞台は？

忙しさのうちに気味悪さなどどこかへ消えてしまっていた。

「気にすることでもなかったのか……」

髪の色も目の色も仕事のうちに忙殺されるような些細な事だったのかもしれない。

それにしても何ということだろう。

自分の仕事を脅かすような事件が起ころうとは。

これで式の延期になどなったら今までこなしてきた事は全部意味の無い事になってしまう。

サンディアを完全に疑っているわけではないけれど、彼女の周辺には暗い影があるのだ。

彼女が実権を失おうとも彼女の支持者は未だにいるのだから。

「シェリン様」

沈み込んでいた思考を聞きなれた声が呼び起こした。

「これはノウチェス殿」

大きな目をぎらつかせた男は武より知で力を得た貴族だった。

最近知り合い、話す事も多くなった。

「五元帥の方々は集まったのでしょうか？どうなりました？」

「どうとは？」

「式は中止ですか？」

「まさか。我々は静観して事を見守ります」

中止などともないとシェリンは首を振った。

「あ、あの魔物は結婚するのですか」

目を見開く男の肩をゆっくりと慰めるように叩いた。
今までこんな反応をしたのはこの男ばかりではない。

「王子が結婚したところで何が変わるということもありません。これは国同士の契約に過ぎないのでから。アリオスの繁栄のためです」

廊下で掴まるたびに時間を費やすわけにはいかないと、それだけ言っ
ってシェリンは先を急ぐことにした。

だから背後で男が零した言葉を聞くことは無かった。

「アレに力持たせてはいけないのに……」

今後の予定を立てると二人の少女たちは帰っていった。

あまりハナの帰りが遅くなるとケイトに怪しまれる心配もある上に、断りも無く部屋に入ってくる無礼者の知り合いがいるからだ。暫くすると新たな客がカナンの部屋への扉を叩き来訪を告げた。

「ハマナ様」

扉を開けると銀飾りのついている杖に身を預けたハマナの姿があった。

五元帥の一人と書庫の管理人というあまりに違う身分ながら二人には長年の親交がある。

「お二人は帰ったようだね」

「……知っておられたのですか」

机の上のカップもきれいに片付け、二人の痕跡など何処にも無い。

「そういう気がしてね」

そついう王女をくれと言ったのはハマナだ。

型に嵌らず、どんな逆境も乗り越える強い王女が必要だと。そう言つと交渉に当たつていた第二王女は妖艶に微笑んだ。

「エスタニアの王女はぬるま湯に浸かつておりますからね、賢者様のお目になう娘がいるかどうか」

「貴女はどうですか？」

「私とて黒き血に飲み込まれている一人に過ぎませんわ。一人、面白い娘がおりますの」

「……面白いですか？」

「お馬鹿さんですが、何百年脈々と培つてきた我が血さえあの娘の前には意味を持たない」

それが、最大限の彼女の褒め言葉と知り、すぐさま頷いたのだ。

「先ほど召集があつた。と言っても集まるのは三人だが……」

「そうですか」

五元帥に召集がかかるほど今回のことは重大になりつつある。

「エンはひどく機嫌が悪かつたよ」

「……でしょうね」

もう何年も会っていないが、眉の間に縦皺を作っている男の顔が容易に浮んだ。

苦笑するカナンを尻目にハマナを席に着いた。

「今回の事、彼女たちはどう見ているんだ」

「セイラ様はサンディア様ではないと確信しておられるようですよ」

「ほう。何故かな」

きらりと眼鏡を光らせたハマナにセイラの言葉をそのまま伝えた。

「勘だそうです」

「勘……なるほど勘か」

笑みをもらすハマナにつられてカナンも笑い始めた。

なんてあやふやで、けれどいざとなると其れが鋭いほど生き残る可能性も高くなる。

この国がまだ小さく弱かった時から、その勘を頼りに二人も生きてきた。

「彼女の勘は中々良いらしいな。お前の意見は？」

ハマナの勘も彼女ではないと告げている。

「同感ですね。サンディア様の支持者の仕業でもない」

彼らならこれを機に権力を取り戻したいと思うだろう。

セイラはエスタニアという大国との重要なパイプ役だ。傷つけるとは思えない。

彼らを懸念するとすれば、婚姻が結ばれる前よりも後のことだ。

「…動きますか」

十九年間後回しにしていたものが動き出した。

「けれど、あなた方は動かないのですね」

「……私はあの子に幸せになってほしいと思っている」

国のためと切り離しながら、残酷な取り決めに諾と言いながら愛しい存在だと思ふなどおかしいのかもしれない。

一番大切な時期を奪っておきながら幸せを望むなどおこがましい。そして望んでおきながら動くことも出来ない。

「私も願っていますよ。ジン様が幸せになることを」

見上げた友人はそれは優しく微笑んだ。

いつも傍にいて支え続けた彼が望むには相応しい願いだと思えた。

「貴方には感謝しています。セイラ様を見つけてくれてありがとうございます
ございます」

「私は何も……」

何もしていなかった。

五元帥の一人として王子に相応しい結婚相手を見つけようとしただけだ。

それはやるべき職務で目の前の友人のように何かを犠牲にしてまで行ったことでない。

「好意はありがたく受け取っておけばいいんです。そして返せばいいんですよ。人の想いを否定する必要などありません」

「私とてお前には感謝している」

カナンの想いを否定したわけではない。

「貴方の感情は読み取りにくいんですよ。五元帥だから賢者と呼ばれているからつていつも清まして、ニコニコしてなければいけないことなんてないんです。時には喚いて机を倒すなりすればいいんですよ。だから、そんなに肩がこるんです」

いつの間にか部屋の中には柔らかな香りで包まれていた。

目の前に出されたカップには澄んだ色の液体が湯気を立てていた。

「覚えていますか？昔は嫌な事があればすぐに決闘だと貴方は叫んでたんですよ。肩こりに効きますから残さずに飲んでください」

「……ん」

長年の友にありがとうなど中々口に出せず、口ごもった。

よい年をしてそんなことも出来ないのかと情けなくなるが、昔の愚行もすべて知られている相手には気恥ずかしい。

それを出来ないのをカナンの方もよく知っている。

「感謝してくださるなら、態度で示してください。タキニイ産の茶葉はこの時期にしか出回らないものなんですが、買いに行く事が出来ないんですよ」

「……………分かった」

暗に届けさせろと言われ、ハマナは頷いた。

「ついでにミンス殿のところの砂糖も欲しいですね。かりん酒も切れかかってますし、後は茶葉に混ぜる花も。種類はですね……」

次々に上がる言葉にハマナは深くため息をついた。ありがとの一言は随分と高くつくらしい。

「老人を労われ、そんなに一度には覚えられん。後でリストにまとめておけ」

その言葉にカナンを笑みを浮かべ、文字がびつしりと書かれた紙の束を差し出した。

「そうですよ。我々はもうおじいちゃんなんですから、助言を求められたら与えればいいのです。求められないのにしゃしゃり出て若い人たちの邪魔をすることはありませんよ。教え子たちは皆遅しく育ったでしょう?」

ハマナは温かいお茶を飲みながら深く目を瞑った。

その温かさはカナンの言葉とともにじわりと身の内を満たしていく。

「お前は私に甘い気がするな」

「いいですよ。その分貴方は自分に厳しいのですから」

苦笑がもれて紙の束はハマナの懷にしっかりとおさめられた。

第38話：お茶

部屋に帰りつくと夕飯にケイトを誘ったのだが彼は頑なに首を振った。

こっそり抜け出しているほんのお詫びのつもりだったのに軽々しく夫でもない男性を部屋に招くものではありませんと叱られてしまった。

「そんなに固い事言ってるのもてないよ？」

「前にも言っただと思いますが……もう少し慎みを持ってください」

苦りきった顔に実は窓から出入りしてますなんて言えるはずも無い。

「ジョゼなんて勝手に入ってくるのにね」

「……あの人は特殊なんですよ」

あまりに深いため息にケイトは苦労人だなあとセイラは自分のことは棚上げにして呟いた。

「何か進展はありました？」

その言葉にケイトは顔を引き締めて強い口調で言った。

「あつたとしてもお二人に教えて差し上げるわけにはいきません。どうか部屋で大人しくして置いてください」

「お引止めしている私の身にもなって下さいませ。セイラ様が暴れ

はじめないうちに解決してくださいな」

ハナの演技力に拍手を送りながらセイラも続く。

「もう三日目だもんね。そろそろ無理かも」

「私共も手を抜いているわけじゃありませんよ。ですが、いろいろありまして……」

あまりに申し訳なさそうな顔をされると此方が苛めているような気になってくる。

昼夜張り付いて守ってくれていることは知っているので、感謝の意味も込めて、ぽんぽんと背中を叩く。

「君たちが頑張っている事は分かってるよ。でも無理せずに休みはとってね」

「はい」

瞳を潤ませながらケイトが廊下に消えて一時間弱。

夕食も食べ終えてほっと一息ついているときに舞い込んだ問題が一つ。

「おかしいね」

「そうですわね」

二人の前に置かれているのはカップに注がれたお茶だ。
食後の一杯。

別におかしいところは無いように見えるが、問題なのは送り主だ。

「マキナが用意してくれたって？」

「ええ、傷に効くお茶だからと」

そのお茶はカナンの部屋で出されたお茶と香りも色もよく似ていた。彼も傷に効くと出してくれたのだ。

確かにダリアと共にお見舞いに来てくれたマキナがお茶をくれると言ったのだ。

「お茶だよね」

「ええ」

彼女は茶葉をくれると約束してくれたはずだ。

研究したがりのハナの性格を知って、それならば茶葉を持ってこよう。

セイラがハナの淹れたお茶を好むと知っている近しい侍女たちも必ず茶葉を持ってくるようになった。

だからお茶がなみなみと入ったカップが持つてこられることなど無いはずなのだ。

「怪しいね」

「そうですね。飲まないほうが良さそうですね」

まだ温かいお茶を処分するためにハナは立ち上がり、慎重にカップを手に持った。

もし茶葉で届けられたとしたら気づくことが出来ただろうか。

ハナは唇を噛み締めて、ゆれるオレンジ色の水面をきつと睨んだ。

「何かあったのかな？」

「何かとは？」

「だって、二日間何も無かったのに、今日は明らかにおかしいですよ」

「そうですね」

確かに警備は未だに強固で、この二日間と今日とで何かが変わっているわけではない。

それならば襲う側に何か心変わりでもあったのか。

どちらにしろ早く犯人を捕まえるに越したことはなさそうだ。

「明日はあの計画実行しよう」

「ええ」

第39話：馬車の中

ユリザがセイラ負傷の報を受けたのはアリオスへ向かう馬車での事だ。

もう何日も揺られているが、さすがに彼女は馬に乗りたいや森に入りたいと駄々をこねることは無かった。

宿に着けば彼女の好みを熟知している侍女たちが部屋の内装から食べ物まで指示を出し変えていくので、揺れさえ除けば中々快適な旅だった。

馬車の中でも己の仕事をこなしていたユリザに使いのものが持つてきたのは定期的な使者との連絡ではなく、簡素にセイラが射られ怪我をし、犯人は今のところ分からないとだけ書かれてあった。

「何をやっているのかしらね。あの子」

アリオスへ入ってまだ一月だというのに、相変わらず妹の周りは騒がしいらしい。

使者の報告という名ばかりの愚痴の束が落ち着いたと見たのに、今度はもつと面倒な事に巻き込まれているようだ。

「それにしても半端ね」

この書き方だと大した怪我を負わされたようでもない。

ちよつと掠った程度だろう。

寝込むような傷を負ったのなら、アリオスの危機管理能力とエスタニアへの対応を見ることが出来たのにと物騒なことを考えているなど当のセイラは全く知らない。

視線を向けた窓の外には夕闇が迫っている。

もうすぐ今日の宿に着くだろう。

丁度いいばかりに、今まで手をつけていた書類と共に手紙をまとめ、今日の仕事は終了だ。

ユリザにはセイラが犯人探しをしているような気がしてならない。いや、彼女の知る限りセイラなら絶対首を突っ込んでいるはずだ。

「期限は、そうね私が城に着くまでにしましょう」

それまでに解決出来ないようならば、アリオスにも少々痛い目を見てもらおうと、ユリザは魅惑的で恐ろしい笑みをそっと浮かべた。未だセイラはエスタニアの所有物だ。

アリオスの私情で傷つけるなど許されることなく、お気に入りに出されるのも面白くない。

そのお気に入りが隣国を引っ掻き回しながらちょこまかと動いていると思うと非常に愉快だ。

「賢者殿に貸しを作るくらい良い働きをして欲しいものだわ」

アリオスが軍事力で成りあがろうが、王家に恐ろしい噂話があるのがユリザには関係ない。

けれど、型に嵌らぬ王女が欲しいと言ったアリオスの知恵と呼ばれる老人は中々面白い。

次に会ったら「あの娘お役に立ちまして？」と聞く気だったのだ。

今回はいい機会かもしれない。

ほくそ笑んでいると次第に馬車の速度が落ち、従者が宿に着いた事を知らせた。

第40話：とりかえ1

ドアの隙間からそつと廊下を窺うと現在の見張りは珍しくケイトではなかった。

いくらはりついていると言われても、ケイトとて生身の人間。たった一人で休みも無く、廊下に立ち続ける事などできるはずがない。ドアから滑り出ると、代わりに立っている青年が瞬時に何事かと口を開いた。

「セイラ様のために本の続きを貸りに行きますの」

初めてみる顔の青年にそう言って微笑めば、すんなりと通してくれた。

柔らかい日差しが差し込む廊下を堂々と歩いても誰にも見咎められる事もない。

今日は書庫の前に行く場所があった。

普段は、あまり足を向けない一画にある豪華な扉の前で足を止めると、侍女を捕まえ、部屋の主に来訪を告げてもらう。

侍女は事前に連絡もなしに来たので、あまりいい顔はしなかったが、セイラ様からの言いつけでと強調すれば、仕方なさに扉を叩いてくれた。

扉の先で部屋の主であるテラーナは、ついと視線を上げた。

訪問者に何用かと問いつめるために視線を上げたのだが、その姿が目に入ると別の言葉が口をついた。

「あ、貴女……」

瞠目したテラーナに少女はくすりと笑った。

テラーナはすぐさま侍女たちに退室を命じ、まだ信じられないもの

を見る目つきを少女に向けていた。

部屋に二人きりになったと確認すると少女は皇かな黒髪に手をやり、それをすべりおろした。

中から現れたのは亜麻色の髪だ。

瞳が細められ、唇が嬉しげに孤を描く。

「ふふ。やっぱり君は騙せないみたいだね」

綻んだ唇から零れるのは、紛れもないセイラの声だった。

ばれてしまったのだから大人しくハナのまねをしている必要は無い。首もとをくつろげて纏めていた髪の毛を解いた。

「侍女の服って窮屈だね」

ふうと詰めていた息を吐く。

黒い髪とエスタニアの侍女の服、その姿はここには一人しかない。服を交換して、黒髪の髻をつけると誰も疑わずに、セイラのことをハナだと認識してくれたのだ。

今頃、部屋ではハナがセイラの格好をして寝室に閉じこもっているだろう。

「貴女、何をなさってるの……状況が分かっているの？」

自分が狙われていると分かっているのだろうか。

確か部屋にいるように命じられているのではなかったか。

どうしてふらりと、しかも侍女の格好をして自分の部屋を訪ねてくるのか分らず絞り出した声は、驚くほど震えている。

喉元を押さえつつ、セイラを見やると、彼女はことりと首を傾けた。その動きに合わせて、窓から差し込む光りの粒が亜麻色の髪の上で弾けた。

「テラーナは大丈夫？」

その言葉に、不覚にも光りの粒を美しいと思ってしまった思考は追いやられ、沈めたはずの想いが浮き上がる。

「何をおっしゃっているの？大丈夫に決まっていますわ。誰も私など狙うはずないもの」

「そんなの分らないよ」

「誰が私など狙うのです。何の意味も持たない、価値のない妹君など傷つける意味などおあり？」

何を言っているのだ。

そんな顔をしたセイラにさらに怒りが込みあがる。

思わず、立ち上がると椅子は大きな音を立て倒れたが気になどならなかった。

「私は貴女ほど重要だと思われていないの！ あ、あの人ほど気にかけられる人物ではないのよ」

「あの人？」

「あの色なしよ！ あの魔物」

悲鳴のような声の後、しんと静まった部屋に軽やかな笑い声が響いた。

「……何がおかしいのです」

「テラーナはジンが羨ましいんだ」

にこにこと笑みを浮かべる少女の言葉を理解すると、一気に顔に血が上っていくのを感じた。

「誰が、あんな人！」

「うん。うん。ジンはキレイだもんね。憧れるのは分かるよ」

納得するように何度も頷かれ、頬がさらに熱を持つ。

「貴女ね！」

「でもジンを羨ましがする必要は無いよ。君はとってもキレイなもの」

「なっ……」

「それは君だけの色だよ。誇るべきだ。」

まっすぐに向けられた瞳が、何を見ているのかはすぐに分かった。膨れ上がった怒気は、急に行き場をなくし、開けたままの口をどうしていいのかも分からなくなった。

「何も知らないくせに……」

知っているわけではない。

己の色が嫌だと、比べられることが苦痛なのだと一言たりとも漏らしたことはないはずなのだから。

「うん。君の事、何も知らないね。テラーナも私のこと知らないでしょ？　これから知っていけばいいと思わない？」

「私、貴女が嫌いです」

「じゃあ、好きになってもらうように頑張る」

威嚇するように睨み付けて、嫌いだとはっきり宣言したのに、深い色を湛えた瞳は目があつたことを喜ぶようにふわりと細められた。嫌な女だと部屋を出て行ってくれたらよかった。

先に目を逸らしたのはテラーナの方だ。

「私ね」

止めて欲しい。これ以上、言葉を重ねて中身など見せてほしくない。誰からも愛されて、劣等感をかきたてる嫌な人であって欲しい。

「……帰ってください。早く帰って！これ以上かき回さないで！貴女の事を好きになんてなりたくないの」

言葉を遮るように叫んで、きつく瞼を閉じた。目頭を熱くさせるものを認めたくなど無かった。

痛くなるほど奥歯を噛み締めて、涙が零れるのを堪えていたのに、次の言葉で一瞬、力が緩んでしまった。

「私はテラーナのこと好きだよ。また手合わせしたいな」

「私は……嫌いです」

搾り出すような声を聞いた後、セイラは背を向けて扉に手をかけた。

「嫌いです。……けれど、まだこの間の勝負はついていません。貴女なんかに負けませんから」

その声に振り向いて、セイラは笑みを浮かべた。

「うん。私も負けない」

心からの笑みにテラーナはやはり嫌いだと強く思った。
拒絶したはずなのに、すんなりと次の機会を取っていく相手も、それに乗ってしまう自分自身も。

「……ノウチエスという人物を」

しばし考えを巡らせた後、テラーナは一人の名を上げた。

「え？」

「勝負がつく前に死なれては困ります」

第41話：とりかえ2

漆黒を亜麻色に、かつちりとした侍女の服を動きやすい服装に換え、主の寝室にぽつりと自分だけいるのは妙に落ち着かない。

何度時計を見ても、針は遅々として進まず、やっと一時間ほどが過ぎた頃には、もう半日以上こうしているような気がしていた。

今までも身代わりになったことはあるが、絶対に安心な場所にいると確信があった。

ジニスでは、全てが味方だった。

ここでは、完全に味方だと思えるものは、ごく僅かだ。

しかも、今回はその僅かな人の目すら掻い潜って動いているのだから、心配は一秒ごとに大きくなっていく。

見張りはずまくかわして行ったものの、無事に目的地まで辿り着けたかどうかと幾度と無くため息を零した。

現在のハナは一応、セイラと同じ格好をしているが、ジョゼやケイトが入ってくればバレてしまう。

それは外に出て行ったセイラにも言えることだった。

「気づかれる前に戻ってこられると良いですけれど」

万が一に備えて、ハナは寝室に籠っている。

よほどの礼儀知らずか緊急事態でもない限り、誰かが押し入ってくることはないからだ。

「……大丈夫ですわ」

ハナは寝室のドアを見つめながら祈った。

決して、嫌な知らせを届けるために、ドアが開くことがないように。セイラが早く、ただいまとドアを開けてくれるように。

大丈夫の言葉は自分を鼓舞するためだったか、さほどの意味を持たずに消えていった。

何もする気が起きず、ドアを睨み付けたまま微動だにせずに居ると、頬を冷たい風が撫でた。

冷気の侵入場所を探すと、窓が僅かばかり開いている。

まさか、セイラが窓から戻ってくるなどありえない。

けれど、見張り役がケイトに代わっていたら……何らかのトラブルが発生したとしたら……

ハナはゆっくりと慎重に窓に近づいた。

隙間から下が覗けるほど近づいても、セイラの顔は見えない。もう一歩近づいても、それは変わらなかった。

そもそも、いくらセイラとて体を支えるものが無いのに、ここまで上がってこれるはずなどないのだ。

警戒して後ずさるうとした瞬間に、窓は勢いよく開けられ、冷気が全身を打った。

悲鳴を上げる前に、視界が真っ暗になり、急速に体から力が抜けていく。

完全に意識が遠のく前に、ハナの耳に冷たい声が振ってきた。

「一緒に来てもらいますよ。セイラ王女」

零れ落ちそうだった主の名を、ハナはぐっと飲み込んだ。

第42話：線

「まあ、セイラったら」

紺色のスカートの裾を引っつかみ、走り行く少女の姿を窓から見下ろしながら、ダリアはふっと口元を緩めた。結われていない亜麻色の髪はその速さを示すように、ぴんと後ろへと流れている。

向う先は書庫なのだろう。

「ケイトの奴出し抜かれたな」

ダリアは同じように眼下を見下ろす男をちらりと見ながら、可哀想な彼の部下のことを思っただけ息をついた。

「意地悪な方ね。わざとケイト殿にお使いを頼んだくせに」

「何のことだか」

口角を上げる男にもう一度息をつく。

我が兄ながら、厄介な人だと。

「本当に意地悪ね」

少女の姿は小さな足跡だけを雪の上に残して、もう消えていた。ダリアは窓の背を向けると椅子に戻り腰を下ろした。

「サンディア様のことなんてちつとも疑っていないのでしょう。必ずセイラが首を突っ込むと知っていて、部屋に軟禁するなんて」

「お嬢ちゃんには、もう少し世間も知ってもらわなきゃな。腕も立つし、度胸もある。だが、あのお嬢ちゃんは純粹すぎる」

ここは良い人ばかりの彼女の故郷ではないのだ。

思いもよらないほど暗い部分がある。

わずかばかり表情を固くした妹に暗い笑みを返した。

夢物語から抜け出したようなダリアでも、十分にこの国が抱えている恐ろしさも醜さも知っている。

彼女は、辛さとは無縁といった笑顔をたたえながら国の頂点に立つ夫を支え、共に戦ってきたのだ。

「セイラは強いわ」

「確かに予想以上のお姫様だけだな」

「そうでしょう。兄様が認めるくらいなもの」

ふいと視線をそらしたジョゼに小さく笑いかけ、セイラの回りにいる人物の顔を思い浮かべた。夫であるルーファはもちろん、ダリア付の侍女であるマキナも、彼女のことを気に入っている。

「守り、支え、導いてくれる人が周りにいるのは、あの子の力だと思わない？それにね、線を引けないのよ」

「線？」

訝しげに眉を寄せるジョゼにカップを渡しながらダリアは頷いた。

「ここからは入ってこないでっ。境目を作れないの。作ってもセイラは越えてしまうのかしらね？　それがちつとも不快ではないのよ。」

やはり分らないといった顔をするジョゼに言葉を重ねた。

「私、ジルフォードの支えになれると思っていたの。だって私の弟でもあるのよ。うんと仲良くなろうと思ってたわ。でもね、初めて会ったとき、あの子脅えたのよ」

「は？脅えるってあいつが？」

ジョゼにはジルフォードが脅えている姿など想像ができなかった。しかもダリアに脅えるというのが理解できない。

彼女の笑顔は、警戒心を解かせ安心をもたらすものだ。しかも初めて会ったときというなら、十二、三の子供のはずだ。何に脅えるというのだろう。

「そうよ。目の前の人物は誰でもここまで関わってもいいのか。誰かに影響力があるのか、迷惑はかけないか……一生懸命見極めようとしていたのね。どこに線引きして良いのか。」

細められたダリアの瞳は、遠い記憶の中の小さな少年の姿を見つめていた。

本に埋もれるようにして居た少年は紫色の瞳で、懸命に相手の正体を見極めようとしていた。

「ルーファの婚約者だと知って初めて線引きがされて、対応が決まったのね。挨拶もするわ。質問にも答えてくれる。」

けれど一度とてジルフォードから質問されたことなどなかった。

「お茶会にも来てくれるわ」

けれど兄の婚約者と知ってから二人きりで会うことは無かった。

「それでいいと思っていたのよ」

いつか距離は縮まるものだと思っていたのだ。けれど、会ったときから全く変わっていない。

「でも、セイラが来て、少し欲が出てきたみたい。もう少し仲良くなりたいわ。ジルフォードがびっくりして大声を出すところとか見てみたいわ」

「あいつが大声ね……」

「にっこり笑うところでもいいわね」

ジョゼはありえないと言えず、手にしたカップの中身をぐいと飲み干した。

「さて、そろそろ失礼しますよ。王妃様」

「ええ、ちゃんとお仕事してくださいね」

他国の使者も見惚れる笑みを向けられて、ジョゼは苦々しげな表情を浮かべる。

溜まりに溜まった書類の山を幾日も部屋に放置していることを責められていると分っているからだ。

ルーフが漏らしたに違いない。

夫に迷惑をかけないで下さいと笑顔の上に書いてある。

「……ああ」

「ケイト殿に押し付けしないで下さいよ」

「そんなことするわけないだろう」

うそ臭い作り笑いを浮かべ去っていくジョゼの姿に、ダリアはそつと心の中でケイトに詫びた。

第43話：動

カナンの苦笑の理由を知って、セイラも苦笑し、握り締めた鬘を掲げて見せた。

「ちょっと前まではハナだったんだ」

テラーナの部屋で脱いだ後、しっかりと握っていたはずなのに、その存在をすっかりと忘れてしまっていた。これでは、いくら侍女の格好をしようともハナには見えない。侍女の格好をしたセイラ王女だ。

一直線に走ってきて、誰にも声をかけられなかったのは幸いと言えようが無い。

「ノウチェスって人知ってる？」

テラーナの告げた名前には微かに聞き覚えがあった。きっと代わる代わるに挨拶にやってきていた貴族たちの一人なのだろうが、顔まではおもいだせない。「誰々の血筋で、役職は……」と挨拶を受けながら、耳元でハナが相手の情報を教えてくれたはずだったが、セイラは笑みを貼り付け優雅に頷くので精一杯だったのだ。初めの頃こそ覚えようと努めていたのだが、そろえた様に同じような服装で同じような口上を述べていくのだから頭には入ってこない。しっかりと覚えている人物の中には「懐かしいでしょう」という理由で、部屋いっぱいにはエスタニアの国花を贈ってくれた有難迷惑な人もいたが、彼の名前はノウチェスではない。ついでにいうと、大量に送られた淡いピンクの花は王都でしか咲かないものなのでセイラにとっては懐かしくはなかった。

「存じておりますが……」

その名を聞いて、カナンの表情が曇った。
暗い思い出を引きずり出すには十分だった。

「アリオスの闇の犠牲者です」

今でも鮮明に覚えている。初雪が積もった美しい光景の中を戦場さながらに怒号が行き交った。城中が痛いような緊張に包まれ侍女たちは息を潜めていた。兵士たちもいつもの規律は乱れ、落ち着き無く彼らを盗み見ていた。

彼らが声高に叫んでいるのは、母親から引き離された子供を殺すかどうかだった。

前王がジルフォードの城中での生活を認めたことと、元帥が黙認したことにより騒ぎは鎮まったものの不穏な空気は払拭されぬまま、ここまでできてしまった。

「ジンがらみなんだね」

答えを聞かずともカナンの表情を見れば分る。

「ジンは？」

馴染みの顔が見えないことで、ざわりと胸の中に漣が立つ。カナンの部屋の中にはジルフォードが居た痕跡は微塵も無い。

「今日はお見えになっておりません」

カナンの沈んだ声に嫌な予感がして、セイラは部屋を飛び出した。

「セイラ様！」

振り返ると、全身からぴりりとしたオーラを放つケイトの姿があった。その後ろには見知らぬ青年が付き従っていた。ケイトの額に浮かぶ汗とせわしく現れる白い息が、どれほど懸命にセイラを探していたのかを現すようだった。

「何をしてらっしゃるのですか！」

近づいてくるオレンジの髪がケイトの怒気に煽られて炎のように見える気がする。いつもは垂れ気味の目もつり上がって見えるのは気のせいだろうか。

「どれだけ心配したと思ってるんですか！ 部屋はもぬけの殻です」

どう言い訳をしようかと考えていると、気になる言葉が耳に入った。

「……ハナは？」

逆に詰め寄り、問いただすとケイトの顔にはつきりと困惑が浮いた。部屋がもぬけの殻なはずはないのだ。ちゃんとセイラ王女を用意してきたのだから。

「侍女殿でしたらおられませんでしたよ」

二人のやり取りを傍観していた青年が、そう告げた。「寝室に」と言おうとしたセイラを見越して青年は告げた。

「恐れながら緊急事態でしたので、寝室も調べさせていただきましたが無事にも」

「そう」

ハナが勝手に部屋から出て行くとは考えにくい。ハナも巻き込まれてしまったのか。

「セイラ王女。なにか分りましたか？」

そう問いながらも、全てを知っているのではないかと思わせる暗褐色の瞳。さまざまな感情をあらわにしているケイトの横で表情めいたものを見せず、落ち着き払った声の青年は冷淡にも見えるが、信用できると直感が働いた。

「ノウチェスって人が関係あるかも」

「ノウチェス……わかりましたから、セイラ様は部屋に戻ってくださいよ」

ケイトの言葉に、ジルフォードを探していたことを思い出したセイ

うは、くると背を向けると走り出した。

「ジンを探しているんだ。君たちハナを探して」

「セイラ様！」

「任せたから。ハナは一人ぼっちは嫌いな」

のびした手は虚空をつかみ、セイラの背中はずぐに遠くなっていった。振り向きもせず、ただ信頼だけを残して去っていくセイラに諾と言つ以外、ケイトには答えようが無い。

「追いましょうか？」

がくりと肩を落とすケイトに声をかけると首が振られた。

「お前はジョゼ將軍に報告を」

「了解」

ケイトは音も無く去る部下とは逆方向へと駆けた。

ケイトもハナの性格をわかりつつあった。二人の共謀でないのなら捕らわれてしまったに違いない。外はもう薄暗闇が支配している。

一人で心細さを味わっているだろうハナを早く見つけるべく、足に力を込めた。

第44話：光

散々、暴れてみても扉を開けることはできず、遙か頭上にある窓からも脱出はできそうにない。
その窓から差し込む陽光もなくなると小さな部屋の中は完全な闇だった。

今日は月の姿すらないらしい。

膝を抱え込むように座り込み、冷たい石の壁に身を預けると寂しさが込み上げてくる。

夜の闇は怖くない。夜の闇は人々の安らぎを守るためだと教えてくれた人がいたからだ。

人工の闇も怖くない。坑道の中は真っ暗でも、手のひらにはしつかりと大事な人の温もりがあった。

けれど、今は一人きり。

冷たさと静寂以外、何もなかった。

ぎゅっと己の身を抱いていると、何も分からず路地裏に転がっていた頃を思い出す。

いつも空腹で、寒さと寂しさに震えていた。

誰もが見ないふりをするか、汚らしい物を見る目をするかのどちらかだった。

朝がくるのが恐ろしくて、夜がくるのが怖かった。

自分でも、生きているのか分からなくなった頃、手を差し伸べてくれたのは、美しい女性と女の子だった。

ぼろ布を纏っただけの見捨てられた子供に女神の名を与えてくれた。

その時の光景を繰り返し思い出しながら、なんとか涙は零さまいと唇を噛みしめると、その痛みでまた涙が込み上げてくる。

今泣けば、涙まで凍ってしまいそうだった。

セイラは暗闇で迷子になったときは、大きな声で呼べと言った。
どこにいても必ず見つけてあげるからと。

けれど、今はどんなに心細くてもその名を呼ぶことはできない。

ハナは懸命に扉が開かないことだけを願った。

本物のセイラ王女を捕まえたとな誰かが叫ばないように。

どれほど経ったのか、ハナにとっては絶望的に長い時間が過ぎた後、
暗い部屋に四角い光の入り口ができた。

痛いほど強く心臓が鳴る。

緊張して固くなった体にオレンジの暖かい光が降り注いだ。

その光は、微笑みながら手を差し伸べた。

「ハナ殿。助けにきましたよ」

ケイトの暖かな色に安堵を覚えながら、同時に焦りが沸き起こる。
ケイトはセイラの護衛に付いていたのではないのか。

「あなた、どうして！ セイラ様は……」

信頼できるからこそ任せたのに。
今まで耐えていた涙が溢れだす。

震えるハナにマントを巻き付けてケイトは安心させるように、肩を叩いた。

「セイラ様に貴女を見つけるようにと頼まりました」

「セイラ様に？」

「貴女はさみしがりやなので、きっと泣いていると」

「泣いてなどいません」

涙を溢れさす瞳で睨まれても、全く説得力は無かったがケイトは頷いた。

「そうですね。それはセイラ様が心配で思わず流れてしまっただけですよね」

「そっそっですわ」

泣いていると宣言したのも同じことに気付かぬままハナはさつと下を向いてしまった。

重力に従って、ほとほと涙の粒が落ちていく。震えるハナの肩に手を置いて、ケイトは微笑んだ。

「大丈夫ですよ。たくさんの方が 貴女方の味方なのですから。さあ、早くセイラ様に無事な姿を見せてあげましょう」

頷くハナの背を押して、小さな入り口から廊下へと足を踏み出すと、

ハナがはつと息を飲み、歩みを止めた。
前方で止まってしまったハナの視線を辿ると床に伸びた兵士の姿がある。

「……貴方がやりましたの？」

伸びた兵士たちは体格もよく、それぞれに剣を帯びていたが、誰一人として手にする間もなく倒されたのだろつ。
兵士としてのケイトを知らないハナにとっては信じられない光景だった。

「それでも鍛えているのですよ？」

軽く肩を竦める姿からは優しさばかりが伝わってくる。

「こつこれでも、小さな隊ですが、任されているのですよ！」

ハナの困惑の表情が疑いに見えたのか、焦ったように続くケイトの言葉に、ハナの口元が久しぶりに緩んだ。

「疑ってなんていませんわよ」

目元を濡らす涙は温かく、凍えてしまうことはなさそうだ。
月の姿が見えなくても、隣に柔らかな灯火があれば、追いかけるのは容易な気がしてきた。

「ケイト殿。助けに来ていただいてありがとうございます」

深々と頭を下げると焦っている様子が伝わってきておかしくなった。
顔を上げ、笑みと共に「ありがとつ」ともう一度口にすると、ケイ

トの頬に色がついた気がしたのは、きつと錯覚に違いない。
もし本当だとしても確かめる余裕はない。

ハナはきりりと顔を引き締めると、しっかりと前方を見据えた。

「一刻も早く、セイラ様の所へ行きましょう」

「ハナ殿はいつもセイラ様が一番ですね」

自分の身より、見えないセイラの身を案じて震える小さな背に、もう少し自分のことを考えてもいいのにとケイトは苦笑した。

「貴方には居ませんか？唯一の方」

振り向いたハナの大きな瞳の中でケイトの困惑が揺れた。

「唯一……ですか？」

ケイトには大切な家族も尊敬できる人物も身近にいるが、唯一となると返答に困る。

ハナにとって何者にも代えがたい人は二人いたが、一方が欠けた今となつてはセイラが唯一の人だ。

「私、セイラ様が居なかったら生きていないでしょう」

ケイトは瞠目したが、ハナにとっては言い過ぎではない。

「私、孤児でしたの。セイラ様に拾って貰わなければ、飢えて死んでいたか、殺されていたか」

自ら生きるのを諦めていかかもしれない。

昔は孤児だつと自ら口にするなど無いと思っていた。口にする
ことで、捨てられたのだと、要らない子供だったのだと自覚するの
が怖かったからだ。今では誰よりも幸せだと思っている。

けれど、自分が孤児であることが歓迎されないことも知っている。
ジニスのセイラの侍女ならば問題ないことが、エスタニアのセイラ
王女の侍女としては問題なのだ。

現に、アリオスの貴族たちは挨拶に来ては、私どものところにもセ
イラ様と年の近い娘がおります。侍女にいかがですかと言ってくる。
セイラの汚点になると分かっているながら、ジニスに残るという選択
は出来なかった。

「名前も住む場所も生きることも全て与えてもらっただけです。それ
までは路地裏に捨てられていたんですよ」

路地裏での楽しい思い出なんてほとんど無いが、路地に流れてきて
いた美しい歌声が好きだった。けれど、歌詞はひどく嫌いだった。
こんなに別れが辛いなら、出逢わなければよかったのにと最愛の人
を失った女性の心情を切々と歌うのだ。そんな贅沢なこと逢えたか
ら言えるのだ。一人ぼっちだった当時のハナにとって、彼女の想い
は傲慢だとは思えなかった。

今は少しだけ分かる。やはり出逢わなければよかったとは思わない
が、無くすのはひどく怖いものだと思ってしまったからだ。

「私、セイラ様が一番ですけれど、私が置いていかれたくないんで
すわ。無くしたくないんです。だから、全部自分のためなんです」

「それで、いいのではないですか。結局、セイラ様のためにもなる
のですし」

「……そうでしょうか」

二人は傍から見れば、互いに信頼し必要とし合っているとしか思えない。ケイトは力強く頷いた。

「セイラ様は一直線暴走型ですから、ちゃんと止めてくれる方が必要ですよ」

「一直線……なんですよ。それ」

そう言いながら、なぜか納得できてしまう。

「ハナ殿は適任でしょう？」

「……そうだといいと思いますわ」

「それを証明しに行きましょう」

第45話：はじまりの場所

「ジンー！」

もう何も心配事はないと確信したセイラは探し人の名を大声で呼びながら廊下を進んでいた。すれ違った幾人かが、ぎょっと目をむいたが構ってなどいられない。広くて複雑な構造の城の中は探検するにはもってこいの場所だが、人探しをするとなると骨が折れる。しかも、相手が隠れるのが得意ならばなおさらだ。あれほど、人の目を引く容姿をしているというのに、誰もジルフォードが何処に居るのか知らない。彼だけの秘密の通路でもあるのではないかと疑ってしまうほどだ。あればいいのにとセイラは思う。いつもいつも、誰にも見つからないように気配を押し殺して、自分の家を歩いているなんて辛すぎる。

「あっ！」

狭い通路の先に、目当ての色を見つけ走り出す。ここはどこへ続く道だろう。灰青の石畳が規則正しく並ぶ先には足を踏み入れたことが無い。石畳の先にあるつた草を絡ませた白いドーム状の建物はお墓だと直感的に悟った。人工的な白は雪よりも冷たく人の侵入を拒絶している。

「ジン」

足音を低くし、近づくとジルフォードの前方には人がいると知れた。濃紺のマントが白い背景に良く映える。

「これはセイラ様。一度、お目にかかりましたね。ノウチエスでこ

ざいます」

セイラの存在に気づいた男は深く腰を折った。貼り付けたような笑みが記憶から浮かび上がる。ご機嫌取りに来た貴族の中で一人だけ、こう言っただ。 「故郷に帰りたいのではありませんか」と。名を聞いた瞬間に体に力が入る。最もあつてほしくない組み合わせだった。セイラは寄り添うようにシルフォードの横に立つ。

「ここがどういう場所なのかお分かりですか？」

ノウチェスは二人に背を向けて、扉に手を突いた。

「……お墓かな」

「そうです。王族の眠る墓です」

扉に鍵などかかっているのか、ノウチェスが力を込めるにしたがつて扉はゆっくりと内側に開いた。冷たい空気が吹き付ける。何か甘い香りが混じっていたが、セイラには何の香りかは判断できない。

「王族のお墓？」

それにしても随分と小さな気がする。ノウチェスは薄く笑うと滑るように中に入り招きいれるような格好をとった。

「ここはほんの入り口でございますよ。ほら、あそこに扉があるでしょう、あの扉から地下に降りるのです。この城は墓の上に立っていると言っても過言ではありません」

セイラが導かれるように中に入ると、シルフォードも続いた。中も

白で統一されてはいたが、石の材質が違うのか踵をうちつけると、甲高い音がする。ノウチェスの指差した扉の両脇には石像が安置されていた。一つは鎧を身に着けた武神の姿だ。口を引き結び、両手に剣を構える姿は鬼気迫るものがある。己の身丈よりも3倍もあればなお更だ。彼が持つ2本の剣に、あるフリーズが思い出された。

「『暁を背に對の魔劍を従えて咆哮せしめし軍神マルス。右手に持ちしは漆黒の刃『月影』左手に持ちしは真紅の刃『陽炎』。『月影』に切り裂けぬものは何もなく、『陽炎』に守れぬものは何もない』」

「ご存知でしたか。そうです。マルス將軍です。こちらがエイナ」

同じように武装した姿なのに、どこか優しげな雰囲気をかもし出す女性はマルスの妻だという。エイナの舞は勝利をもたらすとされ、今でも好んで舞われるものの一つだと聞いた。舞えないと兵士の妻にはなれないのだと笑いながらマキナが教えてくれたが、本当かどうかは分らない。

「彼らからアリオスは始まりました。ここが始まりの場所だと言われています。死者をこの下に葬って始まりと終わりを繋ぎ、一つにするのです。」

セイラは横にある温もりにさすがのように引つ付いた。身を蝕む冷たさと嗅ぎなれぬ匂い、わんわんと反響して迫ってくるような声に視界が揺らいでくるようだ。青空の下、故人が好きだった花を飾り、懐かしむ。ここはそんな場所ではなかった。

匂いが、ふと強くなると、支えてくれるジルフォードの手がなければうずくまってしまうようになる。

「そして、悪いことはここに葬るのです。そうすれば善きこととし

てもう一度、めぐってくるでしょう」

声が大きくなった。支えられた手に微かに力が入ったのが分った。

「悪いこと？」

「ご存知でしょう？」

いつの間にか背後の扉は閉じ、いくつもの影が現れた。それぞれに抜き身の剣を持ち、二人の周りに輪を作る。

「魔物は闇に葬らなければ」

ノウチェスの瞳はジルフォードを捉えていた。親しみのこもらない刃のような冷たさを持っていた。

「魔物なんてどこにもいない！」

そう叫べば、ノウチェスは哀れむように小さな笑みを浮かべた。

「貴女も魅入られてしまったのですね。この魔物を葬れば、きっと善きものとして生まれ変わり、今度こそあの方に幸せをもたらずでしょう」

ノウチェスが手を挙げると、輪がぎゅっと狭くなった。

全身に痛みが走っているような感じた。心臓がぎゅっと縮こまり、手足に必要な以上の力が入る。四方八方から浴びせられる殺気に怖気づいているのだと気づいたとき、自分は師の言葉を理解していなか

ったことを知った。彼は刃を持つ覚悟はあるのかと聞いたのだ。勝ち負けを決めるためじゃない。血を吹き、相手を傷つける覚悟はあるのかと。じわりと嫌な汗が背中を落ちていく。覚悟なんてこれっぽっちも出来ていない。

セイラはジルフォードの手をきつく握った。こんなところでずっと一人で戦ってきたのだろうか。手のひらから放して欲しいという気配が伝わってくる。放した途端に、まるで舞のような優雅な姿で戦闘態勢に入るのだ。嫌だと思った。放すのが嫌なのか戦わせるのが嫌なのか。判断できぬままにジルフォードの手を引いて走りだしていた。マルスとエイナの間を走る抜け、体当たりするように扉を開くと、長い階段が闇に続いていた。

第46話：はじまりの場所2

「そちらに逃げ場はありませんよ」

眼下に広がる闇にドキリとしながら、背後に迫る声に押されるように一步を踏み出した。ぐるりと終わりの見えない螺旋階段。壁に手を付ながら慎重に、出来るだけ早く階段を駆け下りる。一方には壁がなく、足を滑らせれば奈落まで落ちてしまいそうだ。

「全部で421段」

「え？」

振り向くと白い美貌が闇に浮かんでいる。ジルフォードはセイラに並んだかと思うと、すいと前に出た。

「全部で421段。今253段」

ジルフォードの足元でカンと音がした。何故だろう。目の前にジルフォードの姿があるだけで、階段を駆け下りる速度が上がっていてもちつとも怖くない。自分たちの足音に急かされながらしばらく下り続けると、ぼんやりとした明かりが見えてきた。どうやら部屋があるようだ。418段 419段 420段

「421！」

入り口をくぐると地下とは思えないほど広大な空間がひろがっていた。数十の太い柱が高い天井を支え、その下には石棺が規則正しく並んでいる。床自体が光っているのか部屋全体がぼんやりとした明

かりに照らされているのだが、天井の隅々にまで、その光は届いておらず、白く煙る息が凍って落ちてくるのではないかと思うほど寒い。

部屋の中央がぼくと明るくなった。目を凝らすと、それが蠟燭を持った人型だと分った。闇を纏ったかのような黒いマントを引きずりながら、何者が来たのかと見極めようと近づいてくる。目が悪いのか、睨むように目を細めたり開いたりを繰り返し、最期にはすんと鼻を鳴らす。

「おや、216番目の王子様」

腰のひどく曲がった小さな老人は、前歯の無い口でヒョヒョと不思議な声で笑った。笑い声に合わせ、蠟燭の火が揺らめいて室内に陰影をつける。不思議なことに火が形を変えることに、色も様々に変化した。まるでジルフォードの瞳のようだ。

「少し、騒がしくなる」

ジルフォードが言ったように背後からは沢山の足音が迫ってきている。

「だろうさねえ。ヒョヒョ。おお、これは、これは」

老人がセイラに近づいた。セイラより小さな老人は、セイラを見上げにっと口の端を上げた。白濁した瞳は正確にセイラの姿を捉えていないようなのに、心の奥底を覗き込まれているような奇妙な感覚が全身にはしる。姿勢を正すと、またあの笑い声がした。

貴方は誰なのか。それを聞く前にジルフォードが手を引かれ、老人との距離が離れていく。

「そうさねえ。秘密の通路をお行き。但し一人ずつ。一人ずつ。あ
るいは共に闇の中」

引つ張られながらも後ろを振り返ると、老人は別れの挨拶をするよ
うに蠟燭を揺らした。一際火の明るさと勢いが増したかと思うと何
処にも老人の姿は無かった。

「さっきの人、ジンの知り合い？」

「墓守と呼んでいるけど、本当は何者なのか知らない」

目を凝らしてみても、老人の姿も蠟燭の明かりも無い。

「216番目っていうのは？」

「さあ。墓守はいつもそう呼ぶ」

走りながら辺りを見回すと夥しい数の石棺が見える。石棺の蓋には
剣と盾のレリーフが施されており、一つずつに番号が刻まれていた。
もしかして、この番号なのではという怖ろしい考えを追い払うよう
に頭をふるう。けれど、そうだというようにヒョヒョと笑い声が聞
こえてきたような気がした。頭を振りながら歩いていたのがいけな
いのか、いつの間にか歩みを止めていたジルフォードの背中に鼻を
打ちつけて止まることになった。

「どうしたんだ？」

背後から覗き込むと、紅玉を加えたカラスの像がある。白い指先が
紅玉をつかむ。嘴から紅玉が外れるとカラスの像の台座が音もなく

開いた。人一人が這って通れるほどの小さな入り口だ。

「道なりに進めば、書庫の中に出るから」

背を押され、入り口の前でジルフォードを見上げるセイラにそう告げる。老人の言った秘密の通路というのはこれのことなのだろう。けれど老人は一人ずつと言わなかったか。

「ジンは？」

その問いかけにジルフォードは微かに笑みを浮かべた。哀しみと諦めを含んだ表情は泣きたくなるほど優しく、決して放さないようにと袖をぎゅっと握り締めた。

「一緒じゃないとダメだからね」

拍手の音が響いた。

「麗しい夫婦愛ですね。ああ、まだ夫婦ではありませんか」

現れたノウチエスを睨みつける。

「魔物の妻になることを防いであげるのですよ。感謝してもらってもいいくらいです」

「魔物なんかじゃない。私はこんなにも優しい人を知らないもの」

「まだそんな戯言をおっしゃるのですね。あれほど警告を与えてあげたというのに」

警告という言葉に今まで起きたことが脳裏をよぎる。

「訓練場でのことは、君のせいなの？」

「警告ですよ。アリオスは貴女にとって幸せな場所ではないとね。またアリオスにとって貴女存在は好ましくない。そのことに気づいて、早く故郷へお帰りになれば良かったですよ。セイラ様」

「幸せかどうかは私が決めることだ」

それだけ言うとセイラは奥歯をかみ締めた。アリオスにとって好ましくないと言われれば、違うとは声高に叫ぶことはできない。自分の存在はテラーナも危険にさらし、サンディアにいらぬ疑いをかけさせた。そしてジルフォードも。

「私がアリオスにとってどんな存在かなんて分らない。けど、私はここに居たい！」

「仕方ありませんね」

ノウチェスの右手が上がると、いつせいに影が剣を振り上げた。

「合格だ。嬢ちゃん」

次の瞬間、空気が裂ける音がした。

第47話：はじまりの場所3

吹き飛んだ影たちは柱や壁に体を打ちつけてくぐもった悲鳴を上げる。開けた視界に漆黒が降り立った。カラスが羽広げるようにを禍々しく美しく。不適に輝くのは、眼帯にはめ込まれた色とりどりの玉だ。戦場で見れば、誰もが怖気づくというジョゼ・アイベリーの姿。けれど、影たちが息を呑んだのは、ぬらりと光沢を持つ剣だ。まるで喜んでいるかのように光が刀身の上で弾け、それ自身に意思があるかのように次の相手を見定める。

「『月影』」

誰かが聞き取れぬほど掠れた声で呟いた。そうだと返事をするように刀身がキーンと澄んだ音を立てる。それとも、最初の主への挨拶だったのかもしれない。我知らず、視線が部屋の中央へと向う。はじめの数字を刻んだ、一際大きな棺。国始めの英雄。伝説の初代王。空の棺だと噂されたこともある。マルスは唯の伝説なのだと。けれど同じように伝説を生きた魔剣は存在し、歓喜の声を上げている。

「初代王は実在したか」

ジョゼにとって、伝説が本当だろうとどうでもいいことだ。月影は己の愛剣であることは間違いないし、月影の今の主はジョゼなのだから。例え、近くにマルスが眠っていようとも月影は裏切らない。それを知っているから十分だ。

「ジョゼ」

「よう、嬢ちゃん。助けに来たぜ」

ジヨゼ・アイベリーは口の端をにと上げるだけで、味方には安堵を敵には恐怖を与える男なのだ。だからこそ、サボリ癖がひどくとも信頼が厚く、將軍の地位にいる。

今も、彼の命令一つで直ぐに動けるように数人の部下が控えている。

「よく分ったね」

「俺たちだつて無能じゃないさ」

不敵な笑みは、どんな不安も押し流してしまいそうだ。

「まあ、礼ならケイトとカイザーに言うんだな」

訓練場のことがあつてから、セイラやジルフォードに反感を持つものには全て監視をつけた。それが嫌な事に少数ではないのだ。反感とまではいかないまでも、長年のわだかまりに偏見を持っているものは多い。他の業務もある手前、監視ばかりに人員をさくことはできない。これほど早く対応できたのはセイラの伝言がすばやく伝わったからだ。ついでに言うと、ケイトがセイラをひつ掴まえて監禁しなかったことが大きい。大声でジルフォードの名を呼びながら歩き回るセイラの姿は、ここに続く道しるべとなっていたのだ。

「カイザーって？」

「……お前、名乗らなかったのか」

ジヨゼが背後を窺うと、見たことのある顔が現れた。

「ええ、尋ねられませんでしたので」

「相変わらずだな」

一重まぶたのどこか冷たい印象をもたらす青年はケイトと共にいた青年だ。兵士にしては線が細いように思われるが、ジヨゼは信頼を寄せていると口ぶりでわかる。

「ありがとう。カイザー」

「先にこちらを片付けてしましましょう」

頭を下げるセイラを一瞥するとカイザーは視線を横へと流す。静かな瞳が呆然と立ち尽くすノウチエスを射抜くと、やっと正気に戻ったのか身構えたが、小刻みに揺れる刀身には迫力はない。

「王族暗殺の罪どころか、聖地を汚す罪まで犯すとは救いようがない」

「うつうつるさい。うるさい！！こいつが悪いんだ！！」

振り上げられた切っ先はシルフォードに届くことなく、床に叩きつけられた。

カイザーの手刀一つでノウチエスの腕は痺れ、剣を取り落としたのだ。途端に兵士たちが取り囲み、締め上げる。転がっていった剣は計算したかのように、ある人物の足元で止まった。

「全員集合だな」

優しい口調ながら、銀の髪の下で煌めく緑の瞳は厳しさを湛えていた。

「ルーファ王……」

ルーファの後ろにはハナとケイトの姿も見える。セイラの無事な姿を見て、ほうとハナが長い息を吐いたのが伝わってきた。

「ノウチェス殿。今回の件、ジルフォードのことで誤解があったのなら、それに対処できなかった私にも責がある。しかし、エスタニアとの外交問題にもなりうることだ。しかるべき罰を与えることになる」

王と將軍の登場で大人しくなったと思ったノウチェスが、いきなり力を取り戻したかのように血走った瞳でジルフォードを睨み上げると、叫んだ。

「お前が悪いんだ！ お前なんかが生まれてくるのが悪いのだ！ 先王もどうかしておられたのだ。こんな恐ろしいものなど、あの時殺しておけば良かったものを！ ルーファ王も騙されておられるのだ。何故、この魔物を牢獄に閉じ込めないのです！ どうして我が物顔で城を彷徨っているのだ」

毒の言葉は壁に反響して、更に聞き苦しく迫ってくるようだった。その罵倒をジルフォードは静かに受け止めていた。本人よりも、周りの人間の方が眉を怒らせ、奥歯を噛み締める。反論しようと口を開きかけると矛先はセイラへと代わった。

「セイラ様！ 貴女もだ。この魔物に魅入られているのだ！ こんな醜悪なものひ魅入られるなんて、愚かな王女だ。やはり下賤な血など入っているからな！ それで下賤同士で群れるのだ」

ノウチエスはハナとセイラを交互にを睨み付けた。

「孤児が王女の真似事を、王女は下働きの真似事か！それに……」

ノウチエスが言葉を続けることが出来なくなったのは、締め上げる力が強まったねか、今まさに侮辱した王女が微笑んだからか。

「私はジンほど美しくて、哀しくなるほど優しい人を知らない」

美しい人はたくさんいる。その生きざまに惹かれることは多いけれど、同時に胸を締め付けられるような痛みをもたらす美しさを持ち合わせたものとなるとそうはいない。

「それに、ハナほど善き友人はいないよ」

「はっ！　どこが美しい？　何が善き友だ。愚かな卑しい小娘め。お前がこの国を腐らすんだ」

もう、何を言ってもダメだと思ったのだろう。ジョゼの目配せで、兵士たちが力ずくで連れて行こうとしたところに、セイラはもう一度声をかけた。

「私は母の血を誰よりも尊んでいるから、君の言葉では傷つかないよ」

聞こえてはいないのだろう。ぶつぶつと不明瞭な呟きをもらしながら、引きずられるようにして連れて行かれた。

「あの方”はこれから幸せになれるよ”」

小さくなつていく背に叫ぶと、一瞬だけ眩きが途切れたような気がしたけれど、気のせいだったのかもしれない。彼の言ったあの方が、セイラにはサンディアのことに思えて仕方が無かった。

「セイラ様！」

駆けてくるハナの無事な姿を見て、笑みがこぼれる。良かったと泣きつかれると、終わったんだな緊張が解れていく。力まで抜けて、視界がぐらりと傾いだ。

「セイラ様？」

「セイラ殿？」

自分の名を呼ぶ声がどこか遠くに聞こえて、おかしいなと思ったときには視界は真っ暗になった。ここに入るときに嗅いだ甘い匂いが蘇り、全身を包んだときには意識がぶつりと途絶えた。

「セイ」

ジルフォードの腕の中に崩れ落ちたセイラはぴくりとも動かない。何度呼びかけても、変化は無かった。顔色だけを見れば、自体の恐ろしさに気づいて震え始めたハナの方がよっぽど悪い。

「セイラ様！ どうしたんですの！？」

頬に手を伸ばしても目覚めてはくれない。体温も意識を失いほど高

くは無い。むしろ、唯眠っているだけのようにも見えるが、こんなにも唐突に眠るなどありえるだろうか。

「医務室に連れて行きましょう」

ケイトがセイラに縋り付くハナの肩を叩くと、ジルフォードがセイラを抱き上げた。あまりにも自然な動作にジョゼが意地悪げに笑みを浮かべたが、自体を察して何も言わなかった。

第48話：目覚め

リズミカルに刻まれる高い足音に廊下を行き交う人々は、その主を探し、見つけるとはつと息を呑んだ。高く結い上げた皇かな髪に透けるような白い肌。見事な体のラインをより美しく見せるドレスを完璧に着こなして、ユリザはタナトスの城の中を歩いていた。セイラが倒れたという知らせは、タナトスに入ると同時に伝わった。あの頑丈な娘が倒れたという知らせに半信半疑だったのだが、ただ倒れたわけではないらしい。

「こちらでございます」

寝室の扉を開くと、予想通りの姿があった。今にも死んでしまいそうなほど青ざめた顔のハナがベッドに張り付いているのだ。のろのろとユリザに向けた瞳の下には隈がくつきりと浮かんでいる。

「……ユリザ様？」

近づいてセイラの顔を覗き込めば、こちらのほうがよほど健康的に見える。

「貴女、ひどい顔よ。休んでいるの？」

ハナは弱弱しく首を振る。この三日間、ほとんどの時間を今のよう
にセイラの傍で過ごしているのだ。侍女仲間が何度か休むようにと
すすめてくれたのだが、眠ればいくらしないうちに自分の悲鳴で
目が覚めるのだ。

「ただ眠っているだけなのでしょう。そんなに心配せずともよいで

しょう」

話を聞くとただ、眠っているだけらしいのだ。医者たちも首をひねるばかりだ。

「ですが……」

「セイラとてエスタニアの娘、そう簡単に死んだりしませんわ。貴女が一番知っているでしょうに。貴女もエスタニアの、それもハナメリーの娘ならば毅然としていなさい」

セイラが挿絵に似ているかという理由だけハナメリーから付けた名が、エスタニアでは重要な意味を持つと知ったのは、ユリザがジニスに來たときのことだ。セイラがハナの由来を嬉々として語るとユリザは貴女も私の妹になるわけねと見惚れるような笑みを浮かべたのだ。

エスタニアの四季の女神の名を冠せるのは、聖母と呼ばれていた第二側室の娘だけなのだ。冬の女神のユノー、夏の女神のトゥーラ、秋の女神のフープはそれぞれ、聖母の産んだ第一王女、第二王女、第六王女の守護神となっている。もう一人の王女を産むことなく聖母が亡くなったので、ハナメリーを守護神に持つものはずっと現れていなかったのだ。

最初は、からかっているのだと思っていた。けれど、ユリザはセイラにすると同じようにハナに接し、色々なことを教えてくれた。

「まずは休むことよ。そんな顔で人前に出るものではないわ。セイラが目覚めた時、その顔を見てなんていうかしらね」

「……はい」

頷いてみたものの、素直に眠れそうにはなかった。そばに入れないのならば、無性に働いていたかった。

「どうしても休む気が無いのならば、セイラを着飾る準備をなさい」

「え？」

「まさか、寝起きの格好で私に挨拶させるつもりなの」

「はい！」

駆けて行くハナを視界の端にとらえながら苦笑をもらす。自分が孤児だったことを、随分と気にしていた頃とは比べ物にならないほど良い娘になったと思う。立ち振る舞いは貴族の娘にも引けを取らないだろう。けれど、セイラに関しては必要以上に心配性になるのは変わりないらしい。視線をセイラに戻すと、さらに苦い笑いが漏れる。

「貴女つて娘は眠っていても問題を起こすのね」

毒の心配は無い。エスタニアの王族は、長い歴史の中で非常に毒に強い体質を手に入れたのだ。多少の毒なら体調を崩すこともなく、毒見役も必要としない。その上、セイラの母は特殊な立場の人だった。彼女の娘ならば、他の王女よりも耐久性は強いはずだ。

毒で無いならば、眠り続けるというこの状態は何なのか。一つだけ心当たりがあるのだが、あまり乗り気はしない。

「こんなことで、あの国に貸しをつくるのは嫌だわ。さっさと起きなさい」

ぴしゃりと言い放つと、ユリザは扉へと視線を向けた。

「お入りになられたら？」

扉がゆっくりと開いた。誰かと問うまでも無く相手は分っていた。未婚の娘の部屋に入ってこれる男性は、父親が将来を約束した相手ぐらいのものだ。もしどちらでもないならば、たたき出してやらねばならない。

「お会いできて光栄ですわ。ジルフォード殿下。ユリザ・リユーデリスクゥトウーラ・エスタニアと申します」

ユリザの挨拶にジルフォードは深く頭を下げた。

「我が名はジルフォード・アリオス。アリオスの地に連なるもの。大陸の知恵たる姫。炎に愛されし女神。司るは生命の息吹き。厳しき瞳で世界を見つめ、断罪の刃を振るうもの。貴女に会えたことを光栄に思います」

ユリザはジルフォードがエスタニア流の挨拶を知っていることに瞠目した。大貴族でも口上を考えるのに四苦八苦する、もつとも古い挨拶の形だ。己が何者か宣言し、相手を称え、会えた事を感謝する。ユリザも長年外交にたずさわっているものだ。すぐさま、いずまいを正すと挨拶を返す。

最上の礼をとられたら、最上の礼を返すのが礼儀なのだ。気に入らないならば、それなりに。

「我が名はユリザ・リユーデリスクゥトウーラ・エスタニア」

先ほど名乗ったが、この礼では最初になることが必要なのだ。

「エスタニアの二番目の娘。炎の女神を守護に持つ者。」

次は相手を讃える言葉を述べる。

「瞳に千の色を閉じ込めし者。夜に愛され、月の口づけを受けた賢者。無限を与えられ、陽さえ慄く光を秘める者」

ユリザはそこで一度言葉を区切り、強くジルフォードを見つめた。黒曜石で作ったナイフの鋭さが、目を反らすことを許さない。

「闇が光を蝕むならば、私の炎で滅しましょう」

最高の祝辞と警告を。読み取れるかどうかはジルフォード次第だ。もし正確に理解し、実行するならば、各国が喉から手が出るほど欲しい人脈と手腕を惜しげもなく与えてやろう。深く頭を垂れる青年に、遠い昔の賭けの結果の一端を担わすのも面白い。一か八かの賭けなどしないユリザには結果は見えているけれど。せっかくの機会だ。負ける相手の顔を拝みにいこう。

「一つ、聞いてよろしくて？」

これはエスタニアの王女としてではなく、セイラの姉としての好奇心。

「セイラは貴方に何をもちがしました？」

「……怖さを」

意外な言葉が返ってきた。あの無鉄砲なだけの小娘が恐怖をもちた

すなど信じられない。

まあ無知は怖ろしいわねと、安らかに眠るセイラに視線を送る。

「もうセイが居なかった生活を思い出せないかもしれません」

セイラが、アリオスに来てからたった数ヶ月。その間に知らない感情が増えていった。いつの間にか、居ることが当たり前になって姿が見えないと探してしまう。

心地よさに自分の立場を忘れてしまいそうだ。

「そう」

「今回のことは」

「謝罪は不要です。今回のことはセイラが馬鹿だからです。もう少し、うまく立ち回ればよいのに、後先を考えずに突っ走ったのでしよう」

きつと他の妹たちならば、秘密裏にうまくおさめたに違いない。ユリザが着くなり、国王や王妃が頭を下げる事態にはならなかったはずだ。良くも悪くも賢い娘たちだから。けれど、心底心配され、愛されるのはきつとセイラだからだろう。毒舌を吐きながらも、これで良いのだと思う。

「セイラが目覚めたら渡してちょうだい」

ユリザが目配せすると、今まで身動き一つしなかった彼女着きの侍女が小さな箱を三つ持ってきた。一つずつは片手に収まるほど小さい。

「右からセイラ、ジルフォード殿下。ハナだそうです。今日のところはこれで失礼いたします」

それだけ言うと、ユリザは流れるような動作で部屋を後にする。

「半端者のセイラにはお似合いかしらね」

閉めた扉の向こうで、ゆるりと微笑み、もう一度ジルフォードに告げた言葉を繰り返した。

「闇が光を蝕むならば、私の炎で滅しましょう」

「お前の闇がセイラを苦しめるのならば、私はお前を罰するだろう」

「もし貴方の光を翳らすものがいたら、取り払いましょう」

セイラは、あの場所の階段を一人で下りていた。何度、上り下りしたかは覚えていない。数える気が失せるほど下り、気の遠くなるほど上った気がする。その度に思うのだ。どうして、こんなに中途半端な段数なのだろうか。

「最初の一段はマルスのために。次の一段はエイナのために。一人のために一段を捧げよう。最期の一段は終焉を綴る王のために」

歌が聞こえてくる。墓守の声だと思っけれど、姿は見えないため明確には分らない。

「棺の数だけ段数を」

いつの間にか、棺の部屋にの中央に立っていた。

「216番目。覗いてみたいかい？」

目の前には、216と刻まれた棺が、ひっそりと置かれている。もし、頭をふとよぎった考えが本当ならば、この棺はジルフォードのものなのだろうか。

「それとも、どこまでうまっているか知りたいかい？」

どこまで？

何番目の棺まで使われているということだろうか。

「それとも、自分の棺を？」

私の？

この棺の中に、いつか自分が入るものがあるということだろうか。

「好きなものを覗くといい」

全ての棺の蓋がゆっくりと開き始めた。もう少しで、中が覗けそうなところで、閃光が走った。まぶしさに目を閉じる。同時に声の主が悲鳴を上げた。

「被いの石か」

忌々しげにつぶやいた後、声はふつりと途絶え、棺の蓋も隙間無く閉まったままだ。呼びかけても返事は返ってこない。代わりに世界を揺らしたのは、一番恐れている人の声だった。

「ねえ様！」

セイラは自分の叫び声で飛び起きた。夢の中にまで出てきて、説教をするとはユリザは怖ろしい。もう少しで、何かが分りそうな予感がしたのに、覚えているのはユリザの声ばかりだ。

「……ジン？」

何かをつかむ様に伸ばした手の先で、白い髪がふわりと舞った。ジルフォードの驚いて目を見開いた感が可愛らしい。珍しい姿に頬が緩みそうなのに、自分の置かれている状況が良く分らない。自分の部屋であることは家具から見て間違いなさそうだが、何故ジルフォードがいるのだろうか。記憶を辿るとユリザのお説教。それを振り払って、もっと先を思い出そうとすると甘い香りを嗅いだ気がした。

「寝てた？」

「眠っていた」

「ずっと？」

「三日間」

セイラは心の中で呻いた。それだけ眠っていたら、沢山の人に心配をかけただろう。心配性のハナなど眠っていないかもしれない。

「どうしたのかな？ そんなに寝たこと無いよ……」

原因は分らないけれど、目も覚めたことだしまあいいかと楽天的に考えておるセイラの頭の上を白い手のひらが撫でていく。その優しい手つきに、また眠ってしまいそうだ。

「心配かけてごめんね。おはよう。ジン」

「おはよう」

第49話：贈り物

白、黒、黄の小箱を前に、それぞれ違った表情を見せる三人に、久しぶりに日常を取り戻した気がしてカナンほっと息をつき、ハマナを使って集めた材料を贅沢に使ってセイラの快気祝いのお茶をカップに注ぐ。

ハナの目が真っ赤になっていることさえ、今は嬉しさの印なのだ。ジルフォードから小箱を受け取っているときに、ドレスを抱えたハナが部屋に戻ってきた。一瞬、幻でも見たかのような顔をしたハナだったが、セイラが声をかけると今まで張り詰めていたものが、一気に緩んだのかぼろぼろと大粒の涙が零れ落ちた。

「お元気そうで、本当によかった」

「心配かけてごめんね。なんか寝てたみたい」

「本当に心配したんですからね！どこも痛いところや変なところはないんですか？」

何度も確認したことをハナはもう一度尋ねた。あれほど元気そうに見えたのに倒れたのだ。いくら確かめても気が気ではない。

「特にないよ」

体に変化は見られない。むしろ、気持ちよく起きた朝のように頭の中はすっきりとしている。

「それより、これ開けてみよう」

三つの小箱。どことなく不恰好な包み方に送り主が想像できる。ジルフォードは三つともセイラに渡したのだが、白い箱を自分の前に、黒い箱をジルフォードの前に、黄の箱をハナの前に自然においた。白はリーズ、黒はジン、黄はハナメリーの色だ。それにかけて、ジニスではセイラには白、ハナには黄と決まりがあつたのだ。ジンの黒といえば、ここではジルフォードしか居ない。そして、包み紙の角がきつちり折れていないせつかちな包み方はダンの手によるものだろう。

「わぁ！」

好奇心はすぐに感嘆にかわつた。中に入っていたのは月の雫で作られた一對のピアスだ。三日月型のそれは本当に月の一片が雫となつて落ちてきたかのように光り輝き、角度を変えるたびに表情を変える。それは違和感無く己の耳におさまり、長年愛用してきたものようだ。

「さすがですわね」

愛娘のように可愛がつっていたセイラのことだ。ダンが一番似合うものを知っているのだ。

「ハナも開けてみなよ」

セイラの言葉に押され、ハナは恐る恐るリボンに手をかけた。箱を開けた瞬間に嬉しさよりも焦りがうまれた。

「こんな高価なものいただけませんわ」

淡い黄色の貴石でつくつたペンダント。透明感の高い石はとても高

価であることを、あまり詳しくないハナでも知っている。一介の侍女が手に出来るものではないからと箱から取り出すことも出来ないハナのことを見越してか、箱の中には手紙が添えられていた。

『ハナ、お前さんはわしらの娘だ。遠慮なんて寂しいことを言っておくれでないよ。その石はハナメリーの守護石だよ。その石がお前さんに幸をもたらすように』

「みーんなお見通しだね。ジンののは？」

困惑がジルフォードの方が強かったのだろ。見知らぬ人から好意だけを つめた贈り物。リボンに手をかけるまで、しばらく時間がかかった。

贈り物は紅玉のピアスだ。美しい球体は真紅に輝いた。その輝きは最高級のもだったが、驚くのはそれだけではなかった。

「ダンの細工だね。ジン、手にとってみてよ」

ジルフォードにつまみ上げられた紅玉は、その表面に暖炉の炎を這わせ不思議な色合いを作り出していた。その色に魅了され球体を動かすと、ある角度で手が止まった。反射した光が机の上に文様を描き出しているのだ。月の満ち欠けをあらわす文様の仕組み力ナンでさえ、ほうと息を吐いた。この細工はダンの得意技だ。幼子をあやすことも、奥さんの機嫌をとることもままならない男が、街一番の細工師であり、その細工が多くの婦女子をときめかすことは笑い話にもなっている。一度、ダンに出した手紙にジルフォードのことを書いたのだ。紅玉が紫水晶が似合うと書いたのを覚えていたのだろう。ねだってつけた貰えば、やはりよく似合っていると思う。

「月の満ち欠けはね、ジンを表す時に使うんだよ。彼には形が無い

からね」

ピアスは取り出したはずなのに、セイラの箱からは音がした。不審に思つて内側に貼られた布を剥がすと、これでもかと小さく折りたたまれた紙が一つ、転げ落ちてきた。淡い水色から濃紺まで、あらゆる青で染め上げられた紙は、まるで海の一部を切り取つてきたかのような。気づかなければ、それでもいいといったように、ひっそりと隠された手紙の内容は簡素だった。『君の航路を導きの星が照らすように』宛名も宛先も無い手紙。けれど、セイラには相手が良く分つた。三番目の姉のファナだ。ファナ・リューデリスクン・シオン・エスタニア。星の女神は航海の道しるべ。青は彼女の最も好む色だ。どうして、こんなところにと思わなくてもないのだが、彼女の手紙ときたら、届けられたクツキーの中に入っていたり、花を束ねていたリボンに精緻な文字がびっしりと書いてあったりして、毎回楽しませてくれるのだ。

彼女なりのおめでとうに心が温くなる。姉の中で一番、気の会う彼女ならばジルフォードのことも好きになつてくれるのではないだろうか。一番気が合うといつても、七人中三人としか面識が無いけれど。

姉といえば……。

「ユリザ姉様に挨拶しにいかなきゃ……」

嫌味の数が増える前に、自分から出向いていこう。贈り物を届けてくれたお礼も言わなければならぬし、聞きたいことも一つある。残つたお茶をぐいと飲み干して、席を立つと追うように立ち上げるハナを押しとどめる。顔色が幾分良くなっているけれど、目の下の隈はくつきりしたままだ。

「カナン。ハナを休ませてあげて」

「分りました」

カナンの手にはすでに毛布が用意されている。

「セイラ様！ まって……」

「大丈夫。目が覚める頃には帰っているから。ゆっくり休んで」

目蓋の上を覆うと、柔らかな闇がハナを包んでいくのが分る。疲労は限界にまで達していていた上に一気に緊張が解けたのだ。体は休息を欲している。駄目押しに、睡眠効果を高めるお茶を一杯。

「おやすみ」

むずがる幼子をあやす様に頭を一撫ですると、すうとハナの体から力が抜けていく。

「ハナのことよろしくね」

毛布をかけるカナンに一言言つと、セイラはユリザの部屋に足を向けた。

第50話：寿ぎ

「こんにちは。姉様」

恐る恐る扉から半身を出すセイラを射すくめて、ユリザはさっさとお入りなさいと目で合図をする。彼女は明らかにアリオスに来た客に違いないのに、長年この部屋の主であつたかのように、どうとうとソファで足を組み、また家具たちもそれが自然であるかのように、馴染んでいた。

「やっと、目が覚めたのね」

「……はい」

結い上げていない髪に、動きやすさを重視した質素な服装。ハナにせつつかれて挨拶に来たわけではなさそうだ。自主的にセイラが尋ねてくるなど、なにか用事があるに違いない。

「言いたいことがあるのなら、言いなさい」

きよろきよろと落ちつきなく、辺りを見渡すセイラは、その言葉に意を決したように、ユリザの正面に立つ。前置きなど、ユリザの機嫌を損ねるだけなので、最初から本題へ。

「姉様はどうして私を選んだの？ ファナ姉さまでもよかったんじゃないの？」

セイラとファナは母親こそ違うものの、境遇は良く似ているのだ。彼女の母親は風の舞姫。旅の踊り子として絶大な人気を誇っていた

けれど、貴族社会であるエスタニアでは身分は高くない。リユーデリスクの三番目の妻となった彼女はファナを産みはしたけれど、一つの場所にとどまることを嫌い、ファナを置いていくという条件を飲み、王宮を出て行った。シオンの名をつけたのは彼女だ。旅の安寧を娘に託し、いつか娘が自由に旅することを願って。

二人とも母親の身分は低く、どんな相手に嫁がせても文句を言う後ろ盾もない。条件が同じならば、年齢の近いファナの方が適任ではなかったのだろうかと手紙を受け取って思ったのだ。

「選んだのは父上よ」

「そうかもしれないけど、仕向けたのは姉様でしょ？」

確信の光を宿した瞳に見つめられてユリザは仕方ないとばかりに頷いた。確かにセイラを選ぶように仕向けたのはユリザだ。もっと言えば、婚姻による和睦を受け入れるように促したのも彼女だ。

「ファナをここにやるぐらいなら、イベラかりベラを無理やりにも引き離して嫁がせたわ」

セイラはあったことがないが、王妃の生んだ第4、第五王女だ。双子で傍から見ても区別できないほど似ていると聞いたことがある。常に共に行動する彼女らを引き離すのは難しいのか、ユリザは珍しくも、あまりやりたくはないと人前で顔に出していた。

「イベラ姉様……」

会ったこともない人物を姉と呼ぶのは変な気分だ。セイラが会ったことのある姉様たちは第1王女のルリザ、第二王女のユリザ、第三王女のファナだけだ。第6王女のアリザとは一度だけ手紙のやり取

りをしたことがあるが、イベラ、リベラそして第7王女のサナメとは全くつながりがない。エスタニアには王子も3人いるのだが、こちらともつながりはない。

「あの娘には風の民の血が混じっているの。どこかにつなぐことなんて出来ないわ」

風に導かれて旅をしながら生きる民。その血を受け継ぐ娘に王家の血は重荷以外の何者でもない。その上、他国の血で縛り上げるわけにはいかないのだ。

「あの娘はいつか去っていくわ。慰めを与えても支えにはなれない」
「……そうかな」

「貴女の能天気さならば、何処へ行っても大丈夫だろうと判断したからよ」

「能天気……褒められてるのかな？」

「褒めているのではないわ。これから言うことをよく聞きなさい」

これから告げるのは姉から妹への叱咤の言葉。愛しい娘への寿ぎの言葉。

「貴女は良くも悪くも優しい娘でしょう。それは、時には幸をもたらし、時には嫉妬を呼ぶことになる。貴女の優しさは最も強い武器でありながら、もっとも弱い盾であることを忘れぬように。いつか、選択を迫られたとき、その優しさに苦悩するときに必ず来ます。いつも、いつも両方を選ぶことが出来ないことを知ることになるでし

よう。貴女の周りに居てくれる人を決して離さぬようになさい。愛しいなら、大切ならそう告げなさい。」

「はい」

後悔を繰り返してはいけないと告げられているのが良く分った。

「ユリザ姉様のことが好きだよ。ちょっと……だいぶ礼儀作法とか煩いけど」

「貴女がしっかりしていれば、煩く言わなくてもすむ話です」

「……」

母が亡くなったとき、駆けつけてくれたのはユリザだった。王都からはそれ以外に弔問はなく、国王は手紙一つよこさなかった。土をかけられていく棺の前で涙を流すことも出来なかった。街の人たちが泣かぬように全身に力を入れて、齒を食いしばっているのが分ったから、縋り付くハナに寄り添ってずっと俯いていたのだ。母に朝の挨拶が出来なかった。目覚めて一番のおはようは大好きの代わり、それをセイラが言えぬまま母は逝ってしまったのだ。母は最期においてはよく言ってくれたのに。

葬儀の時にも文句の付け所なかったユリザが、セイラの前に立つと細腕を鳴らし、声を荒げた。

「泣きなさい！ 貴女が泣かなければ、この街の人間は泣けないのよ。泣きたくないのなら、誇りなさい！ これほど多くの人に見送られる人を母に持てることを」

空が割れたのかと思った。ぼたぼたと手の上にも足の上にも雫が落ちてきた、ハナも母も街も水没してしまったのだから。呼吸が出来ず、おぼれてしまったのだと思った。酸素が体に廻らなくて、頭の芯がしびれていく。指先の脈動が煩くて、悲鳴を上げたいのに声が出ない。大きく開けた口に塩水が入り込み、しょっぱさに目がくらむ。

その時のことを思い出すと、また口の中がしょっぱくなりそうだった。ユリザの言葉がなかったら、未だに悲しみにばかりとらわれていただろう。ユリザが厳しく礼儀作法を教え込んだのも、母親が身分の低いからと蔑まれないためだとセイラのにも分っている。

「ありがとう」

「感謝は態度で表して欲しいものね。問題を起こさないとか、ふさわしい格好をするとか」

「……」

「それと、貴女まだ自分の状況を把握していないようだから教えてあげましょう。式は一週間後に控えていますのよ」

「式って？」

何のことかさっぱり分らないといった表情に盛大にため息をつく。

「貴女とジルフォード殿の結婚式です。今更、ファナのほうが適任

だっ たなんて馬鹿げたことを言っている暇などありませんよ。さっ
さと式の準備をなさい。」

「はいっ！」

慌てて去っていく小さな背中に笑みを一つ。

「貴女だから嫁がせたのよ。いつか解るわ」

第51話：墓守

セイラの少し後に、書庫を出たジルフォードは暗い階段を下りていた。何度も訪れたことのあるこの場所は光がなくても自由に歩き回ることが出来る。最後の一段を下りて広場に入ると、ぞろりと暗闇が蠢いた。

「墓守。セイに何をしたんだ」

意識を失う前に甘い香りがしたのだというセイラの言葉が気になっていたのだ。ジルフォードはここに入るとき、甘い香りなど一度もかいたことがない。セイラのすぐ傍にいたジルフォードに気づかれずに、彼女だけに甘い香りを嗅がすなど、あそこにいた人間にはできそうにない。もしも、そこに人ならざるものがいたとしたら。闇の中からばうと老人が現れた。

「そんなに怖い顔をするんじゃないよ。216番目の王子様よ。するものにも、これからって時に邪魔が入ったんだからさ」

腰をしきりに擦りながら墓守は言った。

「だから、お止めって！ お前さんだってあの娘つ子を嫁に欲しいんだろう。アリオスの王家に入るなら、知らなきゃならないことは山とあるんだよ。手っ取り早く夢の中で教えてやろうってのに、本当にひどい目にあつたよ」

「知る必要のあることって？」

「そりゃあ、色々だよ。表の歴史は上の連中が教えてくれるだろう

さ。裏の歴史はワシらの仕事さ」

僅かばかり曇ったジルフォードの顔を見て、墓守は口元を歪めた。

「アリオスの闇はお前さんばかりじゃないんだよ。アリオスの墓の中は真つ黒さ。確かに、お前さんは毛色が変わってるよ。けど、それだけさ。99番目の王様のように残虐非道ではないし」

老人の背が急に伸び、質量が増えたかと思うと剣を持った男の姿に変わった。落ち窪んだ瞳には、暗い思考が渦巻いて、血塗られた剣は地が見えぬほどだ。

「134番目の王子のように放蕩して国を食いつぶすこともない」

もう一度質量がかわった。現れたのは線の細い男だった。至る所に装飾品を身につけて、全身から酒のにおいがする。

「ちつとばかり、見た目が華やかで特別な名を貰っただけさ」

気がつくのと、もとの老人の姿に戻っている。

「お前さん、どれだけこの大陸の話を知っている？ 魔女の治めるジキルド、神話の国エスタニア、見放された地のタハル、そしてわが国。島国まで合わせればもっとあるさ。いいかい？ これがワシの仕事なんだ。入ってくるものに教えることが。この国、この大陸の過去を今を、時には未来を」

「兄上も知っているの？」

「ああ？ 男はダメさ。知れば妄想をかきたて、ありもしない未来

を勝手に作り上げるのさ。破壊はしても創造できない。女はいい。よく考え、必要なことだけ寝物語として子に伝えるんだ。時には例外もいるがね」

最大の例外は目の前の青年の母なのだ。

「お前さんの母親は全くの予想外さ。まさか、一度もここに下りてこないとはね」

下りてきたならば教えることも出来たのに。お前が授かるのは特別な子だと。形なき魔物の本当の意味を。

不思議な力を持つとも、この空間でしか発揮されない。これほどまでに無力感を感じたのは墓守になってから初めてだ。

「今の王妃様は知っているよ」

「姉上が？」

けれど、三日も寝込んだなどという話は聞いたことがない。

「あの王妃様はいいね。ふわふわと雲の上を歩いているかのような娘なのに、ちゃんと芯がある。要領がいいもんだから、すぐにいるものだけを取っていった。おまけに美人だ。お前さんの想い人は……変な娘だね。一番本質に近い場所にいるのに、自分から遠回りさ。未だに、何であんなに馬鹿みたいに階段を上り下りしていたのか分からないよ。思わず、歌う羽目になったよ」

「お前さん、まだその瞳を捨ててしまいたいかい？まだ、その髪に色を持たせる方法を探しているのかい？」

墓守はジルフォードの姿をとった。ただし、銀の髪と碧玉の瞳のジルフォードの姿だ。かつて一番なりたかった姿。

「それなら、あの娘は帰しておやり、幸せになんかなれやしない」

墓守の口の端が吊り上る。

兄のようにアリオスにいても良いという証拠が欲しかった時期もある。いつの間にか、その想いは諦めに変わり、人の目に触れないように生きることを覚えるようになった。けれど今は……

「もしも違うならば、絶対に離すんじゃないよ。あの娘ほどお前さんに寄り添える者はいないよ」

墓守の姿が、また少し変わった。銀の髪は白く、瞳の色は赤へと。もう少し、年を重ねたらこうなるかもしれないと思わせるほどジルフォードに似ているけれど、違う者。老人の声が潤いを持つ。

「手助けぐらいはしてやろう。だが、幸せになれるかどうかはお前次第」

それだけ言うと、すぐさま元の老人の姿に戻った。最後の一人だけ、全く違う圧力を感じたのは気のせいだろうか。曲がった腰を擦る老人からは、その圧力は微塵も感じられない。

「ああ、そうだ。あの娘を連れてくるときは被いの石を置いてくるように言っておいておくれ」

「被いの石？」

「虹色に光る石のことだよ。アレとは相性が悪いんだ」

今日、セイラに届いた月の雫のことだろうか。様々に色を変える石は虹色といってもいいかもしれない。

「わかった」

その言葉に鷹揚に頷くと、墓守はふつと姿を消した。

第52話：ドレス

「セイラ様！」

ダリアの部屋へと急いでいると、数人の侍女に呼び止められた。ハナと仲のよい娘たちだからよく知っている顔ばかりだ。

「お目覚めになられたのですね」

涙ぐんで喜んでくれると、すっかり睡眠をとっただけの身としては少々気が引けてしまう。ハナの心配をしてくれる彼女たちに休ませていることを告げると、皆一様にほっとした表情を見せたのも束の間、瞳に決意の色をたぎらせると、セイラの周りをぐるりと取り囲む。疑問を発する前に、両腕をからめとられ身動きができない。

「えーっと。ミサ？」

リーダー格の娘に、可愛らしく首を傾げながら訪ねたのだが、より可愛い満面の笑みを返された。見惚れるような笑みには裏があると思うようになってしまったのは姉の影響だろうか。

「これからダリアのところに行くんだけどな……」

「ちょうどようございました。私たちもダリア様の元へ」

「へえ……じゃ私は後で」

そろりと後ろに下がろうとしたものの、両脇を固められている上に、背後にも居るので半歩も行かないうちに引き戻されることになる。

瞳を輝かせ、満面の笑みの彼女たちに関わるのは、あまり好ましくない。

前は髪をお願いだから結わしてくれて言われて、軽い気持ちで了解したら、一日中付き合わされたのだ。途中からテンションのおかしくなった彼女たちに制止の言葉は効かず、頼みの綱だったダリアまでもが、参加するのだから始末に終えない。結局、セイラのお腹が盛大に空腹を訴えたところで中止になったのだが、とつぷりと日がくれた後だった。

行きましたようと引つ張る彼女たちの力は毎日鍛えているだけに強い。その上、やんわりと優しい手つきなので本気で抵抗しようという気を殺いでしまう。仕方なく、のろのろと足を動かしていたのだが、元々ダリアの部屋に向かっていたため、数分で着く距離だった。

ノックをすると、ドアを開けたのはマキナだった。捕獲された珍生物のようなセイラの有り様に気の毒そうな視線を向けたが助けくれそうにはない。

「悪いんだが、あんなに生き生きしているダリア様を止めることはできないよ」

マキナの言葉通りの姿が彼女の背後にあった。様々な色の布地に囲まれる姿は花の中央に座る妖精のようだ。セイラの姿を認めると、瞳の色を明るくし微笑んだ。

「セイラ！無事に目覚めて本当に良かったわ。さっそくで悪いんだけど、貴女の服装だけ決まっていたないのよ。決めましょうね」

もう一度夢の世界に旅立ちたくなった。

「適当に選んでくれたらいいのに……」

その言葉にマキナ意外の女性陣がくわつと目を向いた。

「ダメですよ。一生に一度の大舞台ですから、一番映える衣装じゃないと！」

「特別な仕立て屋も呼んだのよ」

わざわざ作るなんて、とんでもない。部屋を彩るドレスの一着を貸してくれるだけで十分なのに、特別な仕立て屋とやらはどこからともなく現れた。目の覚めるような鮮やかなピンクの髪に、彫りの深い顔は一度見たら忘れそうにない。

「あらゝ貴女がセイラね。可愛らしい」

女性にしては背が高く、短いスカートからのぞく足はひどく筋肉質だ。セイラの頬を撫で擦る手も随分と大きい。ジョゼと同じくらい良い体格をしているだろう。

「はじめまして。えーつと名前教えてくれる？」

「あらんゝ嬉しいわ。こんななりしてると最初に性別を聞く失礼な人たちが多いんだけど。セイラはいい子ね。私はアリーよ。残念なことに体は男だけど、心は乙女！」

厚い唇に塗られた紅がきらりと光る。服装さえ除けば、体躯たくましい男性にしか見えないのに、角度によっては、女性らしく見えるから不思議だ。

「よろしくね。アリー。……できれば動きやすいドレスを……」

アリーの登場で、ドレスを作らないという選択肢はなくなってしまった。

「任せておきなさい！ 可愛いセイラには、とびつきり甘いドレスを作ってあげるわん」

「……甘い？」

それはレースやフリルがふんだんに使われた可愛らしいドレスの例えだろうか。それは遠慮したいと口にしようとするとダリアがにっこりと微笑んだ。

「アリーはね最高のお菓子職人なの」

「最高なんて嬉しいこと言ってくれるわねえ。俄然やる気が出ちゃうじゃない」

アリーが腕まくりすると、筋肉のついた固そうな腕が現れた。

「お菓子？ 仕立て屋さんじゃなかったの？」

それを聞いた女性陣（アリーを含む）は、ふふふと不気味な笑い声を立ててセイラの方へとにじり寄ってきた。正直怖い。

「セイラ様のドレスの飾りつけはお菓子でしようと思ひまして。初の試みですよ」

「きつと素敵です！」

「……お菓子の飾りつけ？」

「そうよん。セイラってジニスの出身でしょう。いくら玉で飾っても、あそこ比べられたらね……それにセイラってドレスを取っておいて思い出しようにってタイプじゃないでしょ。だから一瞬だけでも一生記憶に残る美しいものをつてね。終わったあとは食べても良いわん」

「ん〜ドレスにクッキーとか貼り付けるって事？」

「それも斬新で良いかもね。けど、今回使うのは飴細工」

アリーが取り出した箱の中にはガラスで作ったかのような透き通った花びらの花が一輪入っていた。

「これ、飴なの？」

「舐めてみても良いわよん」

なめてみると口の中に甘さが広がっていく。美味しいと呟くとアリーが嬉しげに鼻をならす。

「どんな形にも出来るから便利なのよん。微妙な色合いも出せるしね。セイラにぴったりの色も探してあげる」

「溶けるっている理由で式が終わったら早々に引っ込むことも出来るわよ」

それは非常にありがたい。

「セイラには白が似合うかしらねえ」

アリーの言葉に侍女たちが、それぞれに違った白の布地を持って前に立つ。我先に差し出すとアリーが受け取り、セイラを手招きした。くるりと片足を軸に一回転。その間に乳白色の布とリボンが掛けられる。プレゼントの品物になった気分だ。試作品の花をつけ、スケッチをして、再び一回転。何十回とそれを繰り返しているとさすがに疲れてきた。アリーと侍女たちが花びらの角度について討論している間に、セイラはぐったりと長椅子に座り込んだ。きっと彼女たちは妥協という言葉知らないに違いない。おやつに砕けてしまった飴細工を食べているとダリアが近づいてきた。

「疲れたかしら」

「とつても」

「素敵なドレスになるわ」

討論は白熱していくばかりだ。いつたい何時になったら終わるのだろうか。このまま彼女たちが気づかぬうちに部屋を抜け出してしまいたい、ダリアとマキナが許してくれないだろう。ダリアは長いため息をつくセイラの横に座り、思い出し笑いを浮かべた。

「今日、ユリザ様に会ったのよ」

「姉様に？」

「個人的にお話してみたかったの」

王妃としてではなく、ダリア個人として話してみたいこととは何だったのだろう。

「実はね」

ダリアにそつと耳打ちされた話にセイラはしばし言葉を失うことになった。

第53話：広間

呆けているセイラを侍女たちに預けてダリアが部屋を出て数時間
広間には式のために集まった各国の貴族が集まり、和やかに談笑と
称した外交活動を行っていた。

その中で、一際目を引くのは、やはりユリザ・リューデリススクート
ウーラ。エスタニアだ。

彼女の知名度もさることながら、冴え冴えとした美貌が見るものに
ため息をこぼさた。

視線、指先の動き一つで惹きつける。彼女は、まさしくその場の支
配者だった。

彼女こそ生まれながらに人を統べることを知っている者だ。

同じように人に囲まれて笑みを浮かべているダリアと見比べると良
く分る。同じように人を惹きつける力を持っているが、質が異なる
のだ。

ダリアは今でこそ、王妃という立場にあり、場を仕切ることもする
が、彼女はなんにでもなれる気がするのだ。夫であるルーファが農
夫であつたなら、彼女も一緒に畑を耕していたに違いない。

一方のユリザには全く想像できないことだった。彼女はきつと、死
ぬその時でさえ王女なのだろう。ユリザに頭を垂れる集団を広間の
隅で眺めながら、ジョゼ・アイベリーは細く息を吐いた。

彼女の向う先を見て、今度は笑いが零れ落ちる。

口を引き結び、直立不動だった男が彼女に声をかけられるとギクシ
ヤクと可笑しな動きをはじめたのだ。

茶の髪を高い位置で一本に結った男は、ジョゼと同じ黒い軍服を着
ている。

腕章も同じ赤だが、ジョゼの腕章には右軍『月影』の証である月と
烏の姿が描かれているのに対し、彼のものには左軍『陽炎』の証で
ある太陽と獅子の姿が描かれている。

彼の名前はラルド・キース。

左軍の将であり、マルスの魔剣と名高く、軍の名前にもなっている『陽炎』の持ち主だ。

「帰ってきた途端に受難だな」

陽炎の部隊は国境警備に向っていたはずだが、国の一大イベントともなれば、主要な人物は都に召集される。

両軍の頭となれば、その上位といっても過言ではない。

若く重要な地位にいる独身となると、各地から集まった貴族たちがほうっておくはずが無い。

うちの娘をぜひ嫁に作戦が始まるのだ。

ジョゼのように適当にあしらっていればいいのに、くそ真面目人間のラルドは、何かにつけてそれに振り回されて、女性恐怖症になったとかならないとか。

ジョゼに言わせれば、軍の男所帯で育ったため免疫がないとのことだ。

ユリザが去っていくと、きりつと元の体勢に戻るのだが、長い付き合いで心底ほつとしているのが手をとるように分る。

こみ上げてくる笑いを我慢するために全身に力を入れなければならぬ。

何しろ、冷静なときのラルドは怖ろしいほど地獄耳なのだ。

けれど、我慢できそうに無い。

溜めた分可笑しさは増えるのだ。

ふっと零れ落ちた息を、どういう聴覚なのか聴きつけると、その主をぎっと睨みつける。

「ラルド將軍ともあろう人が情けないな」

隣の人物にも聞き取れないであろうジョゼのささやき声は、確かに

伝わっているようだ。

ラルドの眉の角度が変わったが、さすが軍で上司にしたい人一位に選ばれるだけあって、冷静だった。

ついでに、ジヨゼは毎年、憧れの軍人一位とサボリ魔一位の栄光に輝いている。

「デコッぱち」

邪魔だと前髪も後ろで結い上げ、額を丸出しのラルドに一番効いていた言葉も効果なし。

暑くなってくるとパツツンに変わるのだが。

ラルドはジヨゼを無視することに決めたらしい。

一度決めたら、横に行つて小突いても相手をしてくれないことを分っているので、ジヨゼも諦めた。

視線を外すと、先ほどまで目で追っていた人物が目の前にいた。

「貴方たちって本当に、あの魔剣のようね。対であるのに正反対の性質」

「これは王女様。今宵も麗しいお姿で」

「先ほどから、あのように見つめられていると穴が開いてしまいそうですわ」

「そんなに柔ではないでしょう？ 王女様」

赤い唇が不適に吊り上り、その上で光が弾け、視線を奪う。

それを見越して、扇で口元を隠し、今度は目元だけで思考能力を奪うのだ。

彼女の前でギクシャクしてしまうのは何もラルドだけではない。

「あら、可愛らしいかたね」

ラルドの方へ駆けて来た小柄な人物を目に留めてユリザが呟いた。ジヨゼやラルドと同じ軍服を着ており、髪は潔いほど短いが女性だ。背はラルドの胸辺りまでしかない。

顔立ちはどこか幼さを残しているが、凜とした強さが感じられ、女性なら嫌がりそうなそばかすも彼女を引き立てているようだった。

「もしかして『飛炎』の継承者かしら」

たった三人にしか許されない赤い腕章を彼女はつけていた。

「よくご存知で」

月影、陽炎の名は諸国でも通っているが、飛炎の名はさほど有名ではない。飛炎は碎けた陽炎の切っ先で作られたのだが、軍の象徴的な剣が折れたなど縁起が悪いとアリオスの人間が口をつぐんだためだ。

「私、歴史上で好きな人物をあげると言われたら、リン・オニキスをあげますわ」

まさかアリオスの人物が彼女の口の端に上るとは思っていなかった。

「意外かしら？」

リン・オニキスは妖艶に笑う彼女とは似ても似つかない。アリオスの一番悲惨な時代を生きた女性だ。男の身にも余る陽炎を振回し、血と断末魔の中で生き、死んでいった人。陽炎の切っ先は彼女の身

を守るために砕けたのだといわれている。研ぎ澄まされた切っ先は、本体と変わらない切れ味を持ち、リン・オニキスは戦場で短い一生を閉じるそのときまで傍らに置いたそうだ。

「ラルド殿は女性が苦手なのかと思っていましたが、そうではないみたいね」

小柄な女性と話すラルドには、先ほどのような可笑しな点はない。

「ユーリは一応女だけど、山猿みたいなもんだしな。たぶん女だと思っていないんじゃないですかね」

今でこそ、女だと判断できるが、調練の帰りなど性別どころか服の色さえ分らなくなるほど泥まみれになって帰ってくるのだ。

「それなら、セイラは大丈夫ね」

暗に自分の妹は山猿のようだからラルド殿も平気だろうと言っているのだろうか。

何も返してこないジヨゼに、ユリザはわずかばかり瞳の色を変えた。

「賭けは私の勝ちでよろしくて？」

「何のことでしょうね」

いきなりの質問だったが、答えの用意はしてあった。

一応疑問の態を取りながらも、ユリザの顔には貴方の負けよと書いてある。

知らぬ素振りを見せながらも、半分負けを認めてしまっている自分があることをジヨゼはよく分っていた。

「認める覚悟をしておきなさい。私は負ける勝負などしませんからね」

笑みを一つ浮かべると、ユリザはまた外交の場に戻るために身を翻した。一歩進んだところで立ち止まると、振り返らないまま告げた。

「ああ、それとアレはまだ有効ですよ。夫には無理だけど、家来にはしてあげるわ」

ジヨゼの脳裏には幼きお嬢様の居丈高な姿が浮かび、思わず苦笑がもれた。

「王女様も覚悟しておくといい。その言葉、翻すことになりますから」

第54話：優先順位

各国の貴族たちの交流は、それなりに穏やかに終わった。

短い時間に、怒りや新たな問題を溜め込んだものもいたようだが、表面上は何も無かったかのように振舞うことに長けている人たちが、互いに相手の不運を祈りながら、「では、よい夢を」と笑顔で去っていた。

二人の将軍と、副官が広間を出た頃には、空は漆黒のマントを被っていた。

廊下を歩きながら、国境付近の状況について話している将軍の横で、ユーリが、声を上げた。

「キース将軍！ 不審な人物が」

確かに廊下の向こうから、よろよろと怪しげな人物がこちらへ向っている。

ぼさぼさの髪の上には何故か、今手折ったばかりのような瑞々しい花が飾られ、異彩を放っている。

足元はおぼつかず、今にも倒れてしまいそうだ。

眉間に皺を寄せるラルドの横で、ジョゼは噴出した。

「嬢ちゃん」

のろのろとあがった顔には、疲労がどつぷりと浮かんでいる。思考能力は働いていなかったようだが、ジョゼの顔を認めると、目がぱつちりと開いた。

「お前の知りあいか？」

ラルドの言葉に、そういえば陽炎の連中はセイラに会っていないかったかと思ひ至り、説明しようとしたのだが、果たして目の前の不振人物が隣国から来た王女様に見えるかどうか。
見えようが、見えまいが事実なので仕方ない。

「セイラ・リユーデリスクリーズ・エスタニア殿だ」

ラルドとユーリは、まるでジョゼが意味不明な呪文でも唱えたかのように、ぽかんとした顔になった。將軍と副官が同時にこんな顔を晒すことはあまり無い。陽炎の連中に見せてやりたいものだ。立ち直りが早かったのはユーリの方だ。先ほどユリザにあってしまったラルドは、当分無理かもしれない。

「お初にお目にかかります。セイラ様。こちらは陽炎の將でラルド・キース殿です。あたしはキース將軍の副官を務めておりますユーリと申します。以後お見知りおきを」

さすが副官。いまだ呆けている上司の名も告げておいた。

「セイラです。よろしくね。ラルド、ユーリ」

あまり褒められた格好ではないことを除けば、普通の少女だ。差し出された手を取りながらユーリは不審者扱いをしたことをこっそりと詫びた。

「その格好はどーしたんだ。嬢ちゃん」

いくら、ジョゼでも別にいいだろうと言える格好ではない。

「ああ、アリーがねドレスを……」

その言葉に、今まで固まっていたラルドとジョゼの肩が同時にはねた。心なしかユーリの頬も引きつっている。

「知り合い？」

「お菓子職人のアリー殿でしょうか？」

「そう」

忘れるはずも無い。あれは三年前の入隊試験の時のことだ。

両軍共に、より良い人物に入ってきて欲しいという想いは変わらず、毎年のように新人争奪戦を繰り広げるのだが、その年は大当たりの人物がいたのだ。

鋼のような肉体に、頭をピンクに染めてくる度胸。

今でこそ、髪を染める化粧法があることが知られているがアリオスでは体の色を変えることは好ましくないとされている。

当然ピンクの頭は非難の対象だったが、それをものともしない強い精神。

心体そろったアリーを両軍の将が見つけてのは同時だった。

「月影に來い」

「陽炎にはそなたが必要だ」

軍の二大トップにそう言わしめたアリーは、別の情熱を滾らせた瞳で二人を睨みつけると、吼えたのだ。

「何いつてるのよん！ 私は最高の菓子職人になるために生まれたの！ そんな血なまぐさいこと出来るもんですか。私、職人の試験を受けに來たっていうのに、どうしてむさ苦しい男共しかいないのよー！」

怒りをあらわにしたのは両軍の兵士たちだ。將軍じきじきの言葉になんて事を言うんだ。むさ苦しいだと。なんだその髪は。言い分は様々だったが、血氣盛んな若い兵士たちはアリーにつかみかかった。驚くべきは、それからだった。

毎日しごきにしがいた兵士たちが、見事に放物線を描いて放り投げられる様は、いつそ天晴れと褒め称えたくなる。

地面に折り重なった兵士たちの「試験に落ちてしまえ」という怨嗟も届かず、アリーは見事に城の菓子職人になったのだ。

アリーに負けた兵士たちは今まで以上に鍛錬に励み、結果として軍は強くなったのだが、城で菓子を勧められるたびにピンクの頭が脳裏をちらついて複雑な気持ちにさせるのだ。

「いろいろありまして」

ユーリは苦笑いを浮かべるが、その理由を問いただす元氣はセイラには無かった。

「あつ！ キース將軍、報告書がまだですよ」

帰ってきた早々、広間に直行させられたので一行たりともできていない。休んでからでいいと国王から通達があったのだが、陽炎のトップは真面目人間ぞろいなのだ。

ラルドもはつと正氣に戻ると、姿勢を正し深々と腰を折った。

「挨拶がおくれて申し訳ありません。セイラ様。アリオスの住人となる貴女を陽炎は全力を持ってお守りいたします。本日はこれで失礼させていただきます」

「おっ平気みたいだな」

ラルドにはユリザに見せたようなおかしなところはない。まあ、目の前の王女様は山猿よりも厳しい状態かもしれないと忍び笑いをもらす。

きびきびと去っていく二人に手を振りながら、セイラは隣に残った男を見上げた。

「今日はなんだかキラキラしいね。ジョゼ」

いつもは適当に來ている軍服も、今日はきれいに糊付けがされている。

「嬢ちゃんはお口ぽろだな」

「そうだね」

乾いた笑いが漏れてくる。どうにかこうにかドレスは決まったのだが、当日きるのも嫌になりそうだ。

「部屋まで送っていい」

「書庫にハナを迎えにいかなきゃ」

「では、書庫までお送りしましょう」

にやりと笑われ、セイラもふっと笑いをこぼした。疲れきった体がちょっとだけ楽になる。人をふと楽にするジョゼに疑問が解けていく。

「ジョゼとダリアは兄妹なんだってね」

自分のことを棚にあげて、まったく似てないなと思っていたのだが、隙間にするりと入ってくる優しさは良く似ている気がした。

「あいつから聞いたのか？ 父親が違うんでね。あまり似てない」

セイラの考えが読めたというよりも、似ていないという自覚があるジョゼはそう告げた。

「何だ？ 何が聞きたい？」

じつと見上げてくるセイラにジョゼは意地悪く口の端をあげる。王妃の血縁だから將軍の地位にいれる。父親が違う。色々な陰口をたたかれることもある。目の前の少女は何を聞きたいのか。セイラの言葉は想像とは全く異なった。

「ジョゼ、ユリザ姉様に求婚したことがあるんだってね」

セイラは珍しく絶句するジョゼの姿を拝めたのだが、この話を聞いたとき、セイラは息まで止まった。ユリザが結婚を申し込まれたことがあることは知っていたが、その相手が知り合いとなると別だ。

「ユリザ姉様ってどんな人？」

「は？」

ユリザは美しく人の目を引くことを知っている。けれど、セイラにとつは絶対に頭の上がない先生のような存在なのだ。ジョゼは昔、エスタニアにいたことがあったようなので、もしかしたら昔のユリザを知っているのではないだろうか。

「高慢ちきで凶暴なお姫様」

「……高慢ちき」

それが、一度は求婚したことのある相手の評価だろうか。瞬きを繰り返す、セイラにジヨゼは笑みをかえした。

「高慢ちきなのも、凶暴なのも気持ちいいぐらい誰の上にも降りかかるから面白い」

権力者の上にも、供の上にも、そして罪深き血の上にも。

「腹が立つほど自信満々で、本当にそれを成し遂げる実力もある。」

「初めて聞く評価だね」

ユリザの評価は様々だが、悪口満載での賛辞とは珍しい。

「こんなに褒めているのにな。見事に振られたさ。夫には無理だが家来にはしてくれるそうだ」

おどけて言うジヨゼの言葉に、セイラは目を見開いた。

「本当にユリザ姉様がそう言ったの？」

「ああ」

素っ頓狂な声を上げたセイラに、ジヨゼは片眉を上げた。目の前の少女が、何にそんなに驚くのか分らない。あの王女様なら、そのくらいのことを言っても不思議ではないはずだ。

「……そう」

「何だよ」

すでにぐちゃぐちゃの髪をかき回されて、セイラは顔をしかめた。同じようにしてやりたいが、あいにく手が届かない。

「嬢ちゃん？」

腰を低くし、セイラの頬を伸ばすジヨゼの髪のかき回してやった。なかなか楽しい。

「人には優先順位があるんだよ」

分らないといった顔をするジヨゼの頬を同じように伸ばす。傍から見ればずいぶんと奇妙な光景だろう。幸いなことに二人のほかには誰も廊下にはいない。

勢いよく抓っていた指を離して、につこり笑う。

「よく考えなさい」

ユリザの口真似をして、軽やかに歩き出す。

誰もが一番愛する人が伴侶だとは限らないのだ。

高慢ちきで凶暴なお姫様が最も心を許す人が、彼女の権力目当てによってきた夫よりも、命を預けれる家来だとしてもおかしくない。

つかれきっていた体に、ちよつとだけ力が戻ってきた。

振り向けば、分けが分らないといった顔のジヨゼが追ってくる。書庫まで送ってくれるらしい。

楽しさと、ちよつとした不満の混じる二つの足音を聞きながらだと、

書庫までの道のりはあつという間だった。

第55話：月

カナンの部屋では、すでにハナが目を覚ましており、ぼろぼろの姿のセイラにあんぐりと口をあけた。怒りの対象は一緒に入ってきたジヨゼになり、彼は理不尽な怒りに肩をすくめたのだが、髪の乱れ具合の半分は彼のせいなのでセイラは何も告げずに二人の漫才を放っておいた。

ぐるりと見渡してみても、そこにジルフォードの姿は無い。どこに行ったのだろうか。

暖かいカナンの部屋を出ると、書庫の中はひっそりと静まりかえっていた。

セイラの靴音だけが高く響く。

日没からだいぶ時がたったこの時間では、本を借りるために書庫を訪れる者はいないので、明かりももっていない。

けれど、書庫の中は不思議な光で包まれていた。

やっと上ってきた大きな月から降り注ぐ光が天井の色ガラスを通り抜け、青い世界に文様を描き出す。

陽光の下で見るよりも神秘的な空間。

賢人たちの像も厳しげな表情を和らげて、微笑んでいるようにさえ見える。

星の渦に吞まれたようだ。

文様の上でくると回っていると、影がさした。

見上げた天窓の向こうには影になりそうなものなど無かったが、何者かが其処を横切ったのだ。

「ジン？」

いつもの場所にいるとばかり思っていたのだが、まさか屋上にいるのだろうか。

三階まで駆け上がれば、窓がほんの少し開いており、そこから身をさすような冷たい風が入り込んでくる。

冷気が入ってこないように襟を立てると、セイラはゆっくり窓をあけた。

外壁を良く見れば、やっと足をかけられるほどの小さな出っぱりが上へと続いている。

手すりなんて親切なものはなく、一步一步慎重に進めば、一気に視界が開けた。

月光によつて青く浮かび上がった街のところどころには暖かそうな光が煌いている。

視線をめぐらせれば、屋根の隅にジルフォードが座っていた。

風に舞う髪は不思議な光沢を持ち、月光が与えた輪郭が淡く光る。

時折見える、鮮やかな色彩は彼の耳を飾るピアスだ。

夢の中を彷徨う心地だから、足元への注意は疎かになり、一際強い風が吹き荒れて、思っても見なかった方向に体を押されれば簡単に体勢は崩れ、危ないと思ったときには屋根の上を滑っていた。

体勢を立て直すことができぬまま、重力に従って下方に落ちていく体を押し止めたのは、背中に回された二本の腕だった。

あつという間もなく、体が浮くと、暖かなものに包まれ、視界が真っ黒になる。

ジルフォードに抱き込まれているのだと気づいたのは、滑った衝撃で踊る自分の鼓動とは別の音が、額を介して伝わってきたからだ。自分以外が奏でる生命の音に包まれると、どうやら落ち着いていくらしい。

鼓動の音も正常に戻り、お礼を言う余裕も出てきた。

「ジン？」

お礼も言つて、体勢も立て直せる状況なのに、背中に回された腕は外れず、視界も翳ったままだ。

「兄上のようになりたかった」

「うん？」

頭上から降ってきた言葉に、体勢を立て直そうと入っていた力をふつと抜き、全身をジルフォードに預ける。

それと反対に背中にかかる力が僅かばかり強くなった。

「色なしと呼ばれているうちに、本当に魔物になればいいと思うようになった。……だけど、どちらになる方法も見つからなかった」

「うん」

「諦めることを知ったとき、随分と楽になった」

求めるほど辛いから、いつしか気づかないフリをすることを覚え、それが当たり前になっていく。

セイラはただ、ジルフォードの言葉を聞き逃さないように、耳を澄ませた。

ゆっくりと刻まれる心音に、随分長いこと、ジルフォードが彼の言ったとおりの生活をしていたのだと気づかされる。

「セイは怖い」

「……怖い？」

そんなことを思われているなんてショックだ。

静かに聞こうと思っていたのに、つい口を挟んでしまった。

「全部諦めたはずだったのに、望んでなんていなかったのに……」

そう思いこんだはずだったのに、一番深く沈めた願いを簡単に呼び覚ましてしまう。

自分の無力さを知っているから、守るものは母だけにしようと誓ったのに、どうして一緒にいたいと思ってしまうのだろう。

セイラに危機が迫ることは分っていたのに、その思いは薄れなかった。

「セイといると苦しい」

「そんなこと言われると私は悲しい……」

ジルフォードの姿を見たとき、ファナの方が良かったのではないかという思いなど瞬時に霧散した。

一緒に戦うと約束し、アリオスに残りたいと思い、ジルフォードの傍にいようと決心した。

まさか、その相手に怖がられ、一緒にいると苦しいと言われるなんて。

回された腕の感触が優しいほど、悲しくなっていく気がした。

体を離そうと、力を入れるとジルフォードの心臓が高く鳴った。

「……ねえ、ジン」

その一音に意味はあるのだろうか。

「それって私のことなんて嫌いってことか？　一緒にいると苦しくて仕方ない？」

答えは無かった。

けれど、戸惑い、何度か口を開いては閉じている気配が伝わってくる。

「私はジンのこと好き」

見上げたジルフォードの髪も瞳も、月で染まり、近づきたいまでに美しいのに、泣き出す寸前の子供のような雰囲気、ふっと心を緩ましていく。

「だから、一緒にいてよ」

器用に両腕を抜くと、ジルフォードの背に回す。自分が与えられたのと、同じほどの安心を伝えられるように。

「……怖くないからね」

されるがままのジルフォードに安堵するのは、むしろ自分のほうでセイラは唸りように告げた。

ジルフォードが反応を返す前に、ハナが二人を探す声がする。

「下りようか。……満月、落ちてきそうだね」

すくりと立つと、月に手が届きそうなほど近くに見える。

「こんな夜には“ジルフォード”が願いを叶えてくれるんでしょ」

カナンに聞いた満月の夜に現れる“魔物”の話。
こんなに神秘的な夜ならば、何が起こつても不思議ではない気がする。

「ジンなら何をお願いする？」

絡まった髪が、いつもとは違うシルエットを描き出し、月が背後にあるために、表情がよく分らない。

「セイは？」

「ん」。カナンの部屋には、美味しいお茶と甘いお菓子がありますように」

白い吐息が漏れたのは、問いの答えが、あまりにもセイラしかつたからだろうか。

「結果を見に行こうよ」

その願いが叶っていることを知っていながら、二人は小さな階段を下っていった。

第56話：剣の誓い

結果は予想通り、カナンの部屋には人数分のカップが用意されており、暖かそうな湯気を出していた。

ちやつかり席についていたジョゼは、入ってきたジルフォードの表情を見て、驚いた。

ジョゼは長年傍に居続けたカナンほどではないが、ジルフォードの変化が分る。何がとは言えないが、ふと和らいだ気がするのだ。

原因なら明白だ。「ほら、叶ったよ」と喜んでいるセイラだ。

もういいと思った。

どこかで高慢ちきなお嬢様の声がする。

「貴方、いつか本気でエスタニアの者に頭を下げる日が来るわ。」

その言葉に、まだ若かった自分は心底腹を立てた。そんな日は絶対に来ないと言い張ると、彼女は駄々っ子に告げるように声を優しくしたのだ。

「屈辱からではないわ。この人には敵わないと自然に頭を垂れるの。」

それでも、ありえないと言うと彼女は「賭けてもいいわ」と微笑んだ。

今から思えば、馬鹿らしくなるほど不利な賭けだ。エスタニアの人口はササン大陸で一番で、その中で、尊敬に値する人物など、きつといくらでもいるだろう。それでも、自国が一番だと思い込んでいた若造は、頭に血が上った勢いで、その賭けに乗ったのだ。

「まいったな」

弱音など絶対に吐かない口から、その言葉は苦笑と共に零れ落ちた。言葉とは裏腹に嬉しげな気配があった。

「ジョゼ？」

こちらを見つめるセイラと目が合うと苦笑は濃くなった。

アリオスを含めて、尊敬できる人に出会ってきた。けれど、その人物は時に目指す目標であり、競り合う仲間だった。

手放しで、絶対に同じことなどできないと思ったのは初めてだ。

それなのに、どうして相手が同僚に不審者扱いされ、姉に山猿扱いされる少女なのだろう。

頭を下げてもいいとおぼろげに考えていたけれど、その瞬間は、こんなにも脱力感があるものだろうか。

顔を覆った手の隙間から笑い声が漏れてくる。その対象は自分たちなのだろうという自覚はあるのだが、理由が分らず、セイラとジルフォードは互いを見やる。

ハナやカナンに助けを求めても、答えは出ない。

戸惑うセイラの前で、ジョゼは腰から愛剣を抜くと、片膝をついた。その顔から笑みは消え、表情を引き締める。

初めて見る表情だ。

空気が緊張して、ジョゼからは静かな強さが伝わってくる。

これから起こる事態を把握して、カナンははっと息を詰めた。

「見届け人にはカナン殿とハナ嬢を」

「お受けいたしましょう」

「えっ？ あの、いったい何ですか？」

カナンは冷静に答えたが、ハナにはさっぱり何のことだか分らない。それはセイラも同じで、ただジヨゼを見つめるばかりだ。

ジヨゼが鞘から月影を抜くと漆黒が煌いた。

刀身を危なげなく持つと柄に一度額を合わせ、それをセイラの前へと差し出した。

「剣の誓い。共に戦うことを誓う儀式。認めるなら、柄に触れて」

シルフォードが、そつと告げた。

その空間を壊さぬように静かに澄んだ声だった。

剣の誓いはアリオスの軍人ならば、誰もが懂れる儀式。見届け人が必ずおり、選ばれることは非常に名誉なことだ。

王に忠誠を誓うときにも使われ、両軍の将が選ばれ儀式を行うときには何百という見届け人がいるのだ。

今でこそ、仲間同士でも行われるものだが、本来はもっと強い意味がある。

「あなたに私の命を預けます

」この想いが不快ならば、どうぞ切り捨ててください

ハナには何のことだが分らないが、ただその場の雰囲気とても重要なことなのだと察して口をつぐんだ。

見慣れたはずのカナンの部屋が神聖みを帯びていく。

セイラの指先がゆつくりと伸びていく様は、見ていて不思議な高揚感が沸き起こる。

セイラの指先が触れたとき、ほうと詰めていた息を吐き出した。

「これからよろしく。ジヨゼ」

「ああ、よろしくな」

視線はセイラからシルフォードへと移り、かもし出す雰囲気も普段

のジョゼへと戻っていた。

「お前は取ってくれないのか？」

その言葉に、驚き目を瞬いたジルフォードに噴出する。

「全く自分を範疇に入れてなかったのか？ 俺は嫌だっという意思表示かと思っていたのにな」

そもそもジルフォードの驚きは正しいのだ。剣の誓いを一気に二人分すませるなんて聞いたことが無い。見届け人は何人いてもいいが、誓いをするものは一対一が決まりとなっている。

立ち尽くすジルフォードに、「ほら取れ」とばかりに柄を差し出す。取らないと見ると、立ちあがり許可なくジルフォードの胸へと当たった。

「よし成立！」

「……………」

カナンは何度も剣の誓いを見てきたが、あまりの強引さに苦笑がもれた。随分と昔に、自分たちが行った儀式が鮮やかに脳裏に浮かび上がる。

（そう言えば、私もともに剣の誓いをやらして頂いた覚えがありませんね）

このネタで次に何をハマナに届けさせようかと考えながら、若い四人をお茶に誘った。

「誓いの後は酒が定番なんだがな」

「カナンのお茶はおいしいんだよ」

「そうですね！」

先ほどのことが釈然としないながらも、セイラとハナの言葉に同意するように頷くジルフォードを横目に見ながら、ジヨゼは鼻をならした。

「そのようだな」

部屋を満たす香りは限りなく優しかった。

第57話：式

その日は、この時期には珍しいほど青く晴れ渡った空だった。冷たさの中の澄んだ美しさがアリオスを包み込んでいた。何でこんな寒い時期にと思っていた者も雪が朝日に照らされた瞬間に、その美しさに見蕩れたことだろう。

華やかな、けれど疑心と剣呑な空気がねつとりと張り付くような奇妙な空間で式は行われた。

本日の主役が現れたとき、幾人もが目をむき、ため息とも唸りとも取れない複雑な音を喉下から搾り出した。

特に、普段の花嫁の姿を知っているものは、どこから替え玉でも連れてきたのではないかと失礼なことを本気で考えた。

白を基調にしたドレスはアリオスでは珍しく丈が短く、ふわりと広がった裾からは健康的な足が伸び、新鮮さを感じさせた。

ドレスを飾る花は不思議な光沢と色を持ち、貴婦人方に何の花かと疑問を持たせたが、誰も答えを知らなかった。

複雑に結われた髪と化粧のせいもあるが、ゆつくりとした歩みもベールの向こうに見える柔らかな笑みも、目を奪うのに十分なほど美しかった。

視線を釘付けにしたのは花嫁だけではない。

隣を歩く人物にぼかんと口を開けた者も多かった。

魔物とはどんな人物なのだろうと好奇心な笑みを浮かべていたものも、その顔から笑みが抜け落ちた。

「ほう」

「素敵ね」

国王夫婦は壇上へ向う二人へと素直な賛辞を口にした。
やはり白を基調とした服のジルフォードは、冬の化身と言っても過言ではなかった。

巨大な剣を模したモニュメントの下に花嫁と花婿が対峙し、朗々と誓いの言葉が述べられて、肅々と諾と答える場面だった。

けれど、小難しい言葉など右から左へと流れていき、目も眩むような照明の下では、他の色など見えなくなってしまう。
ベール越しに見える紅玉の色。

この瞬間、この位置にいなければ見えない色。
何百人という参列者の中でも誰一人として見る事は出来ないだろう。

「私はこの国の神の名を知らないから」

式を司っていたモーズ・シェリンの誓いの言葉は半ばでセイラによって中断されてしまった。一瞬、何が起こったのか分らなかった彼も花嫁が勝手に話していることに気づき、小さく咳払いをしたが効果は無かった。

「わが国の神の名を持つジンに誓おう」

その声は、伸びやかで参列者の耳にもしっかりと届き、辺りはざわめき始めた。

そんなこと意に介さないとセイラは笑った。

「一緒に幸せを掴もう」

誓いの口付けの代わりに、重ねた手のひらに力を込める。

離れないように、離さないように。

「セイラ様っ！」

進行通り動かないセイラへのシェリンの叱咤は、拍手によってかき消された。

国王が王妃が、両軍の将が手を鳴らし始めると、周りもつられ手を打ち始める。

その音が会場を埋め尽くすほどになったとき、シェリンは肩を落とした。

「これにて、ジルフォード殿とセイラ殿は正式に夫婦でございます！」

やけくそにそう叫ぶと、次に進むべき道筋を指し示した。彼らは、城の外の広場に集まる民衆に挨拶する必要があるのだ。

他国の使者よりもずっと因習に縛られている民衆が、どんな反応を示すか一抹の不安もあるが顔を出さないわけにもいかないのだ。

バルコニーからは街が良く見える。

城門の前には沢山の人が押し寄せ、それぞれ頭上を振り仰いでいた。空の色に惹かれるようにセイラは一步を踏み出した。

風がベールをさらっていき、下の状況が良く分る。

下からはセイラが背後を振り返り、誰かを呼ぶような仕草をしているのが目に入った。

民衆の中に奇妙な沈黙が訪れる。

この日が来るまで、生きた伝説を、アリオスの悪夢をその目で見ることになるうとは誰も思っていなかったに違いない。

セイラの姿が、ひよいと隠れる。

安堵の気配が漂ったが、その行動が呼んでいた相手を連れてくるた

めだと理解したとき、奇妙な沈黙が戻ってきた。

その人物が引つ張られるようにして現れたとき、広場はしんと静まり返った。息苦しい沈黙ではなく、大いなるもに出会ったときに訪れる自然な静けさだった。

白い髪が風に舞う。

ある者からは黒曜石の鋭さが見えただろう。また、ある者からは碧玉の輝きが見えただろう。

次の行動が取れずにいる大人たちの間で、子供たちが歓声を上げた。

「きれい」

「本当に歌の人だよ」

「お城には美しい人がいる

髪の色はアリオスの初雪の色

冬の女神が祝福に雪の色を与えたの

その美しさに微笑んで月が瞳に千の色を与えたの」

誰かだ歌い出せば、その歌なら知っていると合わせて歌いだす。

「満月の日には紫水晶の色

その美しさに春雷^{ハナズリ}が喜んで知恵を与えたの

上弦の月の日には金^{マルス}の色

その美しさに暁^{マルス}が哄笑して力を与えたの」

その色の瞳を見たものは、はっと息をのむ。

自分たちが歌っていることが真実だと知ると、歌声は高らかになった。

「三日月の日には紅玉の色

その美しさに炎が激励に厳しさを与えたの

新月の日には黒曜石の色

その美しさに夜が感嘆し優しさを与えたの

新たな色を発見したものは、新しく歌詞を作れる名誉を得たことだろう。

「泣かないでくれ美しい人

その色を曇らさないで笑っておくれ

太陽よりも輝かしく」

広場にいた皆が歌いだす。

最後の一節を歌い終わるのを厭うように。

「泣いておくれ美しい人

その暖かい慈雨を降り注いでおくれ

月よりも麗しく」

いつのまにか始まった歌が広場を満たし、城壁を軽やかに上ると、セイラたちの耳のもしつかりと届いた。

歌は何度も何度も繰り返された。

「ジンのことだよ」

はしゃぐセイラを見ながら、国王夫婦も柔らかな笑みを浮かべた。幾人かも微笑ましげに耳を傾けていたが、その歌は他国からの使者

に脅威を抱かせた。

名も知られていなかった王子の影響力がこれほどならば、ルーファ王の力はどれほどなのか想像も出来ない。

また、アリオスの貴族たちをも心底驚かせた。

今まで邪険にしてきた王子がこれほど、民衆に受け入れられているとは。もしも必要があるならば、ライバルより先に王子に取り入れなければと。

「いい歌だね」

セイラの言葉を肯定するように、わずかに微笑んだ。

陽光のもとでみる微笑は透けるように儚くて、けれど、つないだ手に確かさが安らぎを与えてくれる。

メロディーはすぐに耳に馴染み、セイラの口からも歌が零れ落ちていく。

「泣いていいよって、笑っていいよって。幸せな歌だね」

歌を続けようと思っていたら、額に暖かなものが触れて意識を取られてしまった。

驚いてジルフォードを見上げるも、彼は民衆のほうを見ていて視線が合わない。

もしかして、額に口付けされたのだろうか。

額を撫でてみても分るはずもなく、勘違いだろうかと首を傾ける。

「ジン！」

間違えてもいいと思った。

勢いよく名を呼ぶと、こちらを向いたジルフォードの襟をひっぱり、自分は思いつき背伸びをする。高い踵が少しだけ役に立った。

子供同士がするまじないの様に額に口をつける。
よく眠れるようにとか、幸せになるようにとか意味がちゃんとあつたはずだが、今はただ、嬉しいと伝えるために。

「あら、額に口付けなんて可愛い」

二人を見守っていたダリアは、その瞬間を見逃さなかったらしい。

「ねえ、サンディア様」

ダリアは物陰に隠れるようにして二人を見つめる女性に声をかけた。
前王妃だと思えないほど格好は質素だった。

ここにいることを知っているのは、ダリアとルーフアだけだ。
サンディアは深々と頭を下げた。

側室の息子なんかにといい気持ちなど、とうに霧散していた。
涙があふれて、顔を上げることなど出来なかった。

「サンディア様には、離宮からヤガラの特邸に移っていただきました
よう」

それは離宮よりずっと都に近い位置にある屋敷のことだった。のどかな田園が広がるその地域には、いかな貴族でも自由に立ち入りは出来ない。

幽閉をとくと同じ意味の言葉に、サンディアは瞠目して言葉を失った。

どんな処罰をも覚悟してやってきたのだ。

「そのような……」

「私にも、ダリアにも、セイラ殿にも。そして、ジルフォードにも貴女以外母親はもういないのですよ」

「母親などと」

ルーフアの言葉に、ぎりりと心が痛む。今まで、何一つとして母親らしいことなどしてやらなかったのだ。このはれの舞台でも物影に隠れ、来たことを告げることも出来ない。

「今からでも十分に間に合いますわ。どうか、この受け入れをのんでください」

サンディアの嗚咽と決断は歌声にまぎれ、二人にしか届かなかった。その日、都からは日が落ちてても歌声が消えることは無かった。

このときのことを、『アリオス記』ならびに『ササン大陸年代記』には、若き二人を祝福するために、地を揺すり、天に届くほど歌声が捧げられたたと記されている。そして、『ササン大陸年代記』にはこう続く。「……これがササン大陸二度目の変革期のはじまりである」と。

第58話：転げ落ちる運命の輪

主役に二人が引っ込んだというのに、歌は終わりそうに無かった。なんだかよく分らないが、よくやったと褒められ、誰かさんに、まああ見れるかつこうでしたわと言われた後、セイラがドレスが脱ぎさつて、侍女たちの苦心の作をあつという間に壊してしまった後も、ずっと続いている。

「雪遊びしようよ」

セイラの誘いにジルフォードは何も言わずに外に出てきてくれた。まさか、急にいなくなってしまった主役たちが雪遊びをしているなど、誰も思わなかっただろう。

「春になったら出来ないからね」

雪の玉をせっせと作りながら、セイラは言った。アリオスに春が来るのもう少し先のことだ。雪がとけ、春告げの花が咲くとやっと冬が終わる。春が終われば、新しい年がやってくる。

「まだ、先のこと」

「すぐだよ。アリオスに春がやってくるよ」

空が濃さを増していく。今日は雪を降らしてはくれないらしい。このサラサラの雪と別れの日が来るなんて少し悲しい気がした。雪の山に倒れこめば、ジルフォードが覗き込む。隣を叩けば、ジルフォードも身を横たえた。

目の前には暮れ始めた空ばかり。

「来年も雪遊びしようね」

早すぎる願いに、そつと頷く気配がした。

地下の墓所は普段とは比べ物にならないほど、ふんだんに明かりがともされていた。

若き二人の行く末を祝つてのことかと思われたが、ここで唯一人の老人の顔はどこか暗かった。

始めの番号を刻まれた棺に腰掛けると、上の世界に耳を澄ます。ここにまで、あの歌は伝わってきていたのだ。

小さな音を壁が反響させ、音が棺へとぶつかる。

まるで、棺の住人が歌っているかのようだ。

皺だらけの手が棺の表面をなでた。

「これでいいのかねえ？　よかつたのかねえ。マルスよ」

答えをくれるものは何処にもいなかった。けれど、こんな場所にまで響く歌が、彼の耳には運命の輪が転げ落ちる音のような気がして

ならなかった。

彼が見たおぼろげな未来とは異なつたものがあるのかもしれない。

「いいんだろうね」

そうだとでも言うように、棺が一瞬だけ震えた気がした。

あとがき＋小話

最後まで月神の祝祭、月神の娘と夜の王子にお付き合いくださり、ありがとうございます。

どうか、こうにか最後までこぎつけることが出来たのも、拙い文章を読みに来て下さる皆様のおかげです。

なんか、色々中途半端じゃないかと思われるかもしれませんが、月神の祝祭は、有明の使者へと続きます。

アリオス、エスタニア以外の国の人が出てくる予定です。

相変わらず、更新は遅いと思いますが、「まあ、ついでに読んでやってもいいや」という方は、こちらもよろしくお願いします。

ここで裏話があればという嬉しい意見をいただいたので、小話を。本編に影響は無いので、読まなくても大丈夫です。

好きなのにあまり登場させることが出来なかった人たちを登場させてみようと思います。

筆頭はハマナ・ローランドです。高い地位につけてみたものの、出番少ない……

陽炎の二人も出してみました。

よろしかったら読んでみてください。

小話：それぞれの剣の誓い

1、ハマナ・ローランドとカナンの場合

「と、こんな具合に終わったのですよ」

「あやつのやりそうなことだな」

ジルフォードとジョゼの一方的な剣の誓いの話をするハマナはふと口を緩ませた。

最近、すいぶんと忙しいのだろう。

顔色の悪さが際立っていたが、笑ったことで幾分かましになったよ

うに思えた。

「私たちの剣の誓い覚えていますか？」

お茶を注ぐ音に紛れて響く声は穏やかで、「覚えているとも」と口
にしかけ、ハマナは暫し止まった。

「おや、悲しいですね。忘れてしまったんですか？」

「おっ覚えているとも。あれは……」

「衝撃でした」

にこりと効果音が着きそうなほど、微笑まれてハマナの顔からすー
っと血の気が引いていく。

「顔色が悪いですよ。血行に効くお茶ですから、飲んでくださいね」

差し出されたお茶は、さわやかな香りがするのにな、見た目は煮詰め
た藻が入っていそうなほど不気味な緑だ。

「残さずに」

止めの一言に恐る恐るカップに手を伸ばす。

口に運ぶまでかなりの時間を要したが、味は悪くない。

むしろ好みの味だといってもようのだが、その緑色の物体を体内に
入れているということを認めたくないのだ。

「まさか、貴方の剣が後頭部を直撃するなんて」

ハマナは思わずむせた。

この不気味なお茶で許してくれるわけではなかったようだ。

「見届け人もいない中、いきなり鞘ごと剣を人にぶち当てたかと思うと、これで我らは同士だと叫んだんですよ。貴方」

「ああ……そうだったな」

「知っていますか？ あれは本来命を預けますという儀式なんですよ。相手を撲殺する儀式ではありませんからね」

「……わかっておるわ」

分っていたのだ。カナンが誰とも剣の誓いをやる気がないことを。当時は、国の内も外も荒れており、いつ戦場で死んでもおかしくない状況だった。

彼は気休めのように広がる儀式に意味が無いことを知っていたのだ。それは互いの命を背負う存在を見つけることのできた、最高のときに行う神聖な儀式。

答えなど、分っていたのだ。

けれど、分っている答えに命を賭けてもいいと何故か思ってしまったのだ。

「もう少し、まともにやるつもりだったさ」

あの時、援軍の要請さえ入らなかったら、せめて見届け人を用意する時間ぐらいあっただろうに。

「そうでしょうね。貴方は、形から入るのが好きですから」

「……」

反論の余地も無い。

そう言えば、直接答えなど聞いていなかった。

「残念ですね。もし、正式なものなら、ちゃんと受けたんですけどね」

「はっ？」

「貴方、人が目を白黒させている間に消えてしまっし、返事をする暇なんてありませんよ」

「は？ お、お前受けていたのか！？」

「……いけませんか？」

カナンの笑みが微妙に引きつった。

目の前の人物は断られると思って剣を投げつけたのか。

「いや……」

後頭部への不意打ちがどれほど痛いかわっているのだろうか。

見た目は悪いが、本当に効くお茶で許してあげようと思っていたのに、なんだか釈然としない。

「最近、年のせいか後頭部が痛むんですよ。ハマナ様」

「……」

カナンの笑みに何か感じたのか、ハマナは口を閉ざした。

「お見舞いに、エスタニアの最高級茶葉が欲しいです」

「……セイラ殿も喜ぶだろうな」

他国では賢者とも言われるハマナ・ローランドに乾いた笑み浮かべさせることができるのは、きっとカナンだけだろう。

2、ラルド・キースとユーリの場合

ラルドは差し出された赤い刀身を瞳に写していた。

陽炎の切っ先で作られた飛炎は材質は同じはずなのに、どこか違うきらめきを持っているようだ。

こんな儀式をやるまでもなく、信頼関係は絶大だと思っていたが、改めて愛剣を差し出されると嬉しいような、面映いような不思議な想いが沸き起こる。

あまりに真剣な瞳に笑みが漏れる。

（一緒に戦いましょう）

当たり前だと思った。

（命を預けます）

自分の命は、彼女が副官になったときに、とうに預けている。

答えなど、問われるまでもなく決まっているのだ。

柄に手を伸ばす。

けれど、小さなユーリが膝を着いているので、更に小さく、その上、ナイフほどの大きさしかない飛炎の柄までの長さは、かなり短い。当然、長身のラルドが立ったままで柄に触れるという芸当はできないのだ。

だから、自然に膝をつき、手を伸ばすことになる。

やっと、届く。

そう思ったときに、目の前から柄が消えた。

「キキキッキース將軍！ ダメですよ。あたしになんて膝をつかないでくださいー！」

脱兎のごとく去っていったユーリの背中をあっけにとられたまま見つめながら、ラルドはしばらく動けずにいた。
膝をつかずに、どうすればいいのだ。

「気持ち悪いほど体をやわらかくしてみるか？ キース將軍」

一部始終を見ていたジョゼは、笑わずにはいられない。

見届け人を選ばれたものの、こんなに面白い場面に出くわすとは思っていないかった。

それから数年経つものの、彼らは未だに剣の儀式を終えていない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1046d/>

月神の祝祭 ～月神の娘と夜の王子～

2011年1月13日23時44分発行